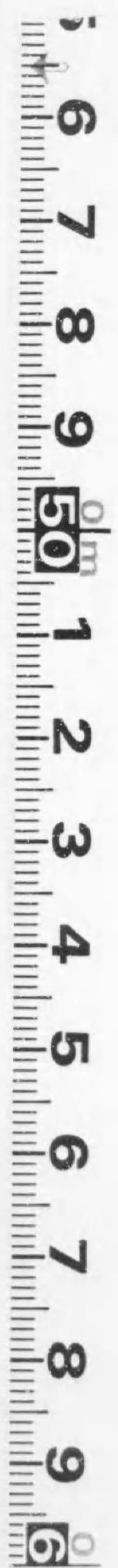


527

68



始





ロベルト・ミヒュルス著

政黨心理の研究

社會學新學說大系 (7)

新潮社出版

西村二郎譯述

大正
14.6.27
内交

序

政治の形式が寡頭主義から民衆主義に、アリストクラシーからデモクラシーに推轉して行く傾向は、何人もこれを否認することが出来ない。然しながらこれは形式についてのみ言ひ得ることであつて、社會心理的の考察は、必ずしも此傾向の現實性を裏書するものではない。

蓋し政治のデモクラシー化といふことは、一面に於いて政治の政黨化を意味する。民衆政治とは政黨政治の別名に過ぎない。然るに政黨なる集團は、それが貴族黨であると民衆黨であるとを問はず、資本家黨であると労働黨であるとを論ぜず、その組織に於いては必ず官僚的貴族的の傾向に墮する運命を免れないやうである。此傾向は、民衆の味方を以つて任じ、デモクラシーの立場に立つと呼號する政黨に於いて、ことに著しいのである。勿論、如何なる政黨と雖も、最初より意識して故意に斯くあらしめようとしてゐる譯ではない、殊に貴族官僚を罵倒し、民衆の味方を以つて任ずるデモクラシー黨に在つては、平素

の時論に對しても先づ自黨の内部に於いてデモクラシーの主義を實行しなければならぬ位のことは感じてゐるのであらうが、如何せん事態の必然は彼等自身の主張を、彼等自身の足もとに於いて裏切るの皮肉を現出せしめなければ已まないものである。其必然は寧ろ社會心理的の行程に求むべきであらう。

イタリーの社會學者ロベルト・ミヒェルスは此見地から、歐米各國の政黨、殊に急進民主的諸政派の内情を解剖して、政黨寡頭主義化の普遍的法則を推論した。彼れに依れば、如何なる政黨も終極に於いて寡頭主義的團體に轉化するを免れぬものであり、ことに民主主義の急先鋒たる社會黨、労働黨に於いて、此傾向は最も素朴的な形態を採るのである。此斷案の科學的當否は暫く措き、彼れの指摘する如き事實が、我々の眼前にも絶えず展開されてゐることは、何人も拒み得ざる所である。

本書はロベルト・ミヒェルスの名著『政黨論』(Robert Michels, Political Parties, a sociological study of the oligarchical tendencies of modern democracy)の中から、特に社會黨労働黨に關する事實的叙述を抄譯したもので、學說的の命題は興味ある事實を叙した此處彼

處に散布されてある。西村君の譯筆は平明を期した點に特徴を求められるが、幾分曖昧と思はれる個所に對しては、私の一存を以つて遠慮なく改訂の獨斷を敢てした。譯者の了解を求めざる所以である。

大正十四年五月十日

高 島 素 之

目次

序

第一章 民衆の指導者欲求……………三

民衆の無關心——少數者の聚團に一任——政治生活の梯形——指導者を熱望——指導者無ければ社會運動無し——指導者の過勞

第二章 指導者たるの資格……………三

第一條件は雄辯——雄辯家の魅力——著名でなければならぬ——外來分子の幻滅——年齢を問はず

第三章 指導者の優越……………三六

専門的首領の必要——黨の首領と黨員との疎隔——缺くべからざる人物——民衆の直接参政は不可能——民主主義の變形

第四章 指導者と新聞……………三六

新聞とセンセーション——新聞記事の署名、無署名——報道局の事業

第五章 民衆に對する指導者の地位……………六

院内代表者の權勢——ドイツの社會黨代議士——院内代表者の權限擴大——宛然專制主義！——勞働組合の指導者——消費組合と生産組合——指導者、民衆相互間の尊敬——人民議決權に反對——昨の從者今は主人

第六章 黨内の紛争……………九

指導者團の孤立——民衆の屈從——民主主義、實は寡頭主義

第七章 政黨則ち我なり(“LE PARTI C'EST MOI”)……………一〇

政府と政黨との酷似——官僚主義者の誠實——指導者の役得

第八章 階級争闘とブルジョワジーに及ぼす崩壞力……………一八

民衆の宿命觀と無自覺——ブルジョワジーの悲痛なる運命——勞働運動の首領は悉くブルジョワ——ブルジョワジーよりプロレタリアへ——自己の權利を無視する者は亡ぶ——物質革命の前に先づ精神革命——階級利己主義——

勸誘は有力の武器

第九章 社會黨々首としてのブルジョワ分子の分析……………一八

指導者の色分——ブルジョワジー魂の遺傳——ブルジョワジー脱却の動機——理性本位と感情本位——有識階級の社會主義者——ユダヤ人と社會主義——ユダヤ人の優越——迫害に對する反動——排ユダヤ社會主義——社會主義に同情する二種のブルジョワ——社會主義の利用

第十章 プロレタリア出身の勞働首領……………一八

有識者の驅除——サンデカリズムとプロレタリア——勞働組合指導者の強點、弱點——二股膏藥の勞働首領——勞働首領の性格一變——勞働階級出はブルジョワジー畑の者に劣る

第十一章 結 論……………一〇

政黨分化作用の過程——民主主義は果して實現されるか？——民衆は先天的に無能力——民主主義は埋藏の財寶——社會教育の急務

政黨心理の研究

ロベルト・ミヒェルス
西村二郎譯述

第一章 民衆の指導者欲求

民衆の無關心

フランスの著名なる戯曲家にして、その餘暇を眞面目な社會問題の研究に供し、これに關する意見を發表した小アレクサンドル・デュマは嘗てかう云つたことがある。人類の進歩が生じたとき、百人中の九十九人までは之れに反對するのが常であると。彼れは尙ほこれに附加へて言つた。——然しそれは別に大したことはない。何となれば、世界の創造以來、その百人中の一人が他の九十九人をして、彼等が今日甚だ良いと思つてゐる總ての改革を爲さしめたからである。しかも、これ等の九十九人は、他の一面に於いて又今後爲さんとする改革に反對するものであると。尙ほ、他の一節に於いて、小デュマは更らに附言して曰く、多數と云ふことは現在あるものゝ證據であるが、これに反し少數とは往々にして將來あるであらうものゝ胚種であると。

現に政治上の權利を享有してゐる市民の中、實際、公務に興味をもつてゐる者は殆んどと

るに足らぬ程少数であると云つても決して誇張の言ではない。人類の大多数にあつては個人の利益と社會と云ふ聚團全體の利益との間の密接な關係に就いての觀念は殆んど發達して居らぬ。實に幼稚極まるものである。多くの人々は吾々が呼んで國家と稱してゐる有機體と、彼等自身の利益、彼等の繁榮、彼等の生活等との間に於ける作用及び反作用に就いては全く了解を缺いてゐる。ド・トクヴールの云つた如く、人類の大多數は、國家の行政の一般的事業に利害關係を有つよりも、自分の田地の傍に道路を通ぜしむべきかどうかを考へることが遙かに重要だと信じてゐる。民衆の多數は、スチルナーと相和して、國家に向ひ「どうぞ私と太陽との間に立ちはだかつて呉れるな」と叫ぶだけで満足してゐるのである。そのスチルナーは、世間の人々が、カントの意見と調子を合せて、公務に興味を有つことは吾々の神聖なる義務であると人類に説き聽かせてゐるのを見て、その迂愚を嘲笑してゐる。「政變に個人的利害關係を有つ人々だけに、それに關係させれば十分である。神聖なる義務なぞと云ふけれども、人が科學者になつたり、美術家になつたりするのが神聖なる義務でも何でもないと同じく、現今は勿論、將來と雖も、その神聖なる義務が國家の事務を色々心配するやうに人民を誘ふことは逆も出來まい。公務に對する興味を有つやうに人民を鼓舞し得るものは唯だ利

己主義あるのみ。事物が甚だしく悪化して來る將來に於ても、矢張りさうであらう」とスチルナーは説いてゐる。

現代の民主主義的諸政黨の生活に於ても、吾々は右と同じ我不關焉的態度の徵候を認めるのである。見よ、黨の決議に參與するものは、ほんの少数に過ぎず、少数も少数滑稽に思はれる程の少数ではないか。總ての政黨中最も民主的だと稱せられる社會黨の爲す最も重要な決議すら、常に極めて少數の黨員の手から出る有様である。政黨生活に於て、組織ある民衆が現實に決議に參與することが、地理上並びに風土上の事情の下に絶対に不可能である場合を除いて考へても、民主權の行使は一般に放棄されてゐる。

かくの如き次第であるから、大體に於て、萬事を決定するのは、その團體の都市議員のみに限られてゐると云つても差支へなく、郊外地方若くは遠隔せる地方都市に居住する議員の義務は著しく制限されてゐる。彼等は必ず團費を仕拂はなければならぬが、選舉に際しては常に大都市に在る團體が豫選した候補者の爲めに投票せねばならぬやうに仕組まれてある。つまり、地方の事情が斯く然らしめることも勿論であるが、それと同時に、一種の策戰的考察が偉大なる影響をなしてゐて、地方議員の利益に反して、彼等の權利も義務も共に制限し

てゐるのである。都市の團員が地方に散在する團員に對して優越権を揮ふ事實は、丁度決定の迅速、行動の敏活を必要とする事實と相俟つてゐる。

少數者の聚團に一任

大都市内に於ては、自發的選任と云ふ方法が實施されてゐて、これに基き、組織ある民衆とは全く無關係に、團員中の或る一部の者だけが會合して、彼等は他の團員よりも更らに一層熱心に、團體の事業に參與する。この内輪の一聚團は、恰かも寺院に參詣する特に信仰の篤い人々の集りのやうに、劃然區別されたる二種の部類より形成されてゐる。即ち、第一には、純真なる義務の觀念に動かされて働く人々、第二には、別に熱心と云ふ譯ではないが、集會に列席することが、單に一の習慣のやうになりゐる人々である。世界の總ての國を通じこの内輪の聚團の人員は頗る少數で、全團員の大部分が團體そのものに對して極めて冷淡であることは、恰かも選舉民の大多數が議會に對して風馬牛の態度を示すに比すべきである。聚團的政治教育が可成り古くから實施されてゐるフランスの如き國ですらも、大多數は團體の策略に關する問題又はその管理に關する問題を議する場合、現實にこれに參與する權利を

放棄し、總てこれ等を内輪の小團體の討議に委すことを常とし、この小聚團は如何なる會合にも常に出席することを習慣とする有様である。

甲の策戦を採るべきか又は乙の策戦に出づべきかに関して、一の團體の領袖間に起る大なる争闘——實は、これ等の領袖が互ひに團體内の優越権を争ふ結果起るのではあるが、しかも、マルクス主義とか、改革主義とか、サンチカリズムとかの名目の下に行はれる争闘の如きは、平團員の有象無象の全然與り知らざる所であつて、彼等は全く除外されてゐるのである。殆んど世界の總ての國に於て、當面の問題、それが政治的、衝動的、感情的の何れであるを問はず（例へば、政府攻撃や、革命的運動の如き）、當面の問題を討議する目的の集會、又は、一般公衆の利益（例へば、北極の發見、個人衛生等の如き）に關する事項を論議する爲めの集會は、その團體の團員のみ出席を許す場合と雖も、殆んど滿堂立錫の餘地なき程の聽衆を牽きつけるに關らず、策戦に關し又は理論に關する問題を討議する集會は、それが團體そのもの又はその主義にとつて死活的の重要さを有つてゐるにも關らず、聽衆の数は遠く前者に及ばぬと云ふ奇觀を呈する。パリ、フランクフォート、オン・マイン及びチュリンはヨーロッパに於ける典型的の大都市であるが、三都孰れもその聚團氣を異にするに關らず、黨員が

黨務に對して、冷淡極まる點に於て、通常集會に列席する氣乗りのせぬ點に於て、全く共通であることは、これを看取するに難くない。誰か一人甚だ人氣のある辯舌家が出演するとか特に彼等の注意を喚起するやうな激動的の辭句、例へば、フランスに於ける「生活難を緩和せよ」の如き、ドイツに於ける「個人政府を倒せ」の如き、著しく神經を刺戟するやうな辭句を掲げるとかせぬ限り、團員の大多數はその會合に出席することを欲せぬのである。殊に滑稽なのは、活動映寫をするとか、幻燈附きの通俗科學講話があるとか豫め廣告すれば、可成り多數を出席せしめることが出來ると云ふ一事である。一言で云へば、通常團員は、耳を以て聽くのではなく、直ちに眼に訴へるもの、又は、大口を開けて熱心に凝視する群衆を牽きつけるやうな觀覽物に對して一の弱點を有するものであつて、彼等にとつては、如何に重要にもせよ、地味にして乾燥なものは少しの興味をも唆らぬのである。

尙ほ茲に附加へて置くべきは、公の集會及び委員會に規則正しく出席する者は、必ずしも、常にプロレタリアとは限らぬと云ふ一事で、殊に、集會地が小都市の場合にこの感を深くする。蓋し、プロレタリアは、その一日の業務を了へれば、唯だ休息することより以外、何事も念頭に置かない。彼は一刻も早く歸宅して、就寝することを唯一の樂みとする。従つて、彼

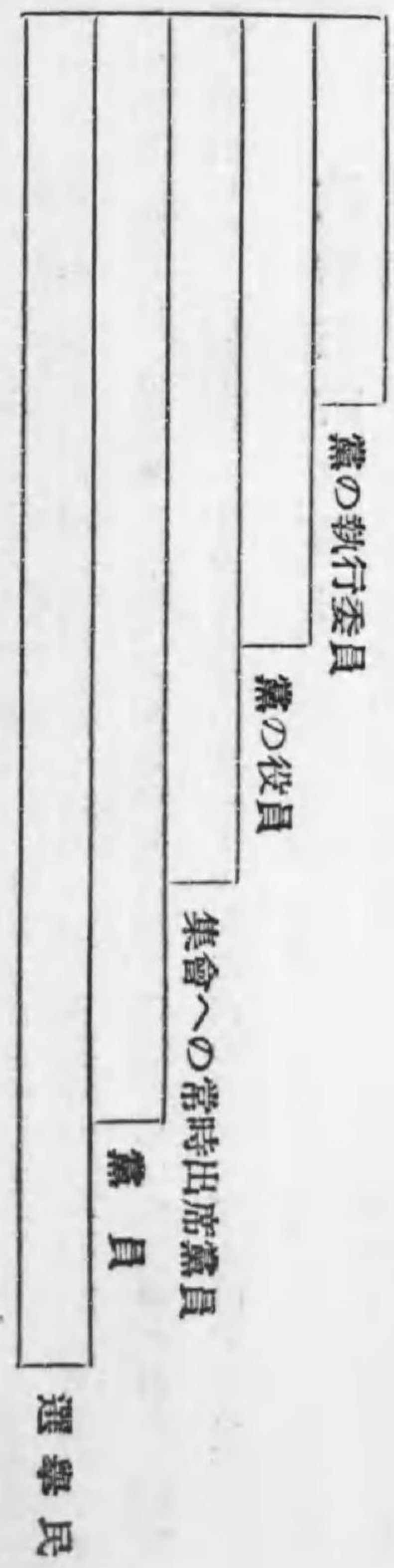
れの座席は小ブルジョワが、新聞又は繪葉書を賣り附ける爲めに入場する者か、番頭か乃至はまだ自分の仲間の間に相當の地位を得られずにある少壯有識者が自分が正真正銘のプロレタリアであると噂され、若くは將來勢力を得る階級に屬する者として稱讚されるのを側で聞いてゐて無性に嬉しがると云ふやうな他愛の無い人々に占められて了ふのである。

政治生活の梯形

國家に起る所と同一の事が政黨生活に於ても起る。兩者共に財源の必要を強壓的基礎の上に置くのであるが選舉制度に關してはまだ何等の制裁も設定されてない。選舉權はあつても選舉の義務は存在せぬ。そこで、この選舉の義務が權利の上に置かれない中は、少數者のみ依然として單りその權利を利用するに反し、多數者は任意にこれを放棄することを續け、依つて、少數者は常に多數者たる冷淡にして無關心な一般民衆に對して、自分等の制定した法律を強制することとなる。その結果はどうであるかと云ふに、民主制の下に於ける政治的類別に於て、政黨生活に參與する者を梯形で示すことが出来る。(圖表参照) 即ち梯の最底部を形成する者は選舉民と云ふ民衆の一大集團であつて、その直ぐ上に重ねられるものは、該政

黨の各地方支部員で、その數は甚だ少く、先づ選舉人總數の十分の一、否、恐らく三十分の一に過ぎぬであらう。更らに、この上に来るのは、規則正しくその政黨の集會に出席する黨員で、その數は尙ほ一層少い譯である。次にその政黨の役員——幹部が来る。最後に、梯形の最高部を占めるものはその政黨の執行委員であつて、その數は約六名、しかも、その中の一部は直ぐ下位にある役員と重複するを免れない。斯く形成せられた梯形に就いて見るに、最高部を成す執行委員は、その數に於ては最も少いに關らず、政黨員としての實力に於ては、これと反比例して、最も強大なのである。即ち、數と實力とは反比例することを明かに示してゐる。

民主制の下に於ける政黨生活者の比例を示す梯形



指導者を熱望

民主主義の政治體制にあつては、民衆の大多數の中、偶々現行の制度に不満を懷き、怨嗟の聲を洩す者もないではないが、大體に於て、多數者は彼等に代つて彼等に關する諸般の事務を處理する煩勞を厭はぬ數名の人々を得れば、それで満足するのである。即ち、一般民衆は勿論、労働黨を組織せる團結の民衆すらも、指導機關の必要を痛切に感ずる。指導者に對する彼等のこの欲求は、その指導者たる人々を心底より尊敬、崇拜し、これを英傑と見做すと云ふ結果を伴ふ。多くの改革の計圖が眞面目に企てられる都度、難破の悲運に遭つた一大暗礁たる舊套主義は今日減退するどころか、却つて、増大しつゝある。この増大は、現代文明社會に於て、分業の制度が彌々その範圍を擴大した爲め、その結果、一瞥しただけでは、國家政治の組織の全體及び更に一層複雑を極めたるその機制を誤謬なく看取することが彌々益々不可能となつたと云ふ事實によつて、これを説明することが出来る。殊に、民衆政黨にあつては、この舊套主義に加ふるに、黨員間に素養及び教育上の著しい差異があると云ふ事實を以てし、現今の政治組織を達觀することは彌々困難を重ねて來た次第であつて、民衆各

個人間の教育素養上のかゝる差異は、彼等が痛切に感じてゐる指導機關に對する欲求に、絶えず増加する動力的傾向を與へるものである。

民衆が政黨指導機關を欲求する傾向のかゝる増進は、世界各國の諸政黨に就いて觀れば、容易にこれを看取することが出来る。勿論この傾向が歴史的性質の偶發事故の如何により又民族心理の影響如何によつて、甲の國と乙の國との間に強弱の程度を異にすることは争ふべからざる事實である。彼等の向ふべき道を指示し、且つ彼等に命令を發すべき何人かを極度に欲求するものは殊にドイツ國民である。ドイツ人のこの特性はプロレタリアをも含む社會のあらゆる階級の通有性であつて、この特性あればこそ、ドイツに於ては、最も強力なる直接覇權が斯くまで燦然として繁榮し得たのである。ドイツの國民は此の如き覇權の發達に必要な總ての豫備條件を具備してゐる。例へば、服従に對する心性的傾向の如き、規律を貴ぶ本能性の如き、一言以てこれを掩へば、プロシヤ練兵係軍曹の感化が悉く傳へられて今日に至り、しかも、その力が今尚ほ依然として衰へないのである。尤もこの遺傳的氣質には美點もある代りに缺點をも伴つてゐる。更らに、ドイツ民族の特性の一は批判能力を全く缺くと殆んど選ぶ所が無い程權力者を信頼する一點に存する。

一概にドイツ國民と云ふけれども、その中で、ラインランド人のみは、ヨリ著しい個性を有つて居り、彼等だけは、或る程度まで、上に述べた概括的批評の例外をなしてゐる。兎に角、ドイツ人の有するかくの如き特性が民主的思想の發達の上に危険であることは夙にカール・マルクスの察知した所である。マルクス自身は最も完全な意味に於ける政黨首領であり、又首領として必要な資格を十分に具備してゐたけれども、彼は團體結束について餘り嚴格な概念を懷かぬやう、ドイツ労働者に警告する必要を感じた。マルクスがシュワイツェルに與へた一書に據れば、労働者が生れ落ちると直ぐから官僚主義的に支配され、それが爲め、組織的の官憲を盲目的に信じ來つたドイツでは、當局者の厄介なぞにならず、自分獨りで歩くことを彼等に教へることが、何よりも急務であると述べてゐる。

指導者無ければ社會運動無し

ドイツの民衆が、平時に於て、通常の政治的生活に對して、餘りに冷淡である爲めに、或る特殊の重大事件が起つた際に、それが政黨の勢力を伸張する上に一の障礙をなすことが往々ある。例へば、民衆はその首領等が奮起して素晴らしい行動に出でんと準備してゐる時、

一四

突然その首領を見捨てないとも限らず、この種の事は抗議的示威運動の畫策に關聯してすらも起るのである。一九〇四年ザルツブルグで開かれたオーストリア社會主義大會の席上、エンボーゲン博士は次のやうな愚痴をこぼした。「政黨の首領が何等かの行動を企てる時には、私は常に心配でならない。如何な彼等でも、これならば了解しさうなものであると思はれる事物に對してすらも、勞働者の興味を喚起することは絶對に不可能であるやうに思はれる。新軍事計畫に對する反對騷擾の際の如きも、相當の大きさの集會を開くことは到底不可能であることが判つた」と。一八九五年、選舉權制限が提議されたとき、サキツニーに於て、社會黨の首領等はこれに反對し、一大騷擾を起さうと企てたが、一般民衆が餘りに無感覺であり、冷淡であつた爲め、折角の企圖も畫餅に歸して了つた。當時新聞の論調は甚だしく煽動的であり、數百萬枚の宣傳ビラが撒きちらされたりしたが、これらの事は何等の効果をも齎さなかつた。眞の騷亂と云ふものは全く起らなかつたのである。各地の集會、殊に隣接地方に於ける集會に來た傍聽者は寥々として晨星の如くであつた。民衆が餘りに落着き拂つて、無關心の態度を示し、それが爲めに、斯くも重大な示威運動を全く何等の効果なく終らしめたと云ふので、社會黨の首領連、——中央執行委員も地方の團體首領も、共に狂氣の如くな

つて憤慨した。尤もこの時の運動が失敗に終つたのは、全く首領等の方に手落ちがあつた爲めであつた。即ち、この選舉權制限より生ずる損失がどれ程であるかに就いて、首領から何等の説明も指摘もなかつたので、黨の陣笠連はその損失が如何に重大であるかを覺らなかつたのである。常に支配され、統治されることにのみ慣れてゐる一般民衆の事であるから、彼等をして運動の仲間入りを爲さしむる前に、先づ十分に彼等を訓練して置く用意が絶對に必要なのである。若しこの豫習訓練を怠つたならば、又若し民衆が少しも了解して居らぬやうな信號を、首領等が突然、想ひがけぬときに示すなれば、民衆はそんなものに何等の注意をも拂はないのである。

民衆が一個の有機體として如何に劣弱なものであるかを示す最も確な證據としては、若し萬一彼等が首領を失つたとすれば、忽ち無秩序極まるだらしない有様で、戰場から蜘蛛の子を散らしたやうに潰走して了ふと云ふ事實がある。彼等は本能的に、更らに自らを編制すると云ふやうな實力は全く有たぬやうに見える。そして、既に彼等の失つた指導者の代理を勤めるに足る能力ある新指揮者を得るまでは、全く何の役にも立たないのである。今日まで度々企てられた同盟罷業や政治上の騷亂が殆んど悉く失敗に終つた原因は、當局者の機宜

に適した措置によつて極めて單純に説明される。機宜の措置とは何か。當局者は民衆のこの弱點を知り抜いてゐるので、騒亂の勃發するや否や、直ちにその指導者を監禁するのが常である。その最も適切な實例は、デンマルク労働運動史の一挿話がこれを提供してゐる。

一八七七年デンマルクにこの動亂が起つたとき、社會主義者の首領ルイ・ピオは先づ最初に告發され、次いで、アメリカに追放されたが、當局者がこの一手段をとつたのみで、當時まだ甚だ幼稚であつた労働運動の發達は、數年間に互つて阻止されたのである。民衆運動は、要するに、人爲的産物に過ぎない。換言すれば、煽動者と稱する孤立した個人の仕事である。従つて、これ等煽動者に向つて高壓手段をとりさへすれば、騒擾を鎮定するのは易々たるものであるとの見解を産んだのは、實に如上の経験そのものであつた。アウフヴァーグレル、ヘツェル、ムヌール、ソビラトリイ等は、孰れも、この見解を持してゐる。尙ほこの説を聽いて、鬼の首でも取つたかの如くに喜んだのは、一部狹量なる保守黨の面々であつた。

然しながらかくの如き見解は、單に民衆の性質をその心底まで觀破してゐると自稱する人の無能力を證據立てたのみで、決して正鵠を得たものとは云へない。二三の例外はあるに

しても、團體運動の過程は徹頭徹尾自然的であつて、決して人爲的ではない。わけでも、運動そのものは全然自然的のものである。偶々その運動の指揮者に首領があたるのは、概して自己の發意に出るのではなく、その時の事情が彼を驅つて指導者たらしめるのである。騒擾軍がこの統率者を失ふや否や、瞬時にして崩潰するのも亦全く自然的の作用である。

指導者の過勞

斯く民衆が指導機關を欲求する傾向、及びその指導機關に依る外部及び上位よりする命令が無かつた場合に於ける民衆行動の不能、これ等二個の事實は指導者たる人々に甚だ重い責任を擔はせる結果となる。されば、現代民主主義の諸政黨の首領等は、一日として安逸を貪つたことはない。彼等の地位は斷じて尸位素餐ではない。彼等は孰れも極度の粉骨碎身の末、初めてその優越の地位を贏ち得たのである。彼等の生涯は不斷の努力のそれである。執拗にして頑強、且つ不撓不屈の社會運動は社會黨の特色であり、ドイツに於て特に然りであるが、未だ嘗て偶然の失敗の爲めに弛緩したことがないと同時に、偶然の成功を獲たればとて、決してそれが爲めに、運動を中止したこともないのである。この點は他の孰れの政黨と雖も、

模倣し得ざる所、世の批評家及びブルジョワジーに屬する反對論者までもこれを賞嘆して措かないのは誠に尤も千萬である。

民主主義の諸團體に於ける職業的指導者の活動は、彼の血を吸り、骨をしゃぶらなければ已まぬ程、彼にとつては殘虐なる主人である。彼は、それが爲めに、常に疲勞の極に達するのみでなく、往々にして、全く健康を破壊し去ることがあり、又、今や分業の制度が斯くまで發達したに關らず、著しく複雑を極めた仕事である。彼は絶えず争闘の爲めに、自分自身の活力を犠牲に供さなければならぬ。そして、健康の勝れぬため、活動を少し弛めねばならぬ場合でも、彼等は自由にさうする譯には行かない。彼に對する民衆の註文は中々減じない。大衆が屈指の雄辯家、名聲噴々たる人々を求める熱望は殆んど狂的であつて、假令この種の人々を得られぬにしても、せめて國會議員の肩書のある人をとの註文である。民主主義の民衆の好物たる記念祭その他の祝賀會に際し、又は總選舉中の集會に於て、代議士の出席を要求する手紙は雨の如くに團體の中央本部に注がれるのである。

のみならず、民衆政黨の指導者たるべき者は屢々、著述を公けにする義務を負はされてゐる。そして彼等が辯護士であるとすれば、黨にとつて重要な種々の訴訟事件に彼等の時間の

大部分を割かなければならない。更に彼等が最高の地位にある者である場合には、雨の如くに彼等の上に注がれる名譽職の爲めに、全く息の根を止められて了はんばかりなのである。多數の公職を一人で兼ねるといふことは、實に現代民主主義政黨の特色の一となつてゐる。ドイツの社會黨に於て、同一の人が同時に、市參事會員、地方議會議員、國會議員等の職を有つてゐることは少しも珍らしくなく、又これ等の公職中の二つを兼ねた上に、新聞の主筆であり、職業組合の幹事であり、消費組合の幹事であると云ふやうな場合も可なり多い。單にドイツのみではなくベルギー、オランダ、イタリー等に於ても亦さうである。總てかう云ふことが首領の名譽となり、與ふるに民衆を統率する權力を以てし、斯くして、彼れは彌々益々缺くべからざる人物と做されるのであるが、又他の一面に於いて、これが彼れをして不斷の過勞に陥らしめる原因ともなるのであるから、餘程圖抜けて健康な人でなければ、夭逝はどうしても免れないのである。社會主義の遊說者及び編制者にして、過勞の結果、普通の疾病又は精神病に罹る者の比率が如何に高いかは、ヨーロッパに於て顯著な事實である。殊に彼等の多くが、後年に及んで、精神に異狀を來すに至ることは注目し値する。現にカルロ・カフ・エロ、ジャン・ヴォルデル、ブルノ・シエンランク、ゲオルヒ・イエク等の人は孰れ

も瘋癲病院で死歿した。フェルディナンド・ラッサレも亦、彼が一身をその戀人ヘレネ・フォン・デニグスに捧げやうと決心した頃には、心身共に虚脱の状態にあつた。かゝる瘋癲化的傾向は、政黨生活がその首領に強制する過勞の結果に外ならぬのである。

二〇

第二章 指導者たるの資格

第一條件は雄辯

勞働運動なるものが初めてこの世の中に生じた當時にあつては、その指導機關の基礎は主として雄辯と云ふ點に存してゐた。必ずしも雄辯が唯一の資格ではなかつたが、最も重きを置かれた所である。辯論の審美的、修辭學的、又は感情的威力を免れることは、民衆にとつてどうしても不可能であつた。流暢にして魅惑的な雄辯は一種の暗示的感化力を示し、これによつて群衆は辯士の意志に絶對服従を餘儀なくされるのである。茲に雄辯と云ふのは、廣義に於けるそれであつて、單に口舌の上のみならず、文藻をも意味する。今や民主主義の根本的特色は、その唇頭より發せらるゝと筆端より描き出さるゝとを問はず、言辭の魔力に民衆を屈伏せしめる敏捷な力に存することが一般に認められて來た。民主政體にあつては、その天才的指導者は辯舌家であると同時に、又有能なる新聞記者であらねばならぬ。フランス

に於けるガンベッタ、クレマンソー、イギリスに於けるグラッドストーン、ロイド・ジョージ、イタリーに於けるクリスピール、ルザッチ等と云ふ風に、茲では唯だ彼等の名を列挙するだけで十分である。民主主義統治下の諸國にあつては、公務を指導するに適した人物であるかどうかを決する唯一の標準は、その辯力であると一般に信ぜられてゐる。民主主義を標榜する大政黨を指導統率する人物に對しては、この準則が尙ほ的確に適用されるのである。民主政體が初めて出現した國に於ては、辯舌の勢力が殊に明瞭に認められた。イタリーの鋭敏なる一觀察家ジウセッパ・ベキヨは一八二六年に述べて言つた。「時間の利用法について斯く慎重であるイギリス人も、雄辯家の演説を聴くことを以て、最も著名な戯曲家の作物が上場されてゐる芝居を観る時と全く同一の快感を與へるものと見做して時間の消費を厭はない」と。その後二十五年を経て、トマス・カーライルも亦同じやうな觀察を試みてゐる。彼れは曰く、「如何なるイギリス人と雖も、先づ談論家の首領として認められるやうでなければ、政治家にも、労働運動の急先鋒にもなれない」と。フランスでも、エルネスト・シャルルは、下院議員の職業別を統計的に調査した結果、少壯にして慍悍、元氣潑刺として且つ進取的な政黨と云ふ點のみについて云へば、代議士の殆んど總てが新聞記者であり、且つ有能な辯舌家であること

を立證した。これは單に社會主義者のみならず、國民主義者、排ユダヤ主義者にも適用される。尙ほ政治労働運動に關する全近代史はこの觀察を裏書してゐる。ジョーレス、ゲードラガルデル、エルヰミ、ペーベル、フェルリ、テュラチ、ラブリヨラ、ラムゼー・マクドーナルド、トレルストラ、アンリエト・ロラン・オルスト、アドレル、ダスチンスキー等、彼等は孰れも力強い雄辯家であり、しかも、各その獨特の調子を發揮してゐる。ジョーレスの雄辯に關し、フランスの一批評家の如きは「彼は雄辯によつて統治する」とまで嘆賞してゐる。

他の一方に於て、ドイツのエドゥアルド・ベルンシュタインの如き偉大なる人物が、その主義上の見解の力強さと偉大なる智能上の勢力とを以てして、何故に比較的世間に知られず居るかと云ふに、それは全く辯舌上の才能を缺く爲めである。又何故にオランダに於て、ドメラ・ニューヴェンフェイスが遂に首領としての地位を失墜したか、フランスのポール・ラファルグの如き、才能と修養とに些かも缺くる所無く、加ふるにカール・マルクスとは姻戚關係にある人物が、社會黨の委員として、ゲードの如き地位に達することが出来なかつたか、彼等が孰れも雄辯家としての資格を有たなかつたからである。一方、ゲードの如きは、科學者たるには距離甚だ遠く、智能の發達せる人物と評することすら出来ないが、雄辯家として彼れの

右に出るものが殆んど無いばかりに、斯くまで重要な地位を占め得たのである。

されば、將來勞働團體の首領たらんとする野心ある者は、辯才なるものゝ如何に必要であるかを十分に認めなければならぬ。一九〇九年三月、オックスフォード大學ラスキン學院の社會主義學生連は、その教授達が學課表を作製するに方り、雄辯實習よりも社會學や純正論理學に重きを置いた爲めに、不満の意を表して、紛擾を起したことがある。かくの如く、政治家の卵たる大學生は、彼等の選擇する職業に於て、雄辯の齎らす利益が如何に大であるかを認めてゐる。

雄辯家の魅力

雄辯家が群衆の心裡の上に占める權勢は、殆んど無限である。民衆が何よりも先きに感得するのは雄辯と云ふ天稟である。音聲の美、その底力、しかも辯士の心の軟靱、聽衆を牽引する恐るべき魅力等は、悉くこれ民衆の深く翫味する所であるが、演説の内容如何の如きは餘り重要視されてゐない。恰かも毒蜘蛛にでも蜚された人間のやうに、今日は東、明日は西と云ふ風に踊り廻つて、民衆の爲めに滔々懸河の能辯を揮ふ者は、熱心にして活動的な同志

と見做されて、到る處大人氣を博するが、これに反したゞ孜々として黨務を執掌し、餘り多くを談じぬものは、輕蔑を以て迎へられ、社會主義者としてはまだ〱磨きの足りない人間と一概に見られて了ふのである。

尤も、音吐朗々たる雄辯の美によつて聽衆を魅惑することは、往々にして、一般民衆にとつては、唯だ幻滅の長い連續の序言を聽かされてゐるやうな感を與へ、さほど彼等の感興を湧かし得ぬことは事實である。何となれば、演説者自身の實際上の活躍がその辯舌の能力と比例を保たないか、然らずんば彼れ自身全く平々凡々な人物であることを自ら證據立てるかからであらう。然しながら、兎も角多くの場合、民衆は演説者の辯力の爲めに全く酔倒し、一度その演説を聽いた後は、久しきに亙つて、その辯士が民衆自身の自我の莊嚴なる映像であるかの如くに思はれて、忘れ難い一種深刻なる印象を彼等に與へる程、民衆は催眠術にかゝつたやうになつて了ふのが常である。辯士に對する民衆の嘆美と心酔とは、これを詮じ詰めれば、彼等自身の個性に對する嘆美と心酔とに外ならないのであるが、この種の熱中の感情は、辯士が民衆の名に於て、換言すれば民衆各個人の名に於て、演説し、行動することによつて、民衆の胸裡に醸成されるのである。大雄辯家の訴へに答ふるに方り、民衆は無意識的

に彼等自身の自我によつて動かされてゐるに外ならぬ。

二六

〇 著名でなければならぬ

或る個人が民衆を支配する地位に達し得る個人的性格は、右の辯舌の力以外にも、尙ほ澤山ある。指導機關の特定の資格とも見做さるべきこれ等の性格は、必ずしも、各指導者が一人で悉くを具有してゐるとは限らない。その數ある性格の中、最も主要なるものは意志の力である。この意志の力だに鞏固であれば、軟弱なる意志を懷く他の個人等を己れに服従せしめることは茶飯事である。鞏固なる意志に亞いで重要なものを擧ぐれば、指導者の周圍にある人々に深い印象を刻み附ける程の該博なる知識、牢乎不拔の自信力、往々にして熱狂主義と殆んど選ぶ所なきまでに進み、しかもその強靱性によつて、民衆思想力、更らに進んでは、指導者が自己の内に存する誇りに民衆をして與らしめることを知る以上、假令それが傲岸なる驕慢を伴つても差支へないとする自負心等であるが、尙ほ、最後に、例外的の場合として、心事の善良及び公平無私の二つも亦重要な資格であつて、これ等の性格は群衆の心の中にキリストの聖姿を聯想せしめ、彼等に於いて、衰退はしてゐても、未だ全く絶滅に歸した譯

ではないところの宗教的感情を覺醒せしめるものである。

然しながら、指導者の資格を形成する性格の總ての中で、群衆に最も強い印象を與へるものは、著名と云ふことに伴ふ權威である。近世心理學が吾々に教へる通り、或る一人が他に及ぼす暗示的感化力中の著しい要素としては、彼が人生の行路を辿つて遂に登攀し得た著名と云ふ絶頂に如くものはない。何人にせよ、若し彼れが既に著名でありさへすれば、その一指を動かすだけで、直ちに政治上の重要な地位を占めることは易々たるものである。更らに、一般民衆の側からこれを觀ても一個の著名なる人物に自分等に關する一切の指導を委ねることは、一の名譽であらねばならぬ。群衆は常に、著名なる個人の支配に自ら進んで身を委ねることを辭しない。月桂冠を戴いて、彼等の眼前に現はれる人物は、先天的の半神半人とすら見做される。若しその人物が彼等の首腦としての地位を占めることを以て自ら甘んずるならば、何處でその月桂冠を得たかは、民衆の間ふ所ではない。何となれば、その個人は必ずや民衆の嘆美と心酔とを受けることを過たぬからである。

ラッサレが、普通ならば、惰眠を貪つてゐるか、さもなれば、ブルジョワ民主主義の轍を履んで、引ずられて行くべきドイツの勞働民衆を呼び醒し、自分の周圍に彼等を集めること

が出来たのは、全く彼れが詩人として、哲學者として、また辯護士として有名であつた爲めに外ならぬ。ラッサレ自身も、著名なる人物が一般民衆の上に及ぼす勢力が如何に多大であるかを熟知してゐた。それだからこそ、彼れは常に自己の黨派に著名の人物を誘引することに努めたのである。ラッサレが芝居掛りの華美な事を好んだことは周知の事實であるが、彼れはその絶倫の精力によつて贏ち得た結果を表現することを熱望し、出來得る限り多數のブルジョワを彼の組織する全ドイツ労働聯盟に引き入れることに努力した。彼れの有名なる最後の演説に於て、彼れは自分の聯盟の中に、ブルジョワ階級に屬する名士が夥しくゐることを、聲高らかに誇つた。又、イタリーに於ても、弱冠にして既に大學教授となり、同時にイタリーで犯罪學の新學派を創始した人物として、既に名を天下に轟かしてゐたエンリコ・フエリリは、一八九三年レギョ・エミリヤに於ける社會主義大會に出席したのみで、イタリー社會黨の首領に推薦され、十五年間その椅子に止まつてゐたのである。

これと同様に、人類學者セザレ・ロンプロソも鏘々たる詩人にして著作家たるエドモンド・デ・アミシスも、社會黨に入黨するや、直ちに名譽ある地位を與へられ、前者はイタリー社會黨の腹心の顧問に選任され、後者は戰闘的イタリー・プロレタリア團の幹部に推舉されたの

である。しかも、これ等著名の人々中誰れ一人として、黨費を仕拂ふ通常黨員となつたものは無かつた、彼等は唯だ集會などの際に、祝辭や祝電を送つて來る位のものであつた。

眼を轉じて、フランスを見るに、夙にプラトン派の哲學者として、且つは左傾政治家として、その名を知られたるジャン・ジョーレスや屈指の小説家アナトール・フランスは、同國に於ける労働運動に参加する決心を爲すや否や、直ちに右の運動の牛耳を執るに至つたが、或る期間試験されると云ふが如きことは絶對になかつた。イギリスでも、著名の詩人ウヰリヤム・モリスが四十八歳にして初めて社會主義者となるや、忽ち彼は社會主義運動に於て民衆の大人氣を博したのである。オランダに於ても同じ事である。美しい抒情詩「マイ」の作者として有名なヘルマン・ゴルテル及び巾幗詩人アンリエット・ロラン・オルストが社會主義者の間に嶄然頭角を現はしたのは、彼等がその運動に關係を有するに至つてより間も無いことである。現代のドイツに於て、その名聲の揚れること絶頂に達してゐる大人物にして、社會主義に多大の同情を表するに關らず、まだ正式にこれに入黨する決心を爲さぬ者は必ずしも少なくない。若しゲルハルト・ハウプトマンがその傑作「機織工」に斯くまでの成功を博した直後に、又ヴェルナー・ゾンバルトが、その最初の著作が廣い範圍に亘つて絶大の注意を喚起し、洛

陽の紙價を高からしめたとき、ドイツ社會黨に正式に参加したならば、彼等は恐らく、今時分は、ドイツの有名なる社會主義者三百萬人の最も名譽ある首領の中に算へられてゐたであらう。一般民衆の眼を以てこれを觀れば、既に或る點に於て、人口に膾炙してゐる姓名を有することそのものが、それだけで、民衆の指導者として最も立派な肩書をなすのである。

政黨の首領中には、その黨員として、多年惡戰苦闘を續けた結果、唯だその政黨の木ツ葉黨員の間にのみ名譽を贏ち得た者もあるであらう。然し、今日までの經驗に徴するに、民衆は常に、それ等の人々よりも既に他の方面に於て名譽と榮光とに満たされた揚句社會黨に参加し、従つて、政黨、政派に關係無くとも、その不朽の名に對して當然權利を主張し得る首領の方を本能的に良しとする傾向を有つてゐる。蓋し、社會主義以外の方面に於て贏ち得た此の如き名譽は、民衆にとつては、社會主義の範圍内に於て、彼等の目の前で贏ち得たものよりも價値が大であるかの如くに思はれるからであらう。

外來分子の幻滅

以上と關聯して、二三の附隨事實を茲に述べるのも強ち徒爾ではあるまい。政黨の爲めに

極力盡瘁したのみの爲めに高位を占めることが出来るに至つた指導者と、既に他の方面に於て贏ち得た權威を携へて、後れ馳せに入黨した首領との間には、忽ち衝突を起し、往々にしてこの二派の間に長時日に亘る勢力争ひを生ずることは歴史が吾々に教へる所である。かゝる争闘の動機としては、一面に於ては、羨望と嫉妬、他の一面に於ては、横柄と野心を擧げることが出来る。尙ほ、これ等の主觀的素因の外、客觀的、政策的素因も亦同時に作用してゐるのである。

蓋し、政黨の範圍内に於てのみ著名となつた大人物は、これを外來分子と比較すれば、直接實際的なものに関しより、鋭敏なる感覺を有つてゐる。例へば、群衆心理をより、良く了解してゐる。勞働運動の歴史に就いてより、深い知識を有つてゐる。そして、多くの場合黨の綱領の理論的内容に關してより、明晰なる觀念を有つてゐる。

かく二派に分れた首領と首領との間に於ける確執には、殆んど常に二個の局面が判然と看取される。新來の首領は先づ舊來の黨首の權力下から民衆を離反せしめ、斯くして、新たな教義を彼等に向つて説くことに着手する。しかも、民衆は有頂天になつて熱狂的にその新しい教義を認容するのである。しかしながら、この新教義たるや、大體に於て今日の謂は

ゆる社會主義なるものを形成する思想の寶庫を以て、照明されることはない。その代りに、政黨の教義を説く新來の大人物等が嘗てそれによつて名聲を贏ち得た科學なり美術なりから抽出した思想を以て、これを照明するのである。しかも、これに耳を傾ける一般民衆と云ふ無定形の團體が熾んにこれを讚美するので、新しくはあるが、その教義は一種暗示的の重みを附せられる。それと同時に、一方舊來の指導者の方では、この有様を見て、怨み骨髓に徹し、最初は防衛的の陣形を構へたものが、今度は愈々露骨に挑戰的態度に出づるやうになる。數に於て、舊來の首領は自然的に有利の地位に立つこととなる。新來の首領は、固より偉大なる人物の事でもあり、かくの如き奇襲に逢ふ氣遣ひは無いとの迷想を懷き易い爲、竟に争鬪に敗北して、陣門に降服すると云ふやうなことにもなる。舊來の指導者は、長い間根氣よく政黨内で年期奉公を勤めた御蔭で、現在の高位を占め得たものゝ、元來凡庸な才能の人物でないとは限らない。新來の指導者の目から觀れば、かくの如き黨内の年期奉公には、別段智能上の秀でた性格も不要であらうと思はれるので、自然彼等よりも高い立場から見下すと云ふ心持になつて、輕侮と同情との混淆した感情を以て舊來の首領に對するのである。然しながら、政黨と無關係に有名になつた人物が、この種の暗鬪に必ず常に敗北するのは

何故であるかと云ふに、其處には又別に理由がある。詩人、審美學者、科學者たる彼等は、黨の一般的規律に服従することを潔しとせず、進んで民主主義の外面的形體に攻撃の矢を放つを常とする。然し、これが彼等の地位を弱める原因である。何となれば、民衆は、假令民主主義の代りに寡頭主義によつて統治されるときですらも、かくの如き形體を固執するからである。その結果はどうかといへば、彼等新來者の敵手たる舊來の首領は、彼等に比して、より以上眞正なる民主主義者でないことは分つてゐるが、何分民主主義の外觀を粉飾して置くのに妙を得てゐる爲めに、民衆の信用は自然その方に集まると云ふ結果を生ずる。尙ほ附言すべきことは、偉大なる人物と云ふものは、兎かく組織力に對抗することに慣れてゐないと云ふ一事である。従つて、少し長い時日に互つて、抵抗が彼等の上に強壓されると、直ちに意氣銷沈して了ふのである。斯く説き來ると、何故に、外來の首領が、嫌疑と幻滅との末往々にして、かゝる暗鬪を中途で諦めて了ひ、又は新たに私黨を組織して、別個の政治運動を開始するに至るかを容易に了解する事が出来るであらう。彼等の中偶々隱忍して、その黨に踏み留まる者があつても、何れの日かに、舊來の首領の手に顛覆されて、背後の方に追ひ遣られて了ふことは數の避け難い所である。フェルディナンド・ラッサレの偉大を以てしても、

尙ほ且つ、ユリアス・フールタイヒと云ふ、以前は眇たる労働者に過ぎなかつた男に意外の勁敵を見出すことを免れなかつたのである。勿論、ラッサレがこの勁敵を厄介拂ひしたことは事實であるが、若し彼が今少し存命してゐたならば、恐らく、リーブクネヒト、ペーベルの兩人を向うに廻して、殘虐なる葛藤を續けざるを得なかつたであらう。ウキリヤム・モリスも亦、イギリス労働運動の舊來の職業的首領と絶縁した後は、ハンマースミスの有識階級より成る小さな護衛隊の首領と云ふ地位に左遷されて了つた。エンリコ・フェルリもその初めイタリーの社會黨に加盟した當座は舊來の首領の執拗なる不信用に會したのであるが、その後に至り、理論上及び實際上の過失ありたる爲め、イタリー社會黨の正式の黨首と云ふ光榮ある地位を永久に奪はれて了つた。更らにオランダのゴルテル及びアンリエット・ロランオルスト兩人に至つては、數年間に互り白熱的の心酔を同志から受けなければならず、結局はその地位を覆へされて、全く勢力の無い閑職に抛り込まれて了つた。對手は無論黨内の舊い名士であつた。

年齢を問はず

かう云ふ次第で、黨外に於て贏ち得た名聲を根據としての黨内の指導權は比較的壽命が短いのである。然しながら、年齢そのものは指導者の權力に關して何等の障壁ともならない。古代のギリシヤ人が云つたやうに、白髪は指導者の前頭を飾らなければならぬ最高の冠である。

然し、今日は時世が大分違つて來て、最も年少な者ですらも忽ちの間に十分學殖を積むことが出来るやうに、學問が何人の手にも自由にされて、有効なる教育手段として用ひられるやうになつて來たから、必ずしも年の功を積まなければ、政黨の首領たるの資格なしと云ふが如き、窮屈な因襲に囚はれざるに至つた。今日では萬事が速成的に修得せられ得るに至つた。昔は經驗と云ふものが老人と後輩とを區別して、前者を後者より優越のものとなした唯一にして純真なる標準となつてゐたけれども、その經驗すらも、今日では、速成的に積むことが出来るやうになつた。

斯くて、民主主義の發達した御蔭ではなく、現代文化の専門的典型が出來たばかりに、年齢と云ふものはその價格の大部分を失ひ、それに搦て、加へて、年齢の爲めに鼓吹してゐた尊敬とか、年齢によればこそ揮つてゐた勢力とかをも同時に失ふに至つた。否、それどころ

ではない。年齢は却つて党内の出生昇進の邪魔となるに至つた。これは、踏み越えて進むべき階段が以前よりも餘程殖えた爲めに、這入るならばなるべく若い時に這入つた方がよい。他の職業に於いても見られるところである。少くとも、組織の良く整つた政黨に於ては、事實動かすべからざる所である。蓋し、この種の政黨には、新黨員が殺到して來るからである。尤も黨の爲めに働いて、鰻上りに上り、その間に老境に入つた首領株はこの限りではない。この點に於ては、年齢は正に優越の一要素をなしてゐる。民衆が老闘士に對して、彼れが長く黨の爲めに奮闘して呉れたことに多大の感謝を拂ふ事實は姑らく措くとしても、老黨首は自分の商賣を餘計に良く知つてゐると云ふ點に於いて、若い者よりも利點を有つ。

デヴキド・ヒュームは言つた。農業の實際に於て、老農夫が年少者よりも優越となされる理由は、農作物の發育に及ぼす太陽、降雨及び土壤の影響に於ける或る程度の劃一性を良く呑込んでゐる點と、これ等の影響を決定し且つこれを制導して行くことを實地の經驗から學んだと言ふ點とに存すると。政黨生活でも、年功者は老農夫と同じ利點を有つ。即ち、彼れは民衆の政治的生活の骨組を形成する因果關係、及び民衆心理の本質を若い者よりも遙かに深く了解してゐるのである。

その結果、老政治家の行動は常に微妙なる認識によつて楫取られて行くが、少壯政黨員にはその眞似が出来ない。

第二章 指導者の優越

専門的首領の必要

社會黨がまだ幼稚な間は、結束の力が弱く、黨員も少くして、その主要の目的は社會主義のいろはを黨員に普及させるのみに止まり、従つて、職業的、専門的の指導者は、この部面に於ける仕事に一種の副業に過ぎざる指導者の數よりも少いのである。然るに、團體組織が漸く發達して來るに伴ひ、黨の内部からと、外界との關係からと、同時に新らしい欲求が絶えず起つて來る。さて、かうなつて來ると、有識者の理想主義や熱心だけでも行けず、さればとて、プロレタリアがその日曜日の閑暇を利用して、ほんの好意的に、黨務を執掌する位では、最早刻下の要求に應ずるに足らぬと云ふ時機が到來することは勢ひの然らしむる所であつて、到底避け難い所である。茲に於てか、臨時の役員は永久性を帯びた役員にその椅子を譲らざるべからず、道樂半分主義に降服せざるを得なくなつて來る。

さて、職業的、専門的首領が現はれて來ると、指導する者と指導される者との間に於ける素養上の差異の如何に等しいかどまざりと目に見えて來る。經驗の示す所に據ると、少數者が多數者を統御することを保障する要素——これには色々あるが、就中著しいのは經濟上の優越と、傳統的歴史的の優越——の中で、先づ第一に擧ぐべきは、指導者の教育程度（智能上の優越）であらねばならぬ。一寸表面を觀察しただけでも、プロレタリアの諸政黨に於ては、教育の點に於て、指導者の方が被指導者よりも遙かに優秀であることが看取される。

教育上の優越と云ふことは、その本質から云つても、純然たる形式的のものである。イタリーのやうに、長く政治的進化の徑路を辿り、心理學的傾向が全國に普く行渡つてゐる結果として、多數の辯護士、醫師及び大學教授その他の有識者が續々勞働黨に押寄せて來て、入黨した國に在つては、指導者が被指導者よりも教育上優越してゐる事實は明々白々である。蓋し、ブルジョワジーからの脱黨者は、彼等が敵（ブルジョワ）の陣營に於て取得し、其處から携へて來た形式的教育を有つてゐる點に於て、偶々プロレタリアに優越してゐる結果、直ちにプロレタリアの指導者たる地位に立つのである。

これ等の新來者が勞働者聚團に及ぼす動力的勢力は、新來者の數が殖えるに比例して減退

するに至ることは頗る明白であると共に、有識者たる醫師や辯護士が廣大なる民衆政黨の核心を爲す方が、多數の有識者が群居して、國粟の背比べ、天狗の鼻突き合ひをして、互ひに優越を争ふのよりも遙かに優勢であることも、これ亦火を賭るよりも明かである。然るにイタリーなどは國情を異にする諸國、例へばドイツの如きにあつては、政黨の指導者の中に少數の有識者がゐるけれども、その大部分はもと労働者であつた人々である。これ等の諸國に於ては、ブルジョワ諸階級は革命的労働者に對して非常に堅固な戦線を張り、従つて、このブルジョワジーからの脱走者が社會主義者の陣營に身を投じても、徹底的な社會的、政治的ボーイコットを受けると云ふ始末であり、他の一方に於て、プロレタリアは、國家の驚くべく堅固なる結束のため、又十分に發達した資本主義的製造工業がその被備者に對して高等知識を要求する結果、著しい程度に於て形式的教育を施されて居る上に、尙獨學によつて益々その學力を増すことに努力してゐるのである。かくして労働階級上りの首領株の教育程度は、彼等の以前の労働仲間の教育程度よりも遙かに進むことになるのである。且つ社會黨の機制が黨内に多くの有給又は名譽職的地位を自由に按排することが出来るやうに形成されてゐるので、労働者を何時までも労働者のまゝにしては置かず、彼等の爲めに處世上の活

路を開き相當に智能上の素養あるプロレタリアを黨の有給事務員に拔擢すると云ふやうな奨勵法を設けてゐる。茲に於てか、獨學を以て労働の傍ら勉學した者は、この奨勵法に基いて黨の事務員に採用され、その生活振りは小ブルジョワのそれの如くなるのである。

斯く境遇が變化して來ると、民衆に負擔をかけて、更らに一層細密な教育と現在の社會關係に關する更らに一層明確な見聞とを取得したいと云ふ欲求を生ずると同時に、それを取得する機會も提供されるのである。そこで、自分等の職業柄と云ひ、且つは日常生活の欲求に追はれて、民衆は社會機制、なかんづく、政治機關の運用に關する深遠な知識を得たいといくら望んでも、彼等にとつてはそれが不可能であるのに、一方労働階級出の首領の方は、幸ひ首領と云ふ新らしい地位を得た御蔭で、公的生活の専門的な詳細の點の總てに通曉し得るに至り、茲に彼れと從來の労働仲間たる民衆との間の知識上の間隔は益々大となり、彼れは愈々平黨員に對する優越の度を増すこととなるのである。政治家と云ふ職業が益々複雑になつて來れば來る程、又社會立法の規則が増加すればする程、政治を了解せんと欲する者にとつては、従前よりも遙かに廣汎な經驗と尙ほ一層該博な知識とが必要となる。斯くして、政黨指導者とその政黨に屬する他の總ての者との間の逕庭は彌々益々幅廣くなり、遂に、指導

者は彼等階級との協同關係を全く忘失して了ふ時機に到達するのである。

かくして前プロレタリアの指揮官と現プロレタリアの平の兵卒との間に、一の新たなる階級差別が生じて来る譯である。労働者が自分等の爲めに指導者を選ぶことは、謂はゞ他日彼等を統御する主なる手段としては、もつと自分等に教育を施すことが急務であると做す新しい主人を自分の手で担ち上げてゐるやうなものである。

黨の首領と黨員との疎隔

これ等の新主人が勢力を揮ふのは、單に労働組合の團體、政黨の行政、又は政黨機關新聞の社内に於てのみではない。それが労働階級上りであれ、ブルジョワ畑の者であれ、孰れにしても新主人は議會に於ける自黨代表權を獨占して了ふのである。

如何なる政黨も議會についての目的を有つてゐる。尤も、唯だ一つ例外がある。それは無政府黨である。彼等は殆んど政治上の勢力を有せず、又偶々彼等が團體を組織すると假定しても、それは彼等の主義を無視したことになる。要するに、かくの如き黨派は、正當なる意味に於ける政黨と見做すべきではない。そこで各政黨はそれ／＼選舉民に訴へ、議會に於て

勢力を占め、他の政黨を凌駕することをその第一目的となし、更らに、最後の目標を政權の獲得に置き、斯くしてそれ／＼法律上の手續を履んで進むのである。革命主義政黨の代表者と雖も、立法議會に議席を有するのは全く右の理由に基く、然るに、この革命主義政黨の代表者たるや、その當初に於ては、全く厭や／＼ながら議會内に於ける仕事を爲すのであるが、後に及んで漸く満足と職業上の熱心とが増加し來り、その結果、次第々々に彼等の選舉民から遠ざかつて行くのである。更らに、彼等が議會に於て決しなければならず、且つその現實の決定そのものが彼等に於て相當の下準備を必要とする如き諸問題が甚だ多いので、従つて、議會に於けるそれ等代表者の専門的能力はめき／＼と増進するけれども、それと同時に、彼等自身と平兵卒たる彼等の同志との間の距離も次第々々に遠くなつて行くやうになる。

こんな具合で、指導者等は、最初素養がなかつた者でも、見る／＼中に素養が附いて來て、一廉の政治家となつてしまふのである。

彼等が政治生活の機微に關して傳授を受ければ受ける程、又彼等が財政や對外政策に關する問題の種々なる情勢に通曉して來れば來る程、彼等指導者は益々貫目が附いて來て、彼等の黨派が議院内に於ける神筭鬼略を試みることを續ける以上、必要缺くべからざる人物とな

るのである。これは全く當然のことである。何となれば、他の黨員の總ては、日々の職業に没頭するのみならず、官僚式の機制たる議會の事に關しては丸で素人であるから、おいそれと云つて直ちに議會に於ける彼等を交代せしめることは出来ないからである。民衆が全く與り知らぬか、又は殆んど全く與り知らざる事柄について、指導者等が特殊の能力を有し、専門的知識を具備することは、聽て彼等の地位の安全を保障することになるが、茲に於いて民主主義なるものゝ根本義と牴觸を來たすのである。

この専門的能力なるものは、指導者を一般民衆の水平線より遙かに高める所以であり、民衆を彼等に從屬せしむるに至る所以であるが、かかる専門的能力に胚胎する勢力は更らに他の要素、例へば、議院内に於ける常務、代議士が議院内に於て取得し得る社會的教育、議院内の委員會に關する特殊の訓練等によつて聲援され、益々力強いものとなる。かうなると勢ひ指導者は議會に於て仕込まれた詭計を、早速自黨の日常生活にまでも應用して見る氣になり、斯くて彼等は自分等の勢力を快しとせざる者の反對運動を巧みに回避することに成功する。元來代議士なるものは、集會の操縦、法律規則の適用及び解釋、機宜に適する動議提出等の奇術を十分に呑込んでゐる先輩である。一言以てこれを掩へば、彼等は老獪なる奇術

師である。彼等は、敵が多數黨である場合、その敵から自黨の爲めに有利な一票でも得んが爲めには、論争點に就いての討議を回避すべく、あらゆる種類の小刀細工を弄することに熟達してゐる。又若し形勢が自黨にとつて益々險惡となれば、多數黨を沈黙せしめる術も心得てゐる。如何なる手段と雖も盡さざるなく、投票によりて一議案を決せんとする刹那、故らに質問を發してこれを遅延せしめると云ふ、巧妙なる、或は寧ろ曖昧極まる手段を用ひるかと思へば、討議中の問題とは實際何等の關係を有せざるにも關らず、強い印象を與へるやうな諷刺を試みることによつて、満場に一種の暗示的勢力を揮ふが如き、又副委員若くは専門委員として、討議中の問題に關する隠れたる事實の總てを熟知してゐる代議士の多くはその演說中故らに岐路に這入つたり、廻りくどい説明振りをして見たり、術語學上の機微に這入つたりする老練家であつて、斯くすることに依つて、最も單純なるべき問題を故らに曖昧模稜の迷路を以て取巻き、自分單りその真相を十分に會得してゐると云ふ有様になる。この調子を以て彼等が民衆に對するとき、その態度は推して知るべきである。即ち、民衆の爲めの「理論的解釋者」と自稱しながら、果して善意を以てか又は惡意を以てか、それは分らぬが、とにかく民衆をして彼等に追従し、彼等を了解することを絶対に不可能ならしめ、斯くして

専門的管理の總ての可能性を回避するを常とする。所詮彼等は民衆を愚にし、民衆を盲目とする魔術使たるを失はない。

缺くべからざる人物

代議士と云ふものは、その辯才により、その特殊の性癖により、その智能的個性、否、時にはその肉體的個性の魅力により、又は政敵と自黨の内部とから同時に贏ち得たる名聲によつて彼等自身の不可解性を益々増進すると共に彼等の特權づけられたる社會的地位を彌々鞏固にするものである。それ故に、若し茲に團結して一團體を形成せる民衆が社會全般から敬意を以て迎へられてゐる自己の指導者を除名でもすれば、忽ちにしてその團體の信用を失墜し、全國に互つて物笑ひの種となるであらう。斯かる場合には、その黨派それ自身が黨首の一人を失ふことによつて一大打撃を被るのみではなく、延いては自黨に對する政治的反動が測知し難い程の災厄を馴致することとなるであらう。一刻の猶豫もせず、除名された指導者の代りの者を見出すことが焦眉の急となつて来る。加之、その團體を形成する民衆が社會的立法の制定、又は一般的政治上の自由の獲得の爲めの争闘に、首尾よく勝利を獲た所以

のものは、一に議會に於ける彼等の舊代表者の個人的勢力の賜物であることを記憶せねばならぬ。況んや除名されたその指導者なるものは、多年に亙る熱心な不斷の努力に依つて、初めて、政治上の情勢に精通するに至つた人物である。更らに、今日その黨首の一人を失ひ、明日直ちに有能なる後繼者を發見することの出来る政黨が何處にあるかと云ふことも、勿論考量に入れなければならぬ。

かゝる事情の下に、民衆は彼等の指導者に、民主主義そのものを破壊するに決つてゐるやうな一の權能を附與しなければならぬ羽目に陥ると同時に、斯くすることによつて、自分等の意志に對する由々しき制限にも反對し得ず、泣寝入りのまゝこれに服従することを餘儀なくされるのである。指導者がその權力を揮ふことが出来る主要なる理由は、彼等が缺くべからざる人物であると云ふ一點に存する。そして、一人の人間が苟くも缺くべからざる者である以上、彼等は地球上のあらゆる君主、あらゆる王侯までも、己れの權力下に壓服することが出来る筈である。勞働黨の歴史は、その首領が勞働運動の根本原則と著しく牴觸し、しかも、その平黨員は首領を失へば到底自ら遣つて行くことが出来ないことを夙に自覺して居り、且つ彼等自身に依つて祭り上げたその地位にあればこそ、首領の取得し得たる幾多の貴重な

資格を不用なりとなすことが出来ぬ立場に自分等が在ることを知り、尙ほ、假令今その首領を放逐したればとて、これに代るべき有能な人物を何處に求むべきか、到底見當も附かぬが爲めに、首領の爲したこの大なる矛盾撞着の論理的結果を引出すだけの決心がつき兼ねて、これを得ずそのまゝに放置すると云ふやうな羽目に立つのである。従つて、議院内に於ける屈指の雄辯家及び労働組合の指導者にして、理論上にも實際上にも部下の黨員と相背離してゐながら、矢張り依然として彼等の爲めに靜かに行動し、彼等の爲めに冷かに思索してゐるものが非常に多いこととなるのである。しかも、これ等の謂はゆる偉大なる人物を首領として戴く一般民衆は、頭腦は混亂し一日として不安の念に襲はれない日はないにも關らず、ただく忍従と隱忍とを以つて指導者の行動を傍觀するのみであつて、誰れ一人として敢て指導者の權能を奪ひ、又は彼等を黨外に放逐するの舉に出得るものが無い有様である。

民衆の無爲無能は政治生活のあらゆる版圖に亙つて、殆んど普遍的の事實であるが、偶々これが彼等の指導者の權力の基礎を一大磐石の上に置く所以をなしてゐる。又民衆の無爲無能は、指導者に與ふるに、實際上及び或る程度までは、道徳上、その行爲を正當ならしめる口實を以てしてゐる。社會黨内の平黨員が彼等自身の利害關係を自考案する能力を缺けば

こそ、彼等に代つて諸事萬般を處理する専門家がゐなければならぬことになる。而してこれが指導者側の權力を揮ふ口實となるのである。

この見地よりすれば、指導者が眞に指導することは、必ずしも常に悪い事だと決つてゐる譯ではない。民衆がその自由意志を以て彼等の指導者を選擧すると云ふ事實は、民衆が指導者の能力を認容し、且つこれを尊重するに必要な能力だけは彼等自身有つてゐることを前提とする。「能力の認容はそれ自身認容の能力を條件とする」とは、これを謂ふのである。

民衆の直接参政は不可能

民衆が政治能力に於て未成熟であること、及び民衆主權の原則を完全に實際に通用するは不可能であること、この二個の事實を認容する結果、著名なる思索家の一部を驅つて、民主主義は民主主義そのものによつて制限されなければならぬと主張するに至らしめた。コンドルセーの如きも亦その一人で、民衆が如何なる事物に對してその直接管理權を放棄すべきかは、民衆自身これを決定すべきであると言つた。無制限の民衆主權と、この謂はゆる主權なるものゝ上に指導者の行使する最も峻酷にして專制的なる後見權とを非論理的に混同するコ

ゾドルセーと同一の精神は、ジャコバン黨員の演説の大部分の骨子をなしてゐる。

この民衆の権利放棄なるものは、結局主權者たる民衆が自ら任意にその主權を放棄することを意味することゝなるであらう。自由民衆政治の原則並びに人類平等の原則を實際に移さんことを主張し、民衆の變り易き意思を以つて理論上最高の法律であるとしたフランス革命は、その國民公會を通して、王政復古を單に主張しただけでの犯人でも、直ちに之れを死刑に處すべしとの法令を制定した。即ち政體の變更と云ふが如き本質的に重要な問題に關しては、さしもの民衆討議權も、戒嚴令の脅威に屈從せねばならぬのであつた。民衆主權論を擁護する上にあれ程熱狂的であつたヴクトル・コンシデランですらも、一見したところでは、政治の機關は、民衆が民衆としてこれを運轉せしむることが可能と思はれるには餘りに馬鹿重いやうに見えることを認容すべく餘儀なくされた。それ故に、コンシデランは主權者たる民衆が原則に於て可決した法律の條文を編纂することをその義務とする専門家の一團を選擧すべしとの提案を出した。ペルンシュタインも亦、通常の人間が無制限民衆主權説を正當なものたらしめるに足る程の政治能力を有つて居やうとは想像出来ぬと云つた。彼れの考察に據れば、民衆の決定すべき問題の大部分は、總ての人々が悉く活きた百科全書とならぬ限り、

少數の人々のみがそれに興味を有ち、それに関する知識を具有するやうな問題のみから成る。そこで、かくの如き問題に關し、用意周到なる批判を加へ得る爲め、それに関する或る程度まで該博な知識を獲得するには、餘程非凡の責任觀念を必要とするのであるが、今日のところでは市民の大多數からこれを期待することは出来ないのである。

カウツキーでさへも、労働運動の前に提出された問題を解決することが如何に困難であるかを認容せぬ譯には行かなかつた。彼れは社會生活の一切の部面が必ずしも民主政治に適合してゐるとは限らず、民主主義は徐々にこれを採用せねばならず、これは利害關係を有する總ての人々が、他人の力を借りずに、獨創的に、總ての重要な問題に對して正當な批判を加へる能力を得るに至らぬ中は、民主主義なるものは到底完全に實現されるべきものでない所を指摘した。彼れは又、民主政治を實現せしめる可能性は、當面の諸問題を決する爲の利害關係者一同の協力が可能となるに正比例して次第に大きくなつて行くであらうとも説いた。

民主主義の變形

上に述べた通り、民衆が政治上の諸問題を解決するに方つて無爲無能であることは、常に

指導者側の認める所であつて、この民衆の無能は支配權を指導者に委することを理論上正當のものたらしめるのである。大人物が社會に於て最大の重要さをもつものであるとの原理を發表したに就いて、トマス・カーライルに負ふ所少なからざるイギリス、又この英傑崇拜主義の原理が、ドイツに於ける如く唯物史觀の原理に依つて全く社會主義の教義の中から削除されて了つたと云ふ程でないイギリスに在つては、社會主義的思想ですらも著しくカーライルの謂ゆる英傑主義の影響を受けてゐるのである。實際、最も相異なる思想傾向を有つた人々をも包含するイギリスの社會主義者は公然と宣言した。——若し民主主義を有効ならしめんと欲するならば、それは溫情的專制主義の形態を帯びなければならぬと。ラムゼー・マクドナルドは曰く、「由來政黨の指導者なるものは、その仕事の計畫を樹て、且つ自己の意志を有効ならしめるだけの權力を有つてゐる」と。これを決定するに特殊の知識を必要とし、これを實行するには或る程度の權能が絶対に缺くべからざるものである。支配上の問題を處理するに方つては、多少の專制主義を用ひることを大目に見なければならぬ。而して又、これが爲め、純然たる民主主義の教義から稍脱線することになるは、已むを得ないことである。民主主義の立脚地よりすれば、なる程純然たるその主義から少しでも逸脱するのは一の弊害に相

違ないが、その弊害たるや必然の弊害である。社會主義は萬事民衆の爲めではあるにしても、決して萬事民衆の手でと云ふことを意味しない。従つて、イギリスの社會主義者は民主主義の濟度を一に指導の好意及びその内觀に委すことを信條とする。

頭數のみによつて決められた多數者は、唯だ大體の線を引くより外何事も爲し得ない。策略上から觀て更らに一層重要な他の總ての點は、萬事指導者に委せられるのである。「新舊社會主義論」の著者アーネスト・ベルフォード・バックスの意見に據れば、その結果はかうなる。極めて少數の個人——約三人位が全政黨の政策を左右するのであつて、社會民主主義者は民主主義者ではない。それは民主主義に到達せんが爲めに戦ふ一黨派たるに過ぎない。換言すれば、民主主義は目的であつて、手段ではない。目的に到達する爲めに用ひる手段が眞に民主主義的であることの不可能は、一種の財政的特色を帯びた企畫としての社會黨の性質を見れば、直ちに看取されるであらう。即ち、社會黨なるものは、假令それが理想的の目的の爲めに創造されたものであるにもせよ、自黨の成功の爲めには常に金力の働きに依頼するばかりでなく、黨の指導者の地位に就き、その責任を負うた人々の力量にも依頼するところの企畫に外ならぬのである。

他の場合と同じく、茲でも亦、指導者なく、統御者なくしては、如何なる企畫と雖も成功するものにあらずと云ふ箴言は眞理であることが判る。産業社會及び商業社會に於けると類似の諸現象を比較して見るに、労働團體の發達に伴ひ、その指導者の價值、重要さ及び權能も亦増大すべきは明白である。分業の原則は専門主義を新たに創造したが、醫學上の職業及び専門化學に於て専門主義が起つたのは、必要に迫られたからであると同じ理由で、必要であればこそ民主主義の政黨に専門の指導者を生じたのであると説明するのは正に肯綮に當つてゐる。

然しながら、専門主義はその中に權能と云ふ意味をも含む。醫者は健康のとき並びに疾病のときに於ける人體に就いて、専門の研究を爲したので患者より餘計に知つてゐるから、患者は醫者の命に従はねばならぬと丁度同じ理窟で、政治上の患者たる民衆は、自黨の首領連の指導に身を委さなければならぬ。蓋し、首領連は平黨員が到達することを不可能とする政治的能力なるものを具有してゐるからである。

斯くて民主主義は最良人物の手に成る所の政治形成なり、賢良政治（貴族政治）に變形して行つて、終局を告げる譯である。物質的にも又精神的にも、指導者なるものは最も有能に

して且つ最も圓熟した者と見做さなければならぬ。これに依つてこれを觀れば、彼等が民衆の先頭に立つて、單にその黨の代表者としてのみならず、彼等自身の個人的價值を誇り顔に認識する個人として、一般民衆を指導することは、彼等の權利であると同時に又義務たるものと見做さなければならぬ。

第四章 指導者と新聞

新聞とセンセーション

由來指導者にとつて、新聞なるものは權力を獲得し、これを保有し、且つこれを鞏固にする爲めの有力なる一武器である。又新聞は個々の指導者の名を人々に膾炙せしめる爲め民衆の間に彼等の評判を播布するに、最も適當なる手段である。一概に労働新聞と云ふが、各労働組合の機關雜誌、及び主として政治上の目的を以て刊行される同種のあらゆる新聞雜誌に、この語を適用することが出来るのである。さてこの廣い意味に於ける労働新聞が、労働黨の指導者の性格に關する讚辭、彼等の公平無私と犠牲的精神、彼等の白熱的な理想主義、これに加ふるに生氣潑瀾たる自信力、何人も奪ふべからざる不撓不屈の執拗性、凡そ大なる労働團體の創成を可能ならしめる唯一の要素たる幾多これ等の性格に關する記事を常に滿載するのは、全く右の理由に基くのである。

資本主義の機關紙が、主として總選舉に際しての日和見主義の動機から書くのではあるが、往々にして社會主義の政黨の首領等に就いて用ひる阿諛的言辭ですら、それが絶對反對黨の新聞の筆に成るにも關らず、社會黨の新聞は喜んでこれを轉載する。そして、これ等の阿諛追従が額面通りの價格で受取られるのか、又は割引して受取られるかは知らぬが、兎にかく社會黨に屬する平黨員の間に分布されると、その賞讃されてゐる指導者の評判を彌が上にも高くし、急にその器量を上げるだけの效力を有つてゐるのである。勿論新聞は極く人氣のある政黨宣傳者が、公會演説や討論會や黨の大會等の席上、聽衆に向つて揮ひ得るやうな直接の勢力を發揮し得ないことは事實である。然し、この弱點がある埋合せとして、口頭で喋舌つたことよりも文字に書いて表はした意見なり記事なりの方が、遙か廣汎な範圍に互つて反響をもつことも、これ亦否むべからざる事實である。

新聞は謂はゆるセンセーションを作ることによつて輿論に大波瀾を湧起せしめる、最も有効な手段として、これを利用することが出来る。ボナバルト主義の一派も、このセンセーションを起すことに甚だ巧妙であつたが、現代の政黨民主主義論者は、これ亦、ボナバルト主義者の擧に倣つてか、センセーションと云ふ一點を以て、彼等の新聞政策の根本的妙諦の一と

心得てゐる。而してこの手段は、民衆の同情を獲り又は繋いだりする爲めに、又新たに何か社會運動の起つた場合これが指導權を自己の掌中に永く握つて置くことの出来るやうに、指導者が屢々用ひる所である。

民主主義の機關紙は、假面を被つたり、又は敵手に對して痛烈なる攻撃を加へる場合にも、首領株の人々によつて利用されるのである。時には政界又は財界の名士の重大なる不正行爲に對し、完膚なきまでの糺弾を試みる爲めにも利用される。これ等の攻撃糺弾は、十分に信憑すべき證據に立脚することもあれば、全く事實の真相が不明であることが初めから判つてゐても、それと知りつゝ、政略上の槍玉に對手を上げることもあり得るが、兎に角、平地に大暴風を起すことに見事成功するのである。尙ほ、時として指導者は彼等の資本主義政敵に對し車夫馬丁も面を背ける程の野卑な惡口雜言を並べ立て、痛烈な誹謗を試み、以て民衆の歡心を買ふ機會を作ることもある。凡そこれ等の手段は、悉く新聞を通して弄せられるのだが、人氣取りを絶對的必要の處世術とする彼等指導者には一々それが多大の効果を奏するのであつて、彼等の賢明にして敏捷なる、よく時と場合とを考へて、これらの手段を自己の環境に順應せしめて、巧みに使ひこなす様は洵に天晴れと言ふべしである。

新聞記事の署名無署名

社會黨の指導者が、その優越の地位を保持せんが爲めに新聞を利用する方法は、勿論國によつてそれ／＼趣を異にする。蓋し各國の風俗習慣に適應することを必要とする爲めである。政黨團結そのもの、及びその團體が揮ひ得る勢力がまだ薄弱な國にあつては、指導者の勢力は直接にして且つ個人的である。その結果、民衆の氣質が未だ個性の尊重を忘れず、強く個人的特色を發揮する國、例へばフランス、イギリス、イタリーなどでは、民主的指導者は自己の筆になる記事に關しては、自己が絶對責任を帯びることを宣明して置き、その記事には必ず自己の署名をなすことを忘れない。されば、假りにパリーの社會黨機關紙「ラ・ソシアリスト」紙上に一記事が掲載されたとすれば、それは多大の注意とセンセーションとを喚び起すであらう。何故であるかと云ふに、その記事そのもの、價値如何は茲では問題でなく、その下に麗々とジャン・ゲードと云ふ署名が、しかも肉太の活字で印刷されてあるが爲めに外ならぬ。

指導者は自分の意見を腹藏なく發表するのみならず、時にはそれを勅令の如き形式を以つ

て掲載し、且つ紙面の中最も目立つ部分にそれを載せ、斯くして彼れ自身の勢力を直接民衆の上に及ぼすことを常とする。これは殊に、審美學的並びに倫理學的見地からして、新聞編輯上の最良形式である。蓋し、讀者は自己に提供される商品の出處を知る權利を有つてゐるからである。しかしこれは、凡そ公的行動には各人が己れの爲した總ての行爲に對し責任を負はねばならぬと云ふ道德上の根本的原則を通用すべきであること云ふ、一般的考察とは全く無關係のものと見做しての話である。尙ほ、將來政黨の指導者たらんと抱負を有する青年にとつて、新聞記事に署名する慣習は、彼の名が廣く一般民衆に知れ渡ると云ふ争ふべからざる利點を伴ふ。而してそれが爲めに、彼等が將來最高の光榮ある地位に登りつめるまで、民衆を代表すると云ふ榮譽の階梯を一步々登つて行く上に、どれ程の便利があるか測知し難いものがある。

更らに眼を轉じて他の諸國、例へばドイツの如きを觀察するに、その國情を異にするだけに新聞記事の發表方法も自らその趣を異にする。前にも述べた通り、當事者を信用すること厚くして且つ執拗なる、恐らくドイツ民族の如きは稀であらう。従つて、二三の卓越した個人の權威を以てその信用を擁護してやる必要はないのである。従つて、新聞記事は殆んど常

に、無署名か又は匿名の下に掲げられる。個人的投稿者は編輯局員の蔭に隠されて了ふ。新聞は執筆者の名を遠く且つ廣く宣傳する役には立たぬ。されば、月極の讀者と雖も、編輯局員に誰れがあるのか全く知らずにある。又知らうとも欲しない。これ即ちドイツの文士、又は著作家の勤める役割が、他の諸國の大部分の執筆者に比べて餘り重きを置かれてゐない所以であり、同時に、彼等ドイツの著作家等が、公的生活の小部分を形成するに過ぎざる事實、及び彼等が極めて僅かの社會的考察しかもつてゐない事實を物語るものである。

然し、かく云へばとて、無署名の新聞は、政黨の指導者が優越を保つ道具として役に立たないと斷言するわけではない。ドイツの新聞記者は彼れの働いてゐる新聞社の編輯局員全體——否、それどころではなく、その新聞を機關とする政黨全體と同一視されるのであるから、彼れの叫ぶ聲はこの集合團を形成する當事者の全力と共に、天下の公衆に訴ふる所があると云ふ結果になる。斯くて彼が個人として懷抱する思想なり、見解なりは、著しく有名なものとなつて、非常なる大勢力を得ると云ふ、合同の力ならでは得られぬ利益が其處に提供されて來るのである。無署名である爲めに執筆者の名が永久に讀者に知られずに終る處れがあると云ふので、ドイツ社會主義の機關紙中の或るものは執筆者の何者であるかを仄めかす爲め

に、その記事の下に署名の代りに執筆者の姓名の頭文字を掲げ置くと云ふ方法を採ることにした。そして此頭文字が誰の姓名を意味するかは、内輪の人々だけには判るやうにしたのである。然し不幸にして、この豫防的手段は唯だ小新聞によつて採用されたのみで、社説なり論文なりを以つて世間に大なる反響を與へる大規模の機關紙にまで、これを採用させることは出来なかつたので、實際上の効能は餘り無かつたと云ふことである。

かう云ふ具合で、今日でもこの無署名主義が依然實施されてゐるが、かくて無名の一編輯記者が自己の名を發表しない爲めに、民衆に對する直接の勢力に於て失ふ所は、新聞社の首領株が一團としてこれを民衆から得ると云ふ結果になる。即ち、一大政黨の名に於てする編輯局の「吾々」と云ふ語は、最も著名な一個人の用ひる「私」と云ふ語よりも遙かに大なる勢力を有してゐる。茲に於てか、政黨（即ち指導者の總和）なるものは、特殊の神々しさを附與されることとなる。蓋し、民衆は斯くして集合的様式の下に發表された記事の背後には、多くの場合に於て、たつた一人の無名の白面青年が隠されてゐるに過ぎぬと云ふ事實を全く知らざるか、又は動もすれば忘れるからである。蓋し、縁の下の力持と評せざるを得ぬ。ドイツでは社會黨の中央機關紙たる「フォルヴェルツ」紙上に掲載される論争的文章、及び他の

記事は、同黨の木つ葉黨員によつて、定期刊行の福音、一枚二錢の新聞に載る讀物の聖書と見做されてゐる。プロイセンに於ては、殊にさうである。若しそれ猛烈なる個人攻撃、人身攻撃の手擲彈を投ずる場合には、この無署名主義は思ふ存分、毒舌を弄せしむる最も便利にして且つ最も誘惑的な機會を出現せしめる譯である。何となれば、無名の名に隠れて、道徳上にも、法律上にも、罪を免れることが保證されてゐるからである。

従つて、無名と云ふ掩蓋が、斯く提供されてゐるのを奇貨措くべしとなして、心事卑劣にして性質怯懦なる輩は、目指す政敵又は私敵に向つて、狙ひを定めて毒矢を放つても、吾身は全く安全であることを狂喜するのである。茲に於てか、吾々は次のやうに云ふことが出来る。攻撃の槍玉に上げられた犠牲者は截然區別されたる四個の理由の下に、劣敗の地位に置かれることになる。即ち先づ第一に、その新聞を手にする黨内の陣笠連は、痛烈なる攻撃の記事を一瞥したとき、右の犠牲者に對する糺彈は、一定の主義又は一の社會階級の名の下に正義の精神を以て爲されたものであると見做し、それは或る上位の一角、即ち無人格的方面から出たものであると考へる。従つて、それは徹頭徹尾眞面目な性質のものであるから、一度びかゝる毒矢の洗禮を受けた以上、對手は到底これを雪辱する餘地をもたぬものであると

見做すやうになるのである。犠牲者に於て第一の弱點。第二に假令その記事が無署名であるとはいつてもそれは集合團體の満場一致的承諾の下に發表されたものと見做すべきであるから、斯くて掲載された該記事に對しては、編輯局全體がその責に任ずる。従つて、編輯局員の總てが筆者と同一意見を持ち、少くとも筆者に左袒するものと見做さねばならず、その結果犠牲者は己れに加へられた故なき誣告に對し、毀謗罪を以て對手を訴追し、損害賠償の要求を爲すことは殆んど不可能であるから、唯だ泣寝入りするより外に途なしと諦めることゝなる。

更らに、讒謗された者は、攻撃者が何人であるかを知るに由なく、如何ともすることが出來ない。若し彼れにして攻撃者の名を知つてゐたとすれば、攻撃の動機が那邊に存するかを直ちに察知することが出来るから、徒らに黑影を對手にして戦ふ必要はないであらう。これ彼れの第三の弱點である。

最後に、彼れが偶然攻撃者の假面を剥ぎ得たにもせよ、新聞の禮讓は彼が當の相手の攻撃者と云ふ一個人に對して論駁の陣を張り、以て自己を防衛することを彼れに許さない。つまり、暖簾に腕押し、對手なきに矢を放つの陋態を演ずることも出來ず、さればとて、新聞そ

のものを全體として攻撃し返す理由も無いと云ふ羽目に陥り、自己防衛の最も有効なる手段の一を剝奪された結果となる。これ實に攻撃犠牲者の劣敗の第四である。

最近次の如き一事件が起つた。ドイツの或る有力な社會黨機關紙の一記者が、同じ社會黨の他の一員に對して痛烈なる攻撃を試みた。そこで攻撃された者は直ちに對手に一書を送りその故なき誹謗を糾問し、己が質問に對し辯明を求めたのである。然るに攻撃者の方は直ちにこれに答へて、この事件に關して互ひに言ひ争ふことはこれで打切りしよう、何となれば、對手は攻撃の記事に對する返答を新聞社の編輯局全體に與へずして、同局の單なる一員に與へたに過ぎぬからであると、實は斯く答へた者こそ、毒矢を放つた本尊であつたのである。斯くてこの場合に於ても、誹謗の犠牲者は屈辱的の退却を餘儀なくされたのであつた。殊に滑稽なのは、攻撃者より辯明の必要なしとの回答を爲すに方り、その理由として明白に記して曰く、對手は「政黨生活の最も初歩的な禮讓の慣律を冒した」から、遺憾ながら要求を拒絶せざるを得ないと。

報道局の事業

ドイツの新聞界に於て執筆者の人格を滅却する右に述べた慣習は、同國の社會黨機關紙と關聯せる一施設を置く上に多大の便益を與へた。右の施設は「報道局」と稱するものである。この報道局は國內數箇處に設けられ、社會黨に屬する若干の記者の手に經營されてゐるのであるが、その仕事は日々特殊の方面、例へば對外政策、消費組合問題及び立法問題等に関する報道を社會黨の諸新聞に供給するにある。この種の機關を設置するに至つた動機は、主として社會黨機關紙の間に瀰漫せる財政緊縮の精神に胚胎するのであつて、この報道局は社會黨の諸新聞に大なる劃一性を與へてゐる。蓋し、これ等の新聞中、二十有餘種は、同一の源泉たるこの報道局から通信材料の供給を受けてゐるからである。然し、これが爲めにこの報道局と聯絡を取りつゝある諸新聞は、孰れも著しくその經費を節約することが出来る譯である。尙ほこの上に、該報道局は或る少數の制限されたる記者の一團が他の獨立の新聞記者に優越することを保障してゐる。尤もこの優越と云ふのは主として經濟的方面に關聯してゐるのである。蓋し報道局の爲めに探訪し、又は記事を書く者は、黨の政治生活に於て華々しい役割を演ずる機會を殆んど有せず、従つて、財政上にも甚だ豊かと云ふ譯に行かぬからである。

兎に角、總ての場合に於て、新聞は常に黨の首領の掌中に握られ、他の平黨員はこれが管理には、一切容喙し得ないこととなつてゐるのである。指導者側と民衆との間に、新聞委員なるものを介在せしめることもある。この委員は、平黨員の委任を受けて、編輯局に對し或る種の監察の任務に服するのであるが、彼等にとつて最も有利な事情の下に於てすら、これ等新聞委員は權力の一小部分を配分されるに過ぎず、それ以上のことを渴望しても無益である。そして彼等は、機宜に關係のない非専門的な補助的政治機關を形成するに過ぎない。概言すれば、新聞と交渉あるあらゆる政治問題を決定するものはこれ亦有給の首領に外ならないと云ひ得るのである。

第五章 民衆に對する指導者の地位

院内代表者の權勢

國際プロレタリアの政治的團體に於ては、指導者中の最高幹部は主として代議士より成る。これが證據としては、現時最も傑出せる社會主義の指導者である者、その當時さうであつた者、及び國會議員として屈指の人々と目された者等の名を列擧するだけで十分であらう。即ち、ペーベル、ジョーレス、ゲード、アドレル、ヴァンデル、ヴェルド、トレルストラ、テュラチ、ケーア・ハーディー、マクドーナルド、パブロ・ナグレシアス。但し、ハインドマンのみは嘗て一回も總選舉に勝利を博したことが無いから、例外としなければならぬ。

如上の事實は、現代の社會黨が孰れも純然たる國會的特色を帯びてゐることを如實に談るものである。議會に於ける社會黨議員は、孰れも自己の屬する政黨に於て、その卓絶せる能力

と俊秀なる手腕とにより、特に著しく頭角を表はした人々のみである。然しながら、黨それ自身が認容し且つ尊重するこの優越性に搗て、加へて、社會主義を奉ずる國會議員が偉大なる勢力を揮ひつゝある事實には、明白なる二個の理由が存する。先づ第一に、その地位の關係上、彼等は能く黨内の平黨員の監視を免れることが出來、殆ど何等の拘束をも受けてゐないのみならず、黨の執行委員の監督からも遁れてゐるのである。彼等が斯の如く比較的獨立の地歩を保ち、他より殆ど何等の掣肘も受けない所以のものは、元來社會黨の院内代表者なるものは、著しく長い任期を以て選舉されたのであつて、彼等自身が選舉民の信認を繋いでゐる間は、何人と雖も、彼等を蹴落して彼等の位置に代ることが出來ないと云ふ事實に胚胎する。

第二には、彼等が當選したその瞬間に於て、既に黨に對する彼等の從屬關係は單なる間接的のものに過ぎない。何となれば、彼等の權力の出處が、選舉權を有する一般民衆、換言すれば、團體を組織して居らぬ民衆にあることは、少し精細に分析して見れば、直ちに看取せらるゝ所であるからである。勿論或る二三の國にあつては、社會黨の院内代表者の享有する上述の如き自黨團體よりの獨立權が、その黨の組織並びに結合の程度如何により嚴緩の差こそあれ、兎に角、或る程度まで制限されてゐることは争ふべからざる事實である。しかも、

かくの如き事情の下にあつても、院内代表者の受けつゝある尊敬と、彼等が享有する権力とは何人もこれを疑ふことが出来ない。蓋し自黨内に於て重なる要職を占めるものは、彼等であり、且つ彼等の有する権力は著しく黨の執行委員のそれを凌駕するものがあるからである。これはなにかんづくドイツに見られる所である。ドイツの院内代表者は、黨の執行委員を兼ねることを法律によつて禁止されてゐるので、動もすればこれ等二群の首領の間に衝突を起して、双方の権能を毀損することを免れないのである。これに反し、例へばイタリーの如きにあつては、院内代表者團によつて推舉された者一人だけは、執行委員の椅子を占めても良いと規定してゐる。然し兎に角、ドイツの如き國に於いては、假令院内代表者と黨の執行委員との間に葛藤があるにしても、畢竟するに議會に於て黨を代表する者の方が、常に優越の地位を占めるのである。

ドイツの社會黨代議士

院内代表者の勢力は、ドイツの社會民主黨に於て特に偉大なものとなつてゐる。これは同國の社會主義者が、議會内に於て取るを常とする所の、自黨に對する態度によつて、明瞭に

立證されてゐる。議會に於けるその代表者が、殆んど何等の非難も受けないこと、ドイツの社會主義者の如きは、世界の何れの國の社會黨に就いても見られない所である。ドイツ議會の社會主義議員は、必ずや物議を醸すであらうと期待されるやうな團體に向つて屢々演説をする。しかも、黨の機關紙上にも、又黨の大會席上に於ても、一言半句の批評若くは非難の聲を聞いたことはない。

一九〇五年ルール流域に於ける炭坑々夫の同盟罷業に關しドイツ議會で討議中、議員ヒューエは社會黨の最高賃銀案に言及して、これを賞讃するのに極樂境と云ふ語を用ひた。しかも、その翌朝同黨の機關紙を見ると、一點と雖もこれに對し悪感情を起したらしい徴候は見えなかつた。ドイツ社會黨は元來總ての軍事費支出に對し無條件的に反對することをその綱領の一となすにも關らず、ヘレロス種族討伐隊を派遣することに就き一百五十萬マルクの第一回支出を議會に於て票決した際、同黨は單に投票を避けることのみを以て自ら甘んじ、その平素の主義主張を自ら裏切つたのであつた。これ同黨が主義に違背した最初の場合であつたが、かゝる驚くべき豹變を敢てしたときに、若しこれが他國の社會黨であつたならば、それこそ黨員の一部は賛成するにしても、他の一部から物凄い物議を起したであらうことは言を俟た

ぬところであるのに、ドイツの社會黨にあつては、僅かに二三名の同黨議員が、恐る／＼抗議をほんの形式的位に試みたに過ぎなかつた。その後一九〇四年のブレイメン大會席上、曩の軍費問題のときの代議士連が釋明を試みなければならなかつたに際し、並みゐる大會出席黨員中彼等の行動に不賛成を唱へた者は殆んど一人も無かつたと云ふ奇觀を呈したのであつた。尙ほ、全國を通じて黨員の数が殖えるに連れて、院内代表團の勢力が如何なる程度まで鞏固になるかは實に著しい現象である。

従前には、今日よりも遙かに重大でない問題が黨と、その院内代表團との間に、より激甚なる争鬭を惹き起した。然るに、今日では、ドイツの社會主義民衆は、彼女が胸中に懐く目的の爲めの天下分け目の争鬭は議會内で行はるべきものであるとの觀念にすつかり慣れて了つた。そして、この理由の下に彼等は小心翼翼として、彼等の院内代表者に面倒を掛けるやうな事は何事によらず避けることに努め、この信念が指導者に關する民衆の行爲を絶えず決定してゐる。従つて多くの問題に關して、院内代表團の行動は實際果斷的となつてゐる。院内團に對する猛烈なる非難は、假令それが社會主義の根本原則に基くものであつても、少しでも院内代表團の地位を弱める虞れがあれば、平黨員連は直ちにこれを斥け否認して了ふの

である。それでも尙ほ、かくの如き非難の言を續けることを敢てする者があれば、直ちに沈黙を強制され、且つ指導者によつて深刻な烙印を捺されるのである。今次ぎに二個の實例を示さう。

一九〇四年『ライプチーゲル・フォルクスツァイツング』紙は『パンの暴利』と題する社説を以つて、稍や語氣荒々しく資本主義の黨派の指導者に對して、その憤怒を洩らしたことがある。茲に於てか、ドイツ帝國議會に於ては、恰かも時の首相ビュロー公が自ら起つてその記事を朗讀し、且つ斯くの如きは新聞の一大罪惡の例證たるべきものであると附言したとき、中央黨及び右黨の辯士は社會黨に對して恐ろしい權幕で憤懣を示した。丁度この事件が起つた際『ライプチーゲル・フォルクスツァイツング』紙の親友と今まで稱してゐたペーベルは直ちに起つて、議會の公開の眞唯中でその記事を否認したのであつた。實はこの場合ペーベルの行爲は、最も完全に確立されてゐる民主主義の傳統と黨の根本原則とに對する重大なる矛盾であつたのである。

又一九〇四年ブレイメン社會主義大會の席上、ゲオルヒ・フォン・フォルマールは黨内の某某黨員によつてドイツ國內で爲された排武斷主義の最初の企畫を公々然と散々に痛罵して完

膚なきまでに至らしめた。フォルマールがこの大膽極まる攻撃演説を終へて、座席に就くや、急霰の如き拍手が起るとともに、列席の委員の大多数は彼の意見に賛成し、残餘の人々からは一言も不賛成の聲が起らなかつた。しかも、排武斷主義は社會主義理論的歸結であり、社會黨と銘打つた政黨としては、排武斷主義の宣傳は確かに最も重要な運動でなくてはならぬ譯である。然るにフォルマールは、若し組織的の排武斷主義宣傳が企てらるべきものとしたならば、陸軍大臣は社會主義の思想を懐くと睨まれた兵士に對する差別待遇に關し、社會黨の代議士が如何に抗議や苦情を申出ても、これを無視するに最も適好の口實を握つて了ふことになるのではないかと説いて、自分の態度が飽くまでも正當であることを辯護したのである。フォルマールは論じて曰く、例へば、官憲がその常套手段たる祕密審問廷を開いて、その結果を地方司令官に移牒すると同時に、入營前屢々社會主義の集會に足を踏み入れることを習慣とし、中には社會主義の地方首領さへしたことがあると知られてゐる新兵の名簿を調製してこれを送りでもした場合に、吾が社會黨の院内代表者が政府に抗議するとしたら、陸軍大臣は即座に、しかも有効にかう答辯するに決つてゐる。——社會主義者は排武斷主義者であるから國家の敵である。國家の敵はそれ相應に出來得る限りの峻嚴を以て、これを取扱はねばな

らぬと。尙ほフォルマールは次のやうに述べて彼れの論を結んだ。曰く、排武斷主義宣傳は、社會黨の代議士が議會に於て、吾々社會主義者は非社會主義者と少しも異らぬ愛國心を以て兵役の義務を果たすものであり、この理由よりして彼等を差別的に待遇するのは、不正の甚だしきものであるとの斷言を繼續することを不可能ならしめるものであると。

院内代表者の權限擴大

世界各國の院内社會主義代表團が、彼等の職權上黨の大會に於ける投票權を得ようとして非常な努力を爲したことは、周知の事實である。ドイツでは、この權利は一八九〇年ベルリンの社會黨大會席上に於て、院内代表團は議會に於ける彼等の行動に關する問題に就いては、單に審議權を有するのみと云ふ餘り重要でない制限を附して認容された。一部の反對があつたにも關らず、この權利は一九〇五年のイェナ大會を通過した新黨則に於て確認されたのである。代議士は假令代議士の資格では投票權を有ら得ないにしても、大會に委員として出席する權利を獲得するにはさまで困難を見出さないのである。嘗てアウエルは、斯くして出席出來ぬやうな代議士は正に餘程ほんくらの者に相違あるまいと云つたことがある。兎に角、

彼等は些細ではあるが、この面倒を切り抜けたのである。斯くて院内代表團は、彼等が屬する椅子の投票によつて協賛された委員としてではないが、彼等の選舉區の選舉民全體の代表者として、彼等の代議士任期間、大會に出席して、黨の最も緊密なる討議に現實的に參加することを認可されたのである。

これ正に、黨の首領としての彼等の地位の明白なる認容、更に進んでは、その首領としての權利が部分的には非政黨の源泉に起源することの認容を意味するものと見做さなければならぬ。同時に、この認容によつて、彼等は黨の平黨員から全然獨立した超同志的地位に昇進したと共に、彼等が議會に議席を占める間は、退任せしめられることのない大會出席委員となり済ましたのである。尤もこの制度は、確かにドイツだけに獨得なものであつて、他の諸國にあつては、同一の規則が大會に列席すべき總ての委員の任命に通用され、偶々その委員たるべき者が院内代表者であるか否とを問はないのである。

例へば、オランダやフランスに於ては、代議士は大會に列席する資格を有し、且つ彼等がその目的の爲めに委員に選任されたものとすれば、その大會に於てのみ投票する權利をも附與されるのである。イタリアの制度に従へば、黨の執行委員及び院内代表團は彼等が或る種

の報告書を提出すべく執行委員より委任されてゐない限り、社會主義大會の席上では發言權を許されないのである。尙ほ、正式に委員に選任されてゐる場合には、投票權を有することフランスやオランダの場合と同じである。

しかも、彼等が種々の問題に就いて他の黨員よりもより大なる能力を有することに鑑み、社會黨の院内代表團は理論上黨の最高裁判所たる大會に於てさへも、優越の地位を占めるものと自認し、従つて完全なる自治權を要求する。院内代表者も亦これに對する決議を與へる爲めに、大會に提出されなければならぬ諸問題の範圍を次第々に制限せんとする自然的傾向に従ひ、且つ自ら黨の運命に關する唯一の裁決者たらんことを欲するやうになる。

現にドイツでは、社會黨に屬する代議士の多數は一九〇三年、院内代表團はその團員の一人をしてドイツ議會の議長副議長の職を引受けしむべきか否か、又若しその職を引受けたとすれば、社會黨出身の副議長は該職に附隨せる慣習に従ふべきか否か、及び裁判所に出廷すべきか否かを、黨の大會から離れて、單獨に彼等自身の間これを決定する權利を要求した。

イタリアに於ては、社會黨及び共和黨の院内代表團はそれ／＼の黨の執行職員から完全に獨立した。又社會黨は該黨の正規の黨員にすらもなつて居らず、且つ若し彼等が地方の社會

主義團體に公然参加するとすれば、彼等の選舉民は疑の眼を以て彼等を見るであらうなどと論ずる代議士を黨員として認容してゐることに對し屢々非難をすら受けたのである。

社會黨及び資本黨の院内首領は、彼等の黨とは何等の關係もない一の密閉團體を構成する權利を取得してゐる。ドイツの院内社會黨代表團は、屢々自己の發意を以て黨内の著しい部派の行動を拒否したが、この種の拒否の中最も著しいのは一九〇四年『ライプチーゲル・ファルクスツァイツング』紙の社説『パンの暴利』事件、及び一九〇七年カール・リープクネヒトの排武斷主義騷擾事件のそれであつた。前者の場合に於ては、『ライプチーゲル・ファルクスツァイツング』紙は須らく五十七名の同志（孰れも院内代表團の團員）の拒否を以て、黨の無限少數者の拒否と見做して自ら慰むべきである。此無限少數者といふ言葉は、フランス革命の直前に於けるシェイエス僧正の歴史的にして且つ典型的に民主的なる警句から得たのであるが、シェイエス僧正は當時次の如く述べたのである。——王の權利は臣民のそれに比すれば、一に對する三千萬の割合を示してゐると。純然たる原理の問題として考察し、且つ社會黨の民主主義的原則を考慮に入れるとき、この場合ラヒプチャヒの新聞は實に急處を突いた譯である。然るに實際問題としては、該紙の論戰は殆んど何等の意味をもなさなかつた。何とな

れば、此方は主義と云ふ全く無效果の權利、先方は指導者と云ふものゝ内に含まれた強者の權利であるから、弱者の權利を以て強者の權利に對抗したとて、到底勝てる見込はないのである。

宛然專制主義

黨の地方支部は、その選出せる代議士の命令に盲従するものである。大會に於ける出席委員の大多數は、一の慣習として、名士の指導を承諾する。一九〇四年のプレーメン大會に於て、ドイツの社會主義者は總同盟罷業の主張を拒斥し、かくの如きは全くの愚策であるとなした。然るに一九〇五年のイエナ大會の時には、掌を返すが如くにその説を變じ、總同盟罷業は黨の正式の武器であるとなしてこれを迎へたのである。又一九〇六年のマンハイム大會に於いては、彼等はこれを理想郷であると言明した。かゝるZ字形的^{ゼット}事態の進展は、大會に列席してゐる委員たちから熱心な喝采を博したのみならず、全國を通じて同志は孰れもこれを賞讃して祝盃を擧げた。然し彼等は何れの場合にも、相變らず批判能力を缺き、無考への熱狂に陥つてゐるに過ぎないことを遺憾なく暴露した。

フランスでは、例のマルクス派がジュール・ゲードの指導の下にまだ一の獨立した政黨を成してゐた頃、同派の幹部を形成する極めて少數の人々は、黨の大會に於て執行委員は正式の手續を履んで選舉されず、拍手喝采裡に大ざつばに任命された位、それ程尊大氣分を以て滲透されてゐたのである。この大ざつばな選任の遺風は、今日も尙ほ同國の聯合社會黨に於てそれを見る事が出来る。現に一九一四年アミアン大會に於て、執行委員の選舉は大會の終局まで延期された。閉會の間際には、列席委員の大多數は既に去り、残つてゐる者も疲れ果てゐた。その際、執行委員の大ざつばな再選が行はれたが、故人となつたフランシ・ド・ブレサンセの代りに一名の新顔が這入つたのみで、再選と云ふのは名ばかり、斯くして最も重要な大會の管理法案が、執行委員全體の間の討議を不可能ならしめる状況の下に、有效のものでされて了つたのである。

平黨員が彼等の指導者に追蹤することを拒むなどは、夢想だに出来ないことであると指導者側では信じ切つてゐた。のみならず、當時にあつては、大會は常に祕密會として開かれ、席上に於ける報告の如きも極端に簡略されて、何人も演說者を阻止する餘地を與へられなかつた有様である。ドイツの社會黨大會に於て、又その種の集會の報告に於て、列席委員の上

下を識別することは頗る容易であつた。即ち、謂はゆる通常委員の爲す報告は、驚くべく簡約されるに反し、大立物の演説は逐語的に一言一句も略さず印刷に附せられるのである。更らに、社會黨の機關紙に於ても、同志の上下によつて手加減がある。アイズナーが主筆をしてゐた當時（一九〇四年）『フォルヴェルツ』紙がベーベルからの書翰を紙上に載せなかつたことがあつたが、その時ベーベルは怒髮冠を衝き、天地を搖がさんばかりの苦情を持込んだ。彼れ曰く、これ正に黨が言論の自由を抑壓するものであると。又曰く、その地位の上下を問はず、苟くも同志から來た書翰は必ずこれを紙上に掲載するのが、同志の根本的權利である。しかも、ベーベルの謂はゆる權利は、實際に於ては黨内に於ける同志の昇進の程度に比例するところの權利であることを、看過することは到底出来ない。ベーベルの書翰が『フォルヴェルツ』紙上に出なかつた事件に關するこの騒ぎは、偶々以て彼れの場合が例外であつたことを證據立てるに過ぎない。

労働組合の指導者

労働組合運動に於ては、指導者の權威的特色と彼等が寡頭主義的に民主主義の諸團體を統

治せんとする傾向とが、政治的團體に於けるよりも更らに一層濃厚である。

労働組合の歴史に記録されてゐる無数の事實は、如何なる程度まで中央集權的官僚主義が元來民主的性質を帯びた労働階級運動を民主主義の軌道から逸脱せしめ得るかを明かに立證してゐる。労働組合の役員は、彼等が代表すると想像される労働者の大多數の賛成せぬ行動を、自ら創意し且つこれを續行することが政治上の労働團體に於けるよりも遙かに容易である。これについては、一九〇五年コロニーニに於ける労働組合大會の二個の有名な決議に就いて語るだけで恐らく十分であらう。

これ等決議の一に於て、指導者は多數者の意見に反對して將來も依然五月一日を以て一般労働階級の抗議的示威運動の定日とすることに反對であると宣言した。又第二の決議は總同盟罷業に就いて討議することを絶対に禁止したものである。これ等及び類似の事件を觀ても、指導者の寡頭主義的行動は、如何に或る一部の學者がその事實を否定せんとしても、十分明かに證據立てられてゐる。

今や多年に亙つて、労働組合同盟諸團體の執行委員は、賃銀引上運動の調律を組合員の爲めに決定する専有權を篡奪し、従つて同盟罷業を起さんとする場合、その罷業が果して正當

であるかどうかを決定する權利をも篡奪せんと努力し來つたのである。組合聯合の指導者が基金を保管する以上——往々にしてこの基金は巨額に上るのであるが——事實上の論點は、この同盟罷業には補助金を支出すべきや否やと云ふ問題に歸着する。ところで、この問題は労働組合に加入してゐる組織された民衆が己れ等の事項は己れ等自身で整理するといふ、一種の民主主義的權利の生命そのものを包含するところの一問題である。指導者が斯くの如き重要な事項に關して決定權を有するものは、自分等を措いて他にないと主張するとき民主主義の原則の本質そのものが既に甚だしく蹂躪されてゐることは明々白々ではないか。この場合指導者等は公々然と寡頭制主義に改宗して了ひ、組合の基金を供給する民衆にはその寡頭主義の決議を認容する義務より外、何ものをも與へないと云ふことになる。

指導者は自己の採つた手段を辯護すべく同盟罷業なるものは餘程慎重に且つ相互歩調を合せて宣言せねばならぬと云ふ最高必要を暗に諷するのであるから、この種の權力の濫用は、策略上の論據を以てすれば、相當に言ひ分が立つかも知れない。彼等は指導者は全國に互る勞力市場の情勢に通曉し、従つて、資本家との争鬭に同盟罷業と云ふ武器を以てして果して勝利を獲る機會があるかどうかを判斷する能力に於ても、労働者に比し優つてゐると云ふだけ

の理由の下に、問題の理非曲直を決定する権利を有すと主張するのである。労働組合の首領等は尙ほ附加へて、都市に於ける作業の中止は、必ずやその都市に於ける組合の財力を毀損し、且つ時としては團結せる労働者の連続的事業を攪亂せぬとも限らないから、何時何處で同盟罷業を宣言すべきかの判断はこれを指導者に一任しなければならぬと主張する。斯くして彼等は少数者の衝動的行為に對抗して多数者の利益を擁護すると云ふ民主主義的目的によつて、自分等の行為が正當であることを理由付けようとするのである。これは一九〇八年十月マンハイムの金屬労働者に對して、ドイツ金屬労働同盟が用ひた論法の骨子である。

然しながら、吾々は今日労働組合の間に行はれてゐる寡頭主義的の因果關係論を、茲に鬼や角論せんとするものではない。唯だプロレタリア寡頭主義の傾向と、國家生活に於て行はれてゐる寡頭主義——政府、裁判所等の傾向との間には殆んど何等の差異も無いことを指摘すれば十分である。他の諸國でもさうであるが、ドイツの社會主義指導者が労働組合運動に十分發達せる寡頭主義が存在することを認容するに躊躇しないと同時に、一方には又、労働組合の指導者の方でも、労働黨に寡頭主義の存在することに注意を拂つてゐるが、しかも、双方の指導者が孰れも、彼等自身の團體のみに就いて云へば、これ等の團體は寡頭主義の感

染に對しては、絶對免疫性を有つてゐると言明することに於て、意見が一致してゐるのは興味ある事實である。

然し、労働組合の指導者及び社會黨の指導者は、若しそれを孰れか一方の指導者だけが企てたとすれば、必ず他の一方の指導者が甚だしく非民主的の行為だとしてけちを附けるに決つてゐるやうな行為をなすに方つて、一致の歩調をとることが往々ある。例へば、一九〇八年を通じて民主的に最も重要な問題の一たる、五月一日の示威運動を今後毎年續けて實行するかどうかの重大問題に際し、社會黨の執行委員と労働組合の總務委員とは、互ひに申合せて一の告示を發表したが、この告示こそ正に個々別々の政治的團體及び労働組合團體の採るべき行動を上から命令したものと見るより外は無い。

今後引續き五月一日を以て労働者の示威運動日となすべきかどうかなど云ふ問題は、個々の労働組合並びに社會黨の地方委員會の利害休戚に多大の影響を及ぼすべき重大問題であるのに、社會黨の執行委員も労働組合同盟の幹部も、これに就いて彼等の意見を徴する必要は絶對に無いと見做したのである。かくの如き行為は、労働運動のこれ等二團體の一方が、他の一方に對して互ひに加へ合ふ非難の聲が如何に正當であるかを立證するものである。の

みならず、地方にある労働組合の部會が労働組合大會に直接代表者を送つてはならぬかどうかの問題が可成り喧しく討議されたが、かくの如き問題は畢竟、寡頭主義の範圍を擴大すべきや否やの問題に外ならない。

消費組合と生産組合

次に、極く簡単に、労働階級の運動の第三の形態たる協同組合團體、特に生産の協同主義を目的とする團體に就いて考案を試みたいと思ふ。この種の團體はその性質上、最も完全に民主主義の原則を包含すべき筈のものである。

先づ、消費組合に就いて觀るに、これ等の組合は直接その組合員の聚團そのものによつて支配さるべきものでないことを了解するのは頗る容易である。カウツキーも説いてゐる如く消費組合の職能は、純然たる商業的性質の企業に係り、従つて平組合員の權能外にあるのである。この理由の下に、これ等の組合の營業上の主たる活動は、これを組合の事務員並びに少數の専門家の手に委ねなければならぬことになる。カウツキーはこれについて述べて曰く、吾々が購買と云ふことを一の協同事業と見做し、その場合、普通の店主の顧客も亦その

店主の協同者であると見做さぬ限り、消費組合の組合員が其經營に對して有する關係は、一會社の株主が會社に對して有する關係と毫も選ぶ所が無いことになるであらう。であるから、組合員はその經營委員を選任して、機關の運轉を一任し年末に至り初めて、經營振りに對する賛否の意見を發表し、且つ自分等の配當を受取るのである、と。

現在の事實についていへば、分配を目的とする消費組合は概して君主制的の體容を示してゐる。例へばベルギーのガン市に在るヴォオリイと稱する消費組合の如きその最適の實例である。該組合は著名の社會主義者エドゥアル・アンセルの指導の下にあつて、その傾向に於ては全然社會主義的であるのだが、觀察犀利を以て聞ゆるベルギーの一批評家はこの組合を評して、ヴォオリイ消費組合は謂はゞ一の無政府主義的共和國に外ならず、それは寧ろ權力の原則の上に置かれてゐると云つた程である。

他の一方、協同生産を目的とする組合、特に、その規模の小なるものに至つては、理論上から考へると、民主主義的の協同事業が最も完全に行はれてゐる部面でこれ以上のものを想像することが出来ない程である。これ等の組合は、同一の階級に屬する同種の分子から成立つ。即ち、同一の職業に従事し、同一の生活風習に慣らされた人々から成り立つてゐるので

ある。苟くも一の組合に管理と云ふことが必要である以上、それは全組合員の協同力を以て直ちに實行さるべき筈である。何となれば、全組合員が孰れも同一の職業上の能力を有し、總ての人が顧問として又補佐役として手を貸すことが出来るからである。

これに反し、政黨にあつては全黨員が擧つて一つの重要な政治上の事業に従事することは到底不可能であつて、首領と黨員との間に一大罅隙が存することを免れない。然るに協同生産を目的とする組合に於ては、例へば製靴組合の如き、全組合員は等しく製靴について有能であつて、道具の用ひ方から皮革の品質に關する知識に至るまで、彼等は皆これに精通してゐる。約言すれば、専門的知識に關しては、彼等の中に何等本質上の差異はないのである。

しかも、事情は既に民主々義的有機體を構成すべく斯く好都合に出來てゐるに關らず、協同生産組合を目して民主々義的自治體の典型なりとすることには躊躇せざるを得ない。ロドペルタスは嘗てかう云つたことがある。彼れが生産組合なるものを以て、その活動の範圍を擴大して、總ての製造工業、商業、農業等をも包括するものと想像したとき、又彼れがあらゆる社會事業は、その管理に關し組合員の總てが平等の發言權を有する小規模の協同組合によつて好成績を擧げて行くことが出来るとの觀念を懷いたとき、經濟的體制は必ずや、それ

自身の機制の前に挫折して了ふであらうとの確信をどうしても取除くことが出来なかつた、と。

生産組合の歴史は、今日まで總ての組合が次の如きディレンマに陥つたことを證示してゐる。即ち組合員たる個人が餘りに多く、それ等の個人は孰れも管理に對する干涉權を有つてゐると云ふ事實に基く不和と無力との爲めに忽ち挫折して了ふか、然らずんば、一人若くは少數の人々の意志に管理を委し、その結果眞の協同と云ふ特色を失ふことになつて了ふ。殆んど總ての場合、この種の企業は一人又は少數の人間の創意發案に胚胎するのであるが、斯くして形成された組合は、凡ゆる對内的並びに對外的關係に於てこれを代表する一人の支配人の指揮、命令の下に立ち、萬一その支配人が死亡するか又は辭任するやうなことがあれば、忽ち滅亡の悲運に會するほど、一にも二にもその支配人の意志に依頼するやうな一種の小君主制を成すに至るのである。

協同生産を目的とする組合の有する右の傾向は、尙ほその上に、組合員の數が殖えるに従つて、個人的利益が減少するやうな個人の聚合體であると云ふ特色によつて益々促進される。斯くて、その本來の性質そのものよりして、これ等の組合は恰かも中世紀のギルドを支配し

た所と全く同一の變り易い心理學的法則の支配を受け、これに服従することとなるのである。彼等は益々繁榮するに従ひ、益々排他的となり、苟くも獲得することの出来る一切の利益をその現在の組合員の爲めに獨占しようと云ふ傾向を示すやうになる。

例へば、高い加入手数料を課することによつて、間接的に新組合員の参加を防止するとか、組合員の數の最大限度を規定せる規則を通過するとかの方法が、即ちそれである。或る場合には、唯だ單純に新加入を拒絶することもある。彼等が今までよりも以上の勞力を必要とするときは、普通の賃銀勞働者を雇入れることによつて、この需要を満たすのである。斯くして、協同生産を目的とする組合は、次第々々に株式會社に變形して行くのである。時には、協同組合がその支配人の個人企業と早變りする實例すら示される。

これ等二者孰れの場合に於ても、カウツキーが勞働階級に依る協同組合の社會的價値は、或る若干のプロレタリアに資金を供給することのみに局限されて、その結果、資金の供給を受けたプロレタリアは自分等が今まで屬してゐた階級から脱出して、より高い階級に登攀することが出来るやうになるであらうと云つたのは、蓋し肯綮に當つてゐる。ロドベルタスは勞働者間の協同組合を評して、勞働階級を教育する一つの學校に外ならぬ。而して勞働者はそ

の學校で管理法と討論と或る程度の政治術とを學ぶことが出来ると云つたが、吾々の今日まで經驗し來つた所は、ロドベルタスのこの評言が殆んど適用され得ないことを示してゐる。

指導者、民衆相互間の尊敬

民主主義の運動に於て、個人と云ふ分子が如何に顯著なる役割を勤めるかは、右に述べ來つた所によつても明かであらう。團體が小さければ小さい程、個人の力は往々にして非常に優勢である。より大なる團體にあつては、より大なる問題も最初それが有つてゐた個人的の些少な特色を喪失することは事實であるが、これ等の問題を提出する個人、或る意味に於てはこれ等の問題を人格化するに至る個人が、その勢力と重要さを存續するから、結局同じこととなる。

イギリスでは、三四名の人々、例へば、ラムゼー・マクドナルド、ケーア・ハーディー、ヘンダーソン、クラインズ等の人々を動かすにあらずんば、平黨員を動かすことは絶対に不可能である位、それ程無限に彼等は社會主義民衆の信認を得てゐる。イタリーにおける勞働組合團體指導者の一人は、適任なる編制者によつて指導されないやうな勞働組合は到底長く存

續することが出来ないと確言した。イタリアのリナルド・リゴラは曰く、最も雑多なる環境の中に見出される、最も雑多なる職業の部類に属する人々は、今日までのところ、彼等の問題を處理するに足る第一流の人物を發見した場合を除き、未だ嘗て、一團體を結束し、以て危機を切り抜けることは出来なかつた。又其の悪い指導者を得た場合には、團體を組織することに成功しなかつた。假令組織することが幸ひ出来たとしても、缺點だらけであることが後に至つて發見された。

ドイツに於ては、ペーベルが如何ばかり最高絶對權を揮つたかは、幾百の證憑がこれを吾々に談つてゐる。彼れの赴く處は、その何處なるを論ぜず、常に拍手喝采を以て迎へられ、滿腔の歡喜を浴せかけられた。何處に開催された社會黨大會に於ても、種々相異なる性向を有する代表者等は、ペーベルを自分等の味方に引入れやうと苦心慘愴した。是等の事實は、ペーベルが如何に王者の如き權勢を把握してゐたかを裏書きするものである。のみならず、労働階級の指導者は、彼等が民衆よりも遙かに上位にある優越的の人物であると自認してゐる。時に政治上の日和見主義が、その自認を否定するやうに彼等を仕向けることがなきにしもあらずだが、普通彼等は極度に自己の優越を誇り、傲然として民衆に臨むのを常とする。

イタリア首め、他の諸國に於ては、社會黨の首領連は常にかう主張し來つた。ブルジョワジーや政府は、吾々が巧みに民衆を掣肘し、衝動的な群衆に對する緩和者として働いた點に於て、吾々に負ふ所が甚だ多大なのである。これ畢竟するに、社會主義の指導者は、社會革命を防止し來つて今日に至つたと云ふ功績、更らに換言すれば、革命を防止する爲めの彼等の勢力を主張するものと見るべきである。現にこれ等指導者の言に據れば、若し彼等の干渉なかりせば、革命は既に十數年前に起つたに相違ないと云ふにある。一九〇二年三月十三日イタリア議會に於て、社會黨首領カミロ・プランポリニは有名なる大演說に於て、この事を言明した。黨内の内訌は屢々客觀的の必要によつて激發されることもあるが、殆んど常に首領株同志が互ひに仕出かした仕事である。民衆は未だ嘗て首領同志の和解に反對の意を表した例が無い。それは、或程度まで、指導者間の不和葛藤が、概ね平黨員の狭い範圍内の利害關係や局限されたる了解力の外にあるが爲めであることは疑を容れぬ。

更らに、民衆に對する指導者側よりの尊敬は、概して餘り深いものではない。勿論、中には民衆に對し大なる熱情を懷くと自稱し、民衆が自分に與へて呉れた名譽は、それに利子をつけて必ず返す時まで自稱する指導者も無いではないが、これとて信を置くに足らぬものであ

るかも知れない。多くの場合、尊敬は片面的である。尤もこれは指導者が、又聞きでなく、親しくこれを経験することによつて民衆の困窮を、知るを得たと云ふ理由からだけではあるけれども、兎に角、民衆の指導者に對すると、指導者の民衆に對するのでは、その間尊敬の上にて一大逕庭が横はつてゐることは否むべからざる事實である。

フランスの社會學者フールニエールは、その著『社會主義政體』中に、民衆の指導者に對する關係を數字に喩へて、甚だ面白く説いてゐる。彼れは曰く、社會主義の首領連は無論民衆を尊敬してゐる。何となれば、民衆は彼等自身の抱負の成就を一切首領に委任し、自分等は彼等の股肱の臣となる、首領の掌中の受動的道具となり、彼等はその左に立つてゐる小さな數字たる指導者の價值を高めるだけの目的の爲めに、その右手に整列してゐる零に比すべきである。即ち、若し一と云ふ數字の右手に〇がたつた一つしかなければ、それは僅かに十を表はすに過ぎないが、若しその〇が六個あれば、忽ち一百万と云ふ數を示すことになるのである。

人民議決權に反對

黨員間に存する現實的教育程度及び能力上の差異は、同時に彼等の職能上の差異に反映する。指導者が諸問題の處理から民衆を除外することを正當ならしめる所以のものは、民衆が一般にその能力を缺いてゐるからである。彼等指導者は、動もすれば論じて曰く、若し假りに刻下の重大問題を親しく觀察し、且つこれを慎重に研究した同志中の少數者がこれ等當面の諸問題に就いて實際何等條理のある意見も持つてゐない多數者によつて支配されるとすれば、それこそ黨の利益と相背馳するものではないかと。これ實に首領等が、少くともそれを政黨生活に採用することに關しては、人民議決權に極力反對する所以である。エドワルド・ベルンシュタインは曰く、或る一の行動を執るに方つて、その機宜を誤らぬ爲めには、含多的の識見を必要とする。しかも、かゝる識見は民衆中の極めて少數者がこれを有するのみであつて、他の大多數に至つては唯だ一時の印象や感情の潮流に支配されて盲目的に蠢動するに過ぎない。苟くも或る重大問題に對して、公平無私なる判断を加へようと欲するならば、黨の役員及び腹心の顧問等極めて少數の一團が、秘密會議を開いて、黄色紙の報道などの影響を少しも受けない圏外に在ると同時に、自分の聲が敵黨の陣營に洩れるやうな虞の無いことを確かめた上で、自分の意見を發表するやうにすると、茲に初めてその目的を達するこ

とが出来るのである、と。

尙ほ、直接投票に代ふるに間接投票を以てすることに尤もらしい理窟を附ける爲めに、政黨の指導者は、政治上の動機以外に、政黨組織の構造が複雑であることを持ち出して来る。しかも、政黨より遙かに複雑せる國家の組織に對しては、議案提出權及び人民議決權（イニシエティブ・アンド・レフェレンдум）による直接立法制が社會黨の綱領の基礎的要素をなしてゐる。同一の物でありながら、國家組織に於けると政黨組織に於けるとの相異で、觀方を異にすると云ふ、この我儘勝手な似而非論法が政黨生活を一貫して、深くその肉の中に喰ひ込んでゐるのである。

勞働階級の指導者は、殆んど犬儒主義（ドグマチズム）と選ぶ所ない程の眞面目さを以て、自分の率ゐる軍隊よりも自分の方が遙かに優越せることを公言することがある。甚だしきに至つては、自分の部下の黨員等に對して指揮者の行動に兎や角干渉する權利を拒絶する斷々乎たる意志を聲明するに至ることすら見受けられる。又彼等は自己に與へられたる命令に服従せざる權利を保留する場合もある。數ある中での一の典型的實例は、この問題に關してイタリアの社會黨首領テュラチが一九〇八年ローマに開催された勞働大會の席上に表白した意見である。

テュラチは非凡の智能と該博の識見とを有つイタリアの社會主義者中、最も勢力ある人物の

一人である。彼れは社會主義民衆に對する社會黨代議士の地位について述べて曰く、社會黨の院内代表團は、彼等が曲事を爲せと頼まれない限り、常にプロレタリアの言ひなり放題になつてゐる、と。この言外の意が、各特殊の場合に於て、彼等が爲せと頼まれたことが果して曲事であるかないかを決定せねばならぬのは、院内代表者自身であると云ふにあることは敢て呶々を要せぬ所である。

昨の從者今は主人

今日の勞働運動に見る如く、權力を或る制限された少數の人々の掌中に集積することは、必ず幾多の弊害を生ずる。社會黨の院内代表者なるものは、彼等が缺くべからざる人物であることを鼻に懸け、民衆の從者たる身が忽ち早變りして、その主人となる。當初に於ては彼等の部下に義務を負うて服従してゐた指導者等も、結局はその主人となつて了ふ。ゲーテはその詩の一に於てメファストフェレスをして言はしめた。——人間は常に彼れ自身の動物によつて支配されるが儘に吾が身を委す、と。組織的權威者の篡奪に反抗して健闘すべき政黨それ自身も、己れ自身の組織的權威者によつて着々實行されてゐる篡奪に對しては自然の必要

で已むを得ないこととして、泣寝入つてしまふ。民衆は彼等の政府よりもより九八以上に彼等の指導者に屈從してゐる。そして若し、對手が政府であつたなら、決して隠忍しては居るまいに、自分等の首領に依つて權利を如何程濫用されても、怨言の一つも云はずに、ヂツと我慢してゐる。下層階級は往々にして上層階級より受けた壓迫に對し暴力を以て抗争を試み、流血の復讐をも敢てする。フランスの百姓一揆然り、ドイツの農民内亂然り、イギリスのワットタイラー及びジャック・ケード部下の叛亂然り。次いで近代に及んでは、一八九三年シシリーに於ける國粹黨の暴動然り。更に最近に於けるロシヤの革命も亦然りである。しかも、彼等民衆は己れ自身が選んだ指導者の暴虐には少しも氣づかず九八にゐる。

彼等は寡頭主義より來る罪弊の眞の源泉を、自黨内の中央集權に認めずして、動もすれば寡頭主義に反抗する最良策は、寧ろ自黨内の中央集權を益々強靱ならしめるにあると心得違ひしてゐるのである。

第六章 黨内の紛争

指導者團の孤立

民主主義によつて行はれる専斷行爲を辯護する者は、民衆が取つて以て彼等の權利の侵害に對して反抗し得べき手段は、彼等の掌中にあることを指示する。手段とは何であるか。彼等の指導者を取締り、且つこれを免黜すること即ちこれである。この防衛手段が或る程度まで理論上の價值を有することは、一點疑の餘地が無く、指導者の權柄づくな傾向も、これ等の可能性によつて幾分か緩和されるであらう。民主主義的傾向を有し、しかも、代議制を布いてゐる國家にあつては、嫌疑されたる國務大臣を退職せしめるには、原則として、唯だ民衆が彼れに倦きさへすればそれで十分なのである。これと全く同じ理窟で、社會主義者の一群若くは選舉委員が、不機嫌を示し又は反對の意を示さへすれば、議場にある自黨の代議士を召還するに十分である。又同一の方法は労働組合の年次大會に於ける多數者が、彼等の

満足せぬ同大會の幹事を退職させる上にも、十分のものであらう。

然しながら、右は理論上だけの事で、實際に於ては、この理論上の権利の行使は、前にも一言せる如き保守的傾向の連續作用によつて、妨害されるのを免れないのである。茲に於てか、自主的及び主權的であるべき筈の民衆の優越權と云ふものは、純然たる架空的のものとなされて了ふのである。

フリードリッヒ・ニーチェは、各個人が他日民衆の爲めの一官吏となつて了ひはせぬかとの憂懼に甚だしく惱まされたが、かゝる杞憂は、如何なる人間も官吏となる權利を享有してゐるに相違ないが、その中官吏たり得る可能性を有つてゐる者は、極めて少數であると云ふ眞理に直面すれば、直ちに拂拭されて了ふのであらう。

政黨の指導者と云ふ機關が設置されると同時に、彼等が長い任期を有する結果として、指導者が閉塞されたる一種の姓階カステに轉化されると云ふ結果を來たす。フランスに於けるが如く極端なる個人主義及び熱狂的の政治的獨斷主義が路に立塞がらぬ限り、苟くも民衆が指導者の地位を危殆に瀕せしめる程に亢奮するに至つた場合には、如何なる時でも、舊來の指導者は固く密集した一の結社をなして民衆に對立するのである。

かくて指導者は益々その獨斷專行の爪牙を現はし、時によると、社會黨大會に派遣される代表委員の選舉すら、或る特殊の取極めの下に彼等の手によつて調節され、これが爲め民衆は事實上己れ等自身の問題を處理するに方つて、凡ゆる決定的勢力から除外されて了ふのである。ところで、これ等の特殊の取極めは、往々にして一種相互保險契約のやうな體容を取るのである。

數年前ドイツの社會黨に於て、國內の可成り多くの地方に一の規則正しい制度が創設され、この制度に基いて指導者等は、互選の方法により、各地に開かれる黨の大會に交代的に代表委員として列席することになつた。而して、互選會に於てこの方法により、委員が指名されると、幹部の一人は直ちに起つて同志に向ひ、今度は誰某が某處の大會に委員として派遣されることになつたと報告する。かゝる詭計に乗ぜられても、列席の同志等はこれに對して、一大紛争を捲起するどころか、何處の隅に彼等があるのかすら殆んど氣づかれぬ程靜肅に、その報告を聽いてゐた。それと同時に、平黨員は黨の生活の高等職能に對してはほんの受動的に參與することが出来るだけである。而も黨は、これ等踏臺にされてゐる平黨員から絞り上げた黨費によつて、維持されてゐるのである。

黨内の暗闘内訌が甚だしくなつて、首領間に分裂を生ずるにも關らず、如何なる民主主義的團體に於ても、これ等相反目する首領等は、民衆に對抗する場合になると、牢固として抜く能はざる堅い結束を爲してゐる。フランスのアントアンヌ・エリゼ・シエルビュリエーはその名著『立憲的保障の原理』の中に、これ等指導者連の結束を説いて曰く、彼等（指導者）は互ひに結束を堅くするの必要を感じてゐる。蓋し、内訌の結果、分裂を來たすに至ることを虞れるからである、と。此現象は、なかんづくドイツの社會民主黨に著しい。世界の他の何れの國の社會黨と雖も、ドイツのそれの如く指導者間の結束の堅い例を見ないのである。その結果、ドイツの社會主義者間には、保守的傾向が極點まで發達して今日に及んだ。

民衆の屈從

指導者と民衆との間に争闘が生じた場合には、假令前者が依然その結束を堅くすることが出來ずとも、尙ほ且つ常に勝利者の地位を占める。少くとも民衆が彼等の指導者の一人を首尾よく厄介拂ひすることが出來たやうな實例は殆んど絶無と云つて良い。

數年前、マンハイムに於て、組織された労働者が現に彼等の首領の一人を免黜したことが

あつた。然し、これが爲めに指導者の猛烈なる憤懣を惹起し、指導者等は正當なるべき此叛亂的行爲を以て、黨員側の一大犯罪となし、哀れ民衆の激怒の犠牲となつたその僚友の爲めに他に地位を獲させるため東奔西走を吝まなかつたのである。首領の意に反して民衆の企てた大なる政治的騷擾の道程に於ても、又廣汎なる經濟的争闘に於ても、これ等の首領は、假令一時はその優越權を民衆に奪はれることはあつても、直ちにこれを取り返すのである。

尙ほ、往々起ることは、指導者が民衆を出し抜き、且つ彼等の明白なる意志に反して、民主主義の根本的原則を蹂躪し、有給の指導者と、その俸給を供給する側の民衆とを聯結する法律上、論理上、及び經濟上一切の羈絆を無視して、敵と和を講じ、紛擾の終結又は業務への歸參を民衆に命ずると云ふやうな獨斷行爲が行はれる事である。これは最近のイタリー總同盟罷業及びクリミチヤウ、ステッテン、マンハイム其他の大同盟罷業に於て起つた事實である。こんな場合にも、民衆は佛頂面をこそすれ、決して指導者に對して叛旗を翻へすやうなことはせぬ。何となれば、彼等は首領等の裏切りを懲罰するだけの實力を有たないからである。喧々囂々たる集會を開いて、その席上彼等の正當にして合法的なる不満不服を聲明するが、一度び集會を閉づるや、彼等はその首領等に提供するに民主主義的補償を以てすることを決

して忘れなす。

一九〇五年ルール流域の坑夫たちは、彼等の指導者が僭越にも同盟罷業は既に中止された旨を宣したので、指導者に對して猛烈なる激怒を爆發せしめたことがある。この場合は、さすが寡頭主義の指導者等も民衆の爲めに問責される憂き目を見ずばなるまいと思はれた。然るに、焉んぞ知らん、その後二三週間を経て、秩序は全く克復され平靜に歸し、恰かも何等の騒擾も起らなかつたかの觀を呈し、罷業の本尊たる坑夫連もケロリとしてゐた。指導者等は實に彼等の部下の憤怒を全然蔑視したにも關らず、大風一過した後は、彼等は依然としてその權威の地位を喪失しなかつたのである。

又一九〇七年十月イタリーのチュリンに於て、總同盟罷業の三日目に労働者は罷業を尙ほ繼續すべきことを絶對多數で可決した。然るに社會黨のチュリン地方支部執行委員及び同地方の労働組合の委員より成る指導者の一團は、この神聖なる決議に反對の行動を採つた。即ち、該決議が労働者側にとつては全然有効なものであつたに關らず、指導者側は一の宣言書を發して、罷業者に對し業務に歸參せんことを勸告した。そして、これ等の事變直後に開かれた黨及び労働組合の集會に於て、労働者連が規律を紊亂した罪は赦された。この時、平黨

員等は彼等の首領等が責を引いて辭職し、その結果、最も能く知られ且つ最高の尊敬を拂はれてゐる彼等の首領等を失つたことによつて、ブルジョワジーの手前、合はせる顔の無かるべきことを憂慮したのであるが、責に任すべき指導者は、辭職退隱どころか、洒々然としてその椅子に留まつてゐたのである。凡そかくの如く、民主黨及び社會黨の支配團體は、必要とあれば何時でも、己れ等の分別だけを以て事を處し、彼等が代表する集合團體の事實上の獨立を維持し、且つ實際に己れ等自身のみを才能の者とすることが出来るのである。

民主主義、實は寡頭主義

かくの如き情勢は、本質上寡頭主義を極端に發揮するものと云ふべく、民主主義の旗幟の下に企てられたる運動の結果は多種多様に互ることとなるのである。これ等の結果の中、主要なるものゝ一は、黨の策略に關する決議を取扱ふ執行委員が毎日民主主義の原則に違背した行動を爲しつゝある一事に存する。しかも、この策略に關する決議を満足に遂行することは、黨の大會及びその小集會を形成する二流どころの指導者等が、一の神聖なる任務として執行委員に委任してある所である。

これより生ずる弊害としては、最も重要な問題を大會で決せずして小委員會で討議し、従つて黨全體としては、その後に至り、既成事實としてこれ等の決議に承認を與へるに過ぎぬと云ふ結果が生じて来る。この小委員會で大事を決する慣習は、益々一般的のものとなりつつあるのである。例へば、選舉に關する黨の大會は總選舉が済んで後に初めて召集されるに過ぎないのだから、指導者が勝手に自分等の責任を以て、總選舉に臨んで黨の綱領を決定して了ふが如きそれである。更らに、指導者の種々なる團體間に秘密交渉が行はれ（前に述べた五月一日の示威運動に關し及び總同盟罷業に關してドイツに起つた實例の如き）、又政府との秘密の了解も指導者の專斷行爲によつて行はれるのである。尙ほ、院内代表團員は、該團が既に討議した事項、及び彼等が既に到達した決議に關しては、大會の席上でも一切沈黙を守ると云ふ慣習がある。この慣習は、執行委員が彼等自身すら、その討議事項なり決議なりに就いて、今まで何にも聽いてゐないときのみ、これを非難詰問するけれども、瞞着されてゐるのは唯だ平黨員だけであるやうな場合には、指導者と腹を合せてこれを默認し、これに賀意を表するのである。

政黨生活に於ける寡頭主義者が享有してゐる權力は、近き將來に顛覆されるやうな徴候は

少しも見えない。指導者等が超然として他の黨員から獨立してゐる事實は、彼等が必要缺くべからざる人物であること、正比例して、益々増大して行く一方である。否、それどころではない。彼等が揮ふ勢力と、彼等の地位が財政的にも安定してゐること、兩々相俟つて、民衆にとつては彌々益々魅惑の種となるばかりである。従つて少しでも才能の勝れた分子は、これに奨勵刺戟されて、何時までも平黨員として、指導者に盲従して行かねばならぬのを腑甲斐なく感じ、絶えず、労働運動における特權的官僚制の仲間入をして見たいと云ふ野心を起すやうになる。

斯くて平黨員は民衆の心の中に潜在してゐさうに思はれる指導者に對する反感の先頭に立つて、進むに足るだけの新らしく且つ智能的な勢力を涵養する上に彌々益々無力となつて行くばかりであると云ふ、哀れな結果を馴致する。今日でも尙ほ、民衆は彼等の指導者の命令が無い限りは、殆んど全く自分等だけの創意で社會運動を起すことは無い有様である。假りに平黨員が、その首領の希望に反抗して何か行動をとることがあるとすれば、それは殆んどみな、誤解が原因をなしてゐる場合に限るのである。例へば一九〇五年のドイツ、ルール河流域地方に於ける坑夫の同盟罷業は、労働組合の首領連の希望に反して勃發し、一般には民

衆の意志の自發的爆裂と見做されてゐたやうだが、後になつて、これは既に過去數箇月に互つて指導者が平黨員達を鼓舞獎勵し、炭坑主側に對して幾度か同盟罷業の舉に出づることを仄めかして、彼等を脅かす爲めに坑夫の動員を行つた結果であることが争ふべからざる事實であると判明したのである。であるから、労働者の群が一度び争闘を開始するや、彼等がこの舉に出たのは、全くその首領等の十分な賛成を得た上の事であるを自ら信ぜざらんとするも能はずと云ふ譯であつたのである。

勿論、民衆と雖も、時には首領に對して叛旗を翻へさないとも限らないが、それは見る間に鎮壓されて了ふ。従つて、政黨に屬する群衆が愈々眞剣に歴史の舞臺上に躍り出て活動し、寡頭主義者たる指導者達の權力を顛覆すると云ふ非常手段を敢てするのは、よく／＼の場合に限られてゐる。即ち、優越階級が突然盲目的になつて、社會關係を破綻點まで緊張せしめるやうな策略を敢て續行した特殊の場合のみに限られてゐるのである。かくの如きほんの刹那的な斷絶の場合を除き、労働團體の自然的にして且つ常軌的な發達の場合についていへば、社會黨の中最も革命的色彩の濃厚な黨派に對してすら、拭ふべからざる保守的極印を捺されるに至るは必定といはねばならない。

第七章 政黨則ち我なり

“LE PARTI C'EST MOI”

政府と政黨との酷似

労働運動の指導者が黨内の仇敵と争闘を構へる場合には、ブルジョワ政府がその内部の破壊的分子と争闘する際に用ひる所と殆んど異ならない策略を飽くまでも續け、且つブルジョワと殆んど同一の態度を採ることは、今日までの労働運動史の各ページが立證する所である。政府の場合でも、政黨の場合でも、彼等が好んで用ひる術語は異なる所がない。政府も政黨も互ひに申合せたやうに、同一の言葉を用ひて、相手の叛亂者を非難攻撃し、同一の論法を用ひて、確立せる秩序の擁護を叫ぶのである。即ち、政府の場合に於ては、國家を維持せよと一般人民に向つて訴へる。政黨の場合にあつても、これ亦吾黨を維持せよと訴へる。尙ほ、物と人、個人と聚合體、これ等相互の關係を確然と定義しようと企てる場合には、政

府、政黨孰れも思想の同一なる混亂に逢着する。

特にドイツの政黨に於ては、この感を深くする。ドイツ社會黨の公的代表者の官僚的精神（尤もこの精神は鞏固なる基礎を有する大團體の必然的特色ではあるが）はドイツ帝國（共和制にならぬ前の）の公的代表者の官僚的精神と數多の點に於て著しく酷似してゐる。一方には、ウキルヘルム二世と云ふ者があつて、絶えず謂はゆる不平連に向つて、そんなにこの國が厭やなら、須らく自分の足の塵を拂つて、さつさと何處か他國へ行つて呉れと勸告する。これが帝制時代のドイツであつた。他の一方には、ペーベルがある。ペーベルは聲を大にして絶叫する。——今や黨内（社會黨）の永久的不平分子及び不和の種子を永へに絶滅する機が到來したと。そして、若しこれに反對する者が吾黨の執行委員の萬事を處理することに満足の意を表はすことが出來ないとすれば、須らく黨を脱して可なり、此方には少しも差支へ無いとの意見を公表する。帝政時代のドイツのウキルヘルム二世と社會黨のペーベルと、これ等二者の間に、如何なる差異を吾々は發見することが出來るのであるか。ただ一方（政黨）は一の任意的團結であつて、各個人はそれに加盟しようとするまいと自分の好み次第であるが、他の一方（國家）は、其處に生れたと云ふ事實によつて、總ての人々が歸屬せねばならぬ一

の強制的團結であると云ふこと以外には、他に少しも異つた點が無いではないか。

又恐らくかうも云へるであらう。苟くも政黨の首領にして、思索したり行動したり、自分の思ふ所を談つたりすることを妨げられる者が唯の一人でもあらうか。更に又、ルイ十四世の擧に倣つて、「政黨即ち我なり」と敢て公言し得ない者が唯の一人でも政黨首領の中にあるであらうか、と。

官僚主義者の誠實

官僚主義者は官僚と云ふものと自分とを全然同一視し、従つて自己の利害と官僚の利害とを全く混同するのが常である。官僚黨に向つて放たれる總ての對象的非難は、彼れにとつては個人的屈辱と解釋されるのである。この點こそ、實に總て政黨の首領等が、その黨派の執れを問はず、敵の放つ非難の矢に對し冷靜に且つ正當なる見解を下すことが出來ぬ明白なる事實の原因である。總じて政黨の指導者なるものは、若し自己の屬する政黨が或る種の非難を受けることがあれば、忽ち沸然として色をなし、これを以て彼れ自身が侮辱されたものと見做すのが常であるが、斯く考へるのは、一面に於ては、善意を以てすると云へば云へるも

の、他面に於ては、戦場の形勢を一變し、斯くして、自分自らは甚だしく不當なる攻撃の的となつた無辜の犠牲であることを一般に示し、これによつて、理論上には彼れの敵に對抗して味方の民衆の心の中に、個人的の私怨に左右されて行動した人間に對し感ずるを常とするやうな一種の反感を起させんが爲めに、故意に憤怒を裝つたものともとれるのである。

若し、これと地位を轉倒して、自黨そのものが攻撃されずに、指導者自身が個人的に非難されたとすれば、其場合彼れが先づ第一に苦心する所は、かかる非難の矢が自分一個人に向けられたのではなく、實は黨全體に對する攻撃であるのだと云ふ風に見せかけやうとすることに在る。かかる苦心をするのは、常に黨の後援を一身に蒐め、數に於て攻撃の對手を壓服して了はうとする外交的の理由に基くのみならず、他の一面に於ては、彼が實際餘りに淡泊過ぎて、全體と一部とを取り違へた爲めでもあるのである。かくの如く、自分一人が個人的に非難を受けて置きながら、大眞面目にそれを以て黨全體が攻撃されたものと取り違へるのは、必ずしも盲目的熱狂の結果のみとも云へぬ。實際牢乎拔くべからざる信念から來ることもある。ネチャジエフの言に據れば、凡そ革命家なるものは、方法と目的とに無條件に同意せぬやうな人々は悉く片つ端から、欺瞞し、奪掠し、尙ほ、必要とあれば、全く破滅の淵に

陥れて了ふだけの權利を附與されてゐるのである。何となれば、彼れは斯かる人々を目して一の結黨の肉に過ぎずとせざるを得ないからであると云ふ。即ち、ネチャジエフの考へでは、革命家の唯一の目的は、人間などを眼中に置かず自己の純然たる個人的理想の勝利を保障することに存せねばならぬと云ふにある。約言すれば、「革命則ち我なり」と云ふのである。パークーニンはネチャジエフのこの言を評して、かくの如き論法は一の隠れたる源泉を有つてゐる。それは即ち無意識ではあるが甚だ嫌疑すべき野心を謂ふのであると。

政黨首領の専制主義は必ずしも、權力に對する野卑な憧憬又は制御し得べからざる利己主義からのみ起るとは限らぬ。それは往々にして、彼れ自身の價值及び社會共通の利益の爲めに彼れが爲した勤勞を深く且つ誠實に自信する處からも生ずる。その義務を果たす點に於て最も忠實であり且つ最も有能な官僚主義は、又一面に於ては最も専斷的である。今茲にドイツの有力な社會黨領袖ゾール・ハング・ハイネの言を採用しよう。——「吾が黨の役員が清廉にして敏腕であり、且つ彼等が共通の大目的の爲めに闘ふことを愛好してゐると云ふ事實が、既にある以上、それが黨内に専制主義の發達するのを防ぐ爲めの一の防案になる筈であるとの異論は、實は何等の價值も無い。事實は寧ろその正反對である。全然自己を無にして、一

般の幸福の爲めに粉骨碎身するを吝まぬ専門的能率の著しく高い役員は、彼等自身の任務が如何に重要であるかを十分に知り抜いてゐるので、他の何人よりも以上に、苟くも彼等の目から見て公正にして適當なりと思はれるものを目して悉く一定不易の法則なりとし、一般の利益の爲めに党内の暗闘内訌を抑壓し、斯くして黨の健全なる進歩の上に多少拘束を加へることを妥當の措置であると信じてゐる」と。

これと同じ理窟で、例へばドイツ帝國の官吏の如く、優秀にして廉潔そのものとも評すべき人々については、吾々は常にかう云ふことを發見する。誇大妄想狂的に物を以つて人に代へることは、或る程度まで彼等の誠直な良心と、義務に對する盡瘁とに因るものである。この種の官僚政治の人員の中には、針で自分が一寸刺された位でも、これを以て國家全體に加へられた一種の犯罪と見做さないやうな熱誠に乏しい者は殆んど一人もゐない。彼等が互ひに結束すること、恰かも十指のやうであるのも亦茲に胚胎する。彼等は自分を以て國家と云ふ全體の一部を人格化したものと見做し、従つて若し他の一部の權威が毀傷されるやうなことがあれば、この一部も亦その苦痛を分つものだと確信してゐる。のみならず、官僚主義者は、民衆が彼等の欲求する所は何であるかを知るよりも遙か以上に、民衆の欲求が何であ

るかを知つてゐると自ら想像し勝ちである。斯かる觀念は、個人の場合には正鵠を得たものと云へるかも知れないが、大體に於て一種の誇大妄想に外ならない。政黨の役員が官吏程ひどく化石になる危険に曝されることの少ないのは疑も無い事實であるが、これ蓋し多くの場合に於て、彼等が公開の集合に辯士として出席し、斯くして民衆と或る程度まで常に接觸してゐるので、世の中の推移の潮流に旨く棹さして行けるからであらう。尙ほその上に、これ等の公開演説などの場合に、彼等が民衆に期待し、且つ實際受けるところの拍手喝采は、決して彼等の個人的虚榮心を満足せしめ、これを刺戟することを過たないのである。かういふ次第であるから、彼等が益々自尊自重して來るのは當然の數であらう。

指導者の役得

如何なる團體にしる、その内部に寡頭主義が著しく發達すると、指導者等は自分自身を黨そのものと同一視するのみではなく、黨の財源をも獨占しようとするやうになる。この點に於ても亦、政黨と政府とは、全く同一の現象を示すものである。ドイツの労働組合の指導者とその平組合員との間に、同盟罷業を起す權利について確執を生じたときの如き、指導者は

數回に亙つて、この問題の決定權は道德的にも又法律的にも自分等の爲めに保留されなければならぬと力説したが、その理由とするところは、労働者側をして能く同盟罷業を持久せしめ得る爲めの財源を供給するものは、實に自分等指導者であると云ふにあつた。この見解は、要するに、寡頭主義的の考へ方の究極の結果に外ならぬものであつて、かかる思想こそ、實に眞の民主主義の原則そのものを全く忘却無視せしむる原因をなしてゐるのである。

ゼノアに於けるプロレタリアが團結して勢力を増大したとき、それに比例して労働階級の指導者の勢力も亦擴大したことは當然のことであるが、これ等指導者の一人に辯護士ジ・ムリヤルディがゐた。彼れはその同志の間に無限の信用を博し、種々なる方面に勢力を獲得し、社會黨内に於ても幾多の要職に就いてゐたのであるが、彼れが労働代表として資本家と種々なる契約を結び、且つこれに類似の事項を取極めた際、労働者の利益を顧みると同時に、自分自らの懐も大分肥したに就いて非難の聲が頗る高かつた。然し彼れ自身は、これを以て何等疚しい所のない正當なる行爲であると揚言して憚らなかつた。ムリヤルディは、青年時代に労働運動の爲め多大の犠牲を拂つた。彼れは労働階級に依つて重要視され、労働組合及び數個の消費組合より給料を受けてゐた。しかも、彼れは労働者の代表として資本家と折衝中、

彼等より多額の金を貰ふことを拒まなかつた。非難の聲漸く高くなるや、彼れは聲明して曰く、自分の努力によつて今や労働者が斯くも潤澤なる利益に浴することが出来るやうになつた今日、自分が雇主連の懐より僅かばかり餘分の金を貰つたからとて、これを非とする理由何處にあるか、と。ムリヤルディの行爲は彼れとゼノアに於ける他の領袖との激しい争闘となり、彼れは遂に社會黨から除名されて了つたのである。

第八章 階級争闘とブルジョワジー に及ぼすその崩壊力

民衆の宿命観と無自覺

社會民衆の心は容易に攪拌されるものではない。大事變が起つても、彼等は時にこれを雲煙過眼視し、經濟生活に於ける革命すら、往々にして、一般民衆の心性に何等著しい變化を及ぼすことなく遂行される。新たな社會状態の勢力に對する民衆の反動は、極めて徐々たるものである。

數十年——否、數百年の長きに亘つて、民衆は、受動的に持續してゐる政治状態に依然として忍従するが、それが爲めに、法律上並に道德上の進歩を阻碍することは一通りでない。經濟上の見地よりすれば、相當に進歩してゐる國家でさへ、往々にして、舊い經濟状態から發生した政治上の制度に忍従すること數十年の久しきに亘る。

特に、その著しい實例はドイツである。ドイツの貴族的、封建的政制は舊時代の經濟生活の遺物たるに過ぎないのであるが、最も進歩した資本主義的特色を帯びた經濟上の發達には、いまだよく適合することが出來ず、舊態のまま存續してゐるのである。

一見甚だしい矛盾のやうに思はれる歴史上のこれ等の現象は、二種の異つた原因から生ずるのである。先づ第一に、今や廢滅に歸した經濟上の形態を代表する階級又は亞階級が、その當時は優勢であつた經濟關係の真正なる支持者であつた時代から依然引續いて殘存することもあり得る。斯くして、彼等は、經濟上並びに文政上の發達の新生面に對しても、十分にその支配力を維持するに足る道德的權勢と、有效なる政治上の勢力との充實を、巧みに破滅より救出し得て、自分等の勢力を存續せしめてゐる。そして、これを遂行せんが爲めには、民衆の大多數の明白なる意志に反對することすら敢て辭せぬのである。

これ等の階級は彼等自身の政治上の勢力を利用し、且つ、彼等自身には全く縁の無い外來的要素たる一の暗示的勢力によつて、自分等に都合の好いやうに利用し得べき幾多の要素の援助の下に、引續き自己の勢力を失墜せずなられるのである。然しながら、過去の經濟的地位を代表するこれ等の階級が、依然としてその社會上の支配力を擅まにすることが出來る

所以のものは、現在若くは將來の經濟狀態を代表すべき階級が未だ自分等の實力を自覺し得ず、自分等の階級が政治上及經濟上如何に重要であるかを知らず、且つ自分等が現にその下に苦しめられてゐる社會上の幾多の缺陷惡弊を認識するまでの域に達してゐないからに外ならないのである。

第二には、宿命的の觀念と自分等は無力であるとの悲痛なる信念とが、民衆の社會生活を麻痺せしめつゝあるのである。従つて、被壓階級が、斯の如く、宿命觀に囚はれ、社會の不公平について正當なる觀念を十分に發達せしめることが出来ない間は、解放などを熱望する氣力は彼等に全然無いと云つて良い。歴史の徑路に於て、階級争鬭の根柢的素因をなすものは、壓迫狀態が存在すると云ふ單純な事實そのものでは決してなく、寧ろ被壓階級がこの壓迫狀態を意識し認識するといふ事實である。

プロレタリアが單に存在すると云ふことだけでは、未だ以て謂はゆる「社會問題」なるものを惹起せしめるには足らぬ。階級争鬭なるものが單に茫漠として捕捉し難い一の原理として止まるに過ぎぬならばいざ知らず、苟くもそれに意義ある活躍を與へんとするならば、須らく階級意識によつてこれを刺戟しなければならぬのである。

ブルジョワジーの悲痛なる運命

然らば、この階級意識なるものは何人によつてプロレタリアの間に喚起されるかと云ふに、ブルジョワジーが、知らず知らずの間に、これを爲し、しかもこの階級意識と云ふ武器を以て反抗されるのは必ずやブルジョワジーそれ自身であるのである。歴史はこの種の皮肉を以て満たされてゐる。ブルジョワジーが、經濟上及び社會上の見地より觀て自己の不倶戴天の仇敵たる階級の、師導役たらざるべからずとは、何たる悲劇的の運命であらう。カール・マルクスがその『共產黨宣言』の中に述べてゐる通り、ブルジョワジーが斯くも痛ましい運命に陥つてゐる主因は、彼等が一方には、貴族階級の人々、即ち、彼等自身の階級に屬しながらも、その利害が産業の進歩と相背馳する關係にある一部の人々を對手とし、他方には又、外國のブルジョワジーを向うに廻して、不斷の争鬭を試みるべく餘儀なくされると云ふ一點に存する。そこで、孤立無援の力を以てしては到底有效にこの争鬭を續けることが出来ないで、ブルジョワジーは、絶えずプロレタリアに訴へて、その援勢を求め、斯くしてプロレタリアを政界渦亂の中に投じ、プロレタリアは聽て、これを逆しまに執つて、プ

ルージュワジーそれ自身に反抗するやうになるのである。

1111

更に、他の形態の下に、ブルジョワジーは労働階級の師導役たり、闘争の師匠として姿を現はす。蓋し、ブルジョワジーは日々プロレタリアと接觸してゐるので、その結果として、假令少数にもせよ、彼等の中から分離して、労働階級に走り、その階級の爲めに全精力を注ぎ、以て現存の社會階級制に對して猛烈なる反抗運動を試みるべく労働階級を刺戟し、現在の經濟制度及び社會制度に存する缺陷を痛感し、諒解せしめるやうにする人々が現はれて來る。ブルジョワジーから脱出して、プロレタリアの爲めに身を挺して働かうとするそれ等の人々の數は決して多くないことは事實であるが、斯くしてプロレタリアの爲めに全力を注がうとする者はブルジョワジー中の精銳であり、或る意味に於ては、ブルジョワジー中の超人とも見做すべき人々である。即ち、その隣人に對する愛に於て、その同情惻隱の心に於て、社會の不公平に對する道德上の義憤に於て、社會に働いてゐる各種の勢力を合理的に理解することの深さに於て、又、彼等の懷抱支持する主義を實際化する爲めの絶倫なる精力と論理的の執着力とに於て、ブルジョワジーの儕輩の間に一頭地を抜くと見做される人々のみである。孰れにもせよ、これ等の人物は例外非凡の個性の所有者であつて、自分等が

生を享けたブルジョワ階級から脱走して、プロレタリア間に今尙ほ惰眠を食つてゐる本性に、深慮ある指導を與へ、斯くして、一の完體としてのプロレタリア階級の完全なる解放を促進せんことを企圖するものと云はなければならぬ。

プロレタリア階級は、先づ初めに、自己の本能性のみによつて、彼等の受けつゝある壓迫に氣附くのである。蓋しこの階級は、一見極めて複雑にして、八幡知らず式であるところの歴史上の過程を十分了解するに足る手がかりを得べき教育と云ふものを全く缺いてゐるからである。長い年月に互つて教育を缺き、且つ政治上の權利を剝奪されてゐる爲めに、沈淪状態に委せられ、全く自暴自棄の有様になつてゐる社會の一階級が、管に自階級の人々からのみならず、卑俗的の言辭を用ひれば、謂はゆる上流階級に屬する人々からも、道德上の權利並びに政治經濟上の知識を注入されない中は、何時まで経つても、強烈なる行動を執る可能性に到達することの出來ないのは、一の心理學的歴史的法則であるやうに思はれる。

今日まで、歴史上の大なる階級運動の動機は單純なる反省のみにあつた。教育も無く、法律上の權利をも與へられてゐない民衆階級に屬する人々のみが、自分等の壓迫されてゐることを信するばかりでなく、彼等の境遇に關する此確信は、社會機制に就いて彼等以上の知識

を有ち、従つて彼等以上に正鵠を得たる批判を爲し得る人々によつても懐かれてゐるのである。それだから彼等の解放と云ふことは、實に彼等のみが絶叫するのではなく、上流階級に屬する文化人も亦同一の理想を今日まで懐いて來たのであつて、その理想たる決して單なる幻想ではないのである。この思想が一の連續關係をなして今日に至つたことは、何人も認容する所である。現にオットー・フォン・ライクスナーの如き、その研究は甚だ皮相的であるにも關らず、ベルリンに於ける労働運動については適切なる心理學的の分析を與へてゐる程である。

労働運動の首領は悉くブルジョワ

社會主義の原理は、哲學者、經濟學者、社會學者及び歴史家の反省から生じたものである。世界各國の社會黨の綱領なるものを繙くに、言々句々一として、多數學者の著書の綜合を示さざるは無い有様である。この點は社會主義反對論者すらも認める所である。例へば、オルデンベルヒの如き、その著書中に論じて曰く、「歴史上の觀點よりして、社會主義なるものは、哲學上及び科學上の思想の最高圏内より一般プロレタリア民衆の腦裡に機械的に移植さ

れた一の理想主義的空想である。既にその最初よりして、社會主義なるものは一の不釣合なる契合である。ラサーレの謂はゆる科學と労働者との契合である」と。

近世社會主義の師父と仰がれる人々は、先づ殆んど例外なしに、科學者であつた。そして第二に、政治家——しかも最も嚴密なる意味に於ける政治家を擧げ得るに過ぎない。尤も、これ等の人物の輩出する以前には、智能的、經濟的生活程度を向上せしめんとする本能的熱望が動機となつて試みられた自發的プロレタリア運動のあつたことは眞實であるが、これ等の運動は、自分等が壓迫されてゐることを明瞭に意識した結果、その意識によつて鼓吹された純眞の反亂的感情の爆發と云はんよりは、寧ろ、正當な不滿にもせよ、とにかく非反省的な不滿の機械的結果として出現したものに過ぎない。従つて、プロレタリア運動が一の社會主義運動と化したのは、全く科學が労働階級の使用に供せられてから以後の事に過ぎず、斯くして、本能的な、無自覺な、目標の無い叛亂に代ふるに、比較的明瞭な意識を根柢とし、意義の十分に劃定された目的に對して嚴密に向けられた熱望を以てするに至つたのである。往昔の階級争闘は總て、如上の現象を明白に示してゐる。歴史上の重大なる階級運動は、その初め、右の運動が向けられた當の對手の階級そのものゝ中から驟然として奮起した人々

の教唆の下に協力を得て、しかもそれ等の人々の指導、統率の下に起つたのである。その昔、奴隸を煽動して、彼等の自由の爲めに叛亂を起すべく教唆したスパルタクスは、成る程、身は卑賤の生れではあつたらうが自由人であつた。スレースの土地所有者であつたのである。ツーリンジアンの農民一揆を煽動したと云はれてゐるトマス・ミュンツェルは、決して農夫ではなかつた。彼れは一個の學者であつた。又、フロリアン・ガイエルは騎士であつた。フランス革命の劈頭に於ける第三階級解放運動の首領として雷名を轟かしたラファエット、ミラボ、ローラン、シエイエス等は孰れも特權階級に屬し、尙ほ、國王の弑逆者フリブ・エガリテは實に王廷の一員ですらあつた。

現代労働運動の歴史も亦この例に洩れるものでない。ドイツの歴史家テオドル・リンドナーが、現代の社會主義運動は常に非労働者の手によつて「起される」と斷言した。リンドナーの言は、妖術使の魔杖の働きを聯想せしめる。彼れが此魔法の杖を揮つて「労働運動よ、起れ」といへば、其處に労働運動が生じて來ると云ふ論法である。吾々はこの無造作な斷言をそのまま肯定し得る者ではない。彼れの説は精確を缺いてゐる。何となれば、この謂ゆる「起される」と云ふ文句は無から有を生ぜしめる意味に解される。又、世の歴史家の或る一派

は、往々にして、彼等の取扱ふ謂はゆる歴史上の英傑を捉へ來つて、これを彼等の歴史上の因果律の礎石となすのが常であるけれども、労働運動の「起る」と云ふことは、決してこれ等の英傑の一人の手によつて爲される仕事ではない。蓋し、労働運動の發生は、必ずや或る一定の社會的並びに經濟的發達を前提とすべく、若しこれが無かつたならば、如何なる運動と雖も企圖され得ないのである。然し、リンドナーの見解は、これを表現せしめる方式に於て前記の如く誤まれるにもせよ、或る程度まで眞理を語るものといひ得る。即ち、近世労働運動の指導者が主として文化階級から出てゐることは否むべからざる所であつて、尤も、この事實は、既に一八七二年の昔、ハインリヒ・フォン・ジーベルが指摘した所で、別段リンドナーが新しく發見した事實とは云はれない。

政治的社會主義の偉大なる先驅者たり、且つ哲學的社會主義の屈指の代表者たるサン・シモン、フリエー及びオーウエン 政治的社會主義の創始者たるルイ・ブラン・ブランキ並びにラッサレ、經濟學的科學的社會主義の師父たるマルクス、エンゲルス、ロドベルクス等は悉くブルジョワの有識階級に屬する人々であつた。唯だ理論と實驗との孰れについても、國際學界に於て比較的重視されてゐない者の中に、ウキルヘルム・ヴァイトリング、ビエール・ルルーの

兩人がある。前者は裁縫師の徒弟、後者は獨學の哲學者であつた。更に、身を卑賤より起し、社會主義の學術的研究に於て名聲赫々たる地位に達し得た例外的の人物としては、單りブルドーンあるのみ。彼れは印刷職工として働きつゝ、攻學に没頭したのであつた。

近來熾んに労働階級の爲めに演説を試みることに渾身の精力を注いでゐる雄辯家の中ですらも、以前ブルジョワ階級に屬してゐた人々がその過半数を占めてゐるに關らず、労働階級の畑の者は全く例外的であると云ひ得る。主要なる社會主義政治家にしてブルジョワジイ出身の人々の名を列擧しようとするれば、數ページを費しても尙ほ足らぬであらうが、これに反し、眞に労働階級から身を起した政界の首領株にして、不朽の名を労働階級史上に残すであらうと思はれる人々は、十指を屈するまでも無い程である。強ひて挙げれば、ベノワ・マロン、アウグスト・ベーベル、エドゥワール・アンセル等であらうが、彼等は、孰れも労働階級の偉大なる實際的指導者であり、有力なる編制者ではあつたが、社會主義の獨創的理論家の伍班に列せしめることは出来ない。

ブルジョワジーよりプロレタリアへ

一の政黨を組織すべく結束したプロレタリア運動の中にブルジョワ分子が存在することは歴史上の一事實であつて、しかもこの歴史的事實たる、苟くも國際的労働階級の政治運動が熱烈なる態度を以て行はれる國々に於て到る處に看取されるところである。世界の主要なる諸國に於ける社會運動に、ブルジョワジーが常に指導者の地位に立つて先驅した歴史上の實例は、それ等の國々の労働運動史に必ず散見する所であつて、一例を挙げれば、ロシアの社會主義運動について、ボリス・クリセフスキーは斯う述べてゐる。——「一八九〇年より一八九五年に於けるロシア社會民主主義運動の宣傳團は、殆んど例外なしに、有識階級より成つてゐた」と。又、オランダに於ける社會黨にブルジョワ分子の如何に多いかは、反社會黨が社會民主黨と云ふ正當なる黨名の略語 S・D・A・P を、嘲弄的にモチつて、ブルジョワを意味する學者辯護士黨と云ふ綽名を附した位である。尙ほ、一九〇二年ブラジルのサンパウロに於て、同國の社會主義労働者第二回大會が開催せられ、その席上に初めて労働黨の集團たる組織が決議され、政綱が制定されたのであるが、執行委員を形成する七名の會員中三名まで博士號を有する人であつたのみならず、イタリー生れの他の二名の執行委員も、これ亦有識階級に屬する者であつた。

ブラジルと酷似してゐるのは日本である。この事は日本に於ける社會主義の起源に關して、グスタフ・エクシュタインが嘗て『ノイエツァイト』誌に載せた記事中にも明示されてゐる。即ち、社會主義と云ふ一の樹木が新たにその枝を延ばし始めた國に於ては、必ずプロレタリア運動の指導者はブルジョワ出身の者に依つて占められると云ふ現象が示されてゐるのである。

のみならず、この現象は歴史的進化の一の論理的結果と見做すべきである。否、それどころではない。戰闘的プロレタリア黨の中に舊ブルジョワが混つてゐるのみならず、プロレタリアの解放運動に於てこれ等ブルジョワの勤める主なる役割は實に歴史的必然から生じたものである。

ブルジョワジーからの多數の脱黨者がプロレタリアの戰士の間に入り混つてゐると云ふ事實は、階級争闘の原理が虚偽であることを證示することになりはせぬかとの疑問が生じて來るかも知れぬ。否、事實に於て、この疑問は提出されてゐるのである。換言すれば、將來の社會組織と云ふものは、總て階級上の差別が全く撤廢されたものであらねばならぬことは、實に社會主義者のみならず、他の進歩せる改革論者、倫理學的修養論者、無政府主義者、新

キリスト教主義者等が、明確不明確の差こそあれ、彼等の共通目的として、劃定した所であつて見れば、彼等が將來に希望する新らしき社會制度は、人々がブルジョワジーの享有する經濟的、社會的特權の甚だしく不公平にして不法のものであることを自覺したるとき實現されるのではないかと考へられるやうになる。斯くして、吾々は當然、次の疑問に導かれる。即ち、政界に於て階級の利害を代表する階級政黨間に存在する鋭い分裂線は、現實に必要缺くべからざるものであるかどうか、即ち、かゝる分裂線の存在は一種の残酷な遊戯に外ならず、従つて、無益にして有害なものではなからうか。『エティシエクルツール』誌の主筆ルドルフ・ベンチッヒは、この問題について本書の著者ロベルト・ミヒェルスと論争したことがある。彼れは此論争に於いて、ブルジョワ階級より社會主義者群への脱走者は、一種の先驅者であると主張した。ベンチッヒの謂はゆる先驅者と云ふ意味は、これを論理的に考察すれば、かかる脱走連はブルジョワ中先見の明ある開拓者であり、従つて、他のブルジョワの大衆全體が、これ等先驅者の例に倣つて、悉くプロレタリアの群に投じ、斯くして、今までは經濟上及社會上より觀て、自分等の精神的仇敵であつた民衆と握手するに至るであらうとの確信を示したものであらう。ロベルト・ミヒェルスはこの議論に對して、日本にはその昔ハ、カリと

云ふ制度があつたが、若し、このハラキリが上長の者の命令に従ひ、乃至は外部からの強制によつて、已むを得ず行はれるものでなく、本人の熟慮の結果行はれる一の行爲であるとすれば、ベンチッヒの右の論こそは正にハラキリ論法とでも評したくなると云つてゐる。次下暫らく、この理論が果して正當であるか否かについて考察して見よう。

自己の権利を無視する者は亡ぶ

社會主義詩人エドモンド・デアミシスは、社會主義が究極の勝利を占める爲めに、最も有效に働くものと見做される多くの素因を列擧してゐるが、彼れの意見に據れば、人間には一般に倦怠と云ふ一種の感情があつて、この感情が産業上の一大危機を誘致し、有産階級に屬する總ての人々が底止する所を知らざる階級争闘に全く倦き果てて了ふ時代が來ると同時に、他方には又、これ等有産階級の人々が、火と劍とに脆くも打敗れて、無残なる滅亡の運命に陥れられる革命と云ふ運動を、何ものを犠牲にしても、防止せねばならぬと云ふ心痛に襲はれ、斯くて終には、ブルジョワジーも亦これを痛感するやうになる。若返りと理想主義とに對する無限の欲求、更らに又、幻滅の世界の廢墟の中に生活しなければならぬと云ふ恐怖

を防止せんとする無限の欲求が、有産階級の間を生じて來る。これと同様なる思想の連鎖は、嘗て五十年前、ハインリヒ・ハイネによつても表示されたのであるが、ハイネは自己の政治思想を公々然と發表する勇氣を缺いたばかりに、自ら社會主義の闘士として起つことが出来なかつた。ハイネは政治、藝術及び國民生活に關し、屢々パリより書を公けにしたが、その中、一八四三年六月十五日附を以て、次のやうなことを書いてゐる。「私は茲に、共產主義者の敵となつてゐる人々は勢力に於ては甚だ強いに闘らず、何等鞏固なる道徳上の立脚場を有つてゐないことが、共產主義者の以て乗すべき無限の利點であることに特に注意を惹きたいのである。現今の社會が自己を防衛するのは、斯くせねばならぬからと云ふだけの理由の下にであつて、自己の權利については何等の信用も置かぬのみか、自尊心すら全く有たないことは、大工の息子が來ただけの爲めに、古代の社會が滅亡に陥れられて了つたのと何等選ぶ所はない」と。

ハイネと云ひ、デアミシスと云ひ、これ等兩詩人の見解は、多くの點に於て、首肯さるべきものがあるけれども、氣息奄々として幻滅の淵にあるブルジョワ社會が、果して、自己を防衛する爲めに、最後まで闘ふことを敢て爲さぬであらうか。自己の財産及び特權が如何

に劇しく爆破され、脅かされるとも、プロレタリアが決定的最後の勝利を獲る日は少くとも遅延されるであらうとの果敢なき希望の下に若し必要とあれば、武力を以てしても、自己の特権と財産とを掩護しようとする努力を怠らうかと云ふことは、實に疑問中の一大疑問である。

況んや、一八四三年頃に、彼れの時代のブルジョワジ；が全く自信を缺いてゐた、自尊心なぞ云ふものは更らに無かつたとの、ハイネの意見が甚だ疑はしいことは、何人も肯く所であらう。蓋し、吾々の知る如く、プロレタリアに對するブルジョワの抵抗が、今日まで常に、彼等自身の誠意に對する熱烈なる自信によつて活氣附けられ來つた事實に鑑みても、ハイネのかゝる斷定は容易に首肯することが出來ない。然しながら、それ自身の權利に對する潑刺たる自信を缺くやうな社會は、既にその政治的死滅の苦惱に堪へつゝあるものであるとの根本的思想に於ては、デ・アミシスの言ふ所もハイネの言ふ所も、共に健全であると評して良い。兎に角、特権階級が自己の特権を、斯くも執拗に又隱忍的に防衛する能力を有することは、總て、この階級に一種侮るべからざる性格があり、殊に嚴酷性を帯びた絶大なる精力があつて、これが彼等の残忍性や良心麻痺と相俟つて働くのであるが、若しこの絶大なる

精力が進んで自己の誠意に對する熱烈なる自信を基礎とするに至れば、益々著しくその猛威を揮ひ得るのである。

嘗てヴァルフレド・パレトがその著『社會主義體制』中に述べた如く、若し一の支配階級に浸徹せしめるに人道主義の思想を以てすれば、この思想は右の支配階級の人々をして自己の道徳上の生存權を疑はしめる結果を導くから、彼等は自然に頽廢墮落の生活に陥り、遂に自己を防衛する能力をすら失ふに至るものである。

尙ほ、右の原則は、人々が自分等の神聖なる生存權に對し絶對の自信を有する場合にも等しく適用されるし、又國民的聚合體についても有效である。苟くも一國民が、かくの如き生存權の觀念を缺く以上、その衰頹と滅亡とは避くべからざる自然の結果である。民族も、法律體制も、諸施設も、社會階級も、その代表者たる人々が自己の將來に對して全く自信を失つた瞬間から、破滅の運命に呪はれるのは避け難い徑路である。かのポーランド人を見よ。彼等は世界の各地に散亂し、自國は竟に三強國の間に分割されてしまつたけれども、彼等は飽くまでも自己の國籍を保持し、自國の權利に對する自信を失はなかつた。苟くもポーランド人がかくの如く、自國の國民的生存權に對する自覺を失はざる以上、プロイセン及ロシア聯

合の小天地は言はずもがな、世界の孰れの強國と雖も、ポーランド民族を絶滅せしめることは出来ない。然るに、ヴェンド種族はこれに反し、彼等が征服された歴史的時期の性質にも因り、且つはこの歴史上の事變の起つた當時の特殊の事情にも因るのであるが、遂に自分等の國民的生存權に對する認識を飽くまでも抱持することが出來ず、依然併呑を續けられてゐる。嘗ては一度びかくの如き自信を有つてゐた時代もあつたが、遂にこれを抛棄すべく餘儀なくされたのである。スプリーヴァルドに於けるが如く、ヴェンド種族が彼等の國語を持續してゐる地方ですら、彼等は完全にドイツの政制の下に併呑されて了つて、今日ヴェンド種族なるものは、全く世界文明史上から削除されて了つたのである。彼等はドイツ内の廣大なる地域に互つて棲息するにも關らず、多くの場合に於て、自分等がスラヴを起源とするものであることを全く打忘れ、現實に於て彼等がドイツ人扱ひをされてゐるのは、往時に於ける彼等の征服者が彼等に強制した國家の法律上の擬制習俗や言語などの爲めであるにも關らず、今や最も熱心な汎ドイツ主義と成りすまして平氣であるのである。

物質革命の前に先づ精神革命

歴史上の如何なる社會争闘に於ても、これが永久の勝利者たらんとするには、先づその豫備行動として、被征服者を道徳的に去勢して了はぬ限りは、到底その目的を達することが出來ない。かのフランス革命が可能とされた所以のものは、熱烈火焰の如き革命前の諸文豪ヴァルテール、ダランベール、ルーッソー、ホルバッハ、ディドロ等の徒が、舊政體の治下に於ける支配階級の掌中に委せられてあつた經濟上の特權をば不道徳千萬なものとして、率直明白に痛撃した爲めにも因るが、又これ等の人々が、貴族及び僧侶の大部分を頹唐、墮落(勿論心理學的意味に於て)せしめて置いたことにも起因する。ルイ・ブランはフランス革命に關し評言を試みて曰く、「第十八世紀の思想のこの偉大なる試験所たる百科全書(ディドロ、ダが一七五二年より一七六五年に互り編纂したもの)の勇猛なる突撃——この突撃は、一七八九年には、これより先き彼等が道徳的に征服して置いた地域を唯だ物質的に占領したまでのことであつた」と。

七個の國家に分裂してゐたイタリアの統一は、外國人との争闘に於てイタリア人の間に生じた多少の死傷者を除けば、最小限度の流血の慘事を見たのみで、見事に遂行され、しかも新王國が建設されて後、崩壊されるに到る七王朝の哀れなる運命に對して熱涙を灑いだ者なぞは、イタリア全半島を通じて、殆んど一人もなかつた。この民心の態度こそは、同一の時

代にドイツに起つたところのものと比較して、實に好個の對照をなしてゐる。

然らば、イタリーとドイツとの間に於けるこの差異は何に起因するかと云ふに、イタリーにあつては、行政上の統一に先だつ久しき以前に於て、既に民心の統一と云ふものが敢行されてゐたからである。ローマ法王國家が廢滅する直前であつたが、其處に居住するユダヤ民族が、連名を以て課税を今少し寛大にせられたいとの愁訴を爲したことがある。然るに、ユダヤ民族は人類の救主を殺害した罪人であるから、その子孫が特に重税を課せられるのは自業自得であるとの明白な理由の下に、右の愁訴は一溜りもなく却下された。ユダヤ人は祭禮のとき、必ず豚一頭を献納する義務を負はされてゐた。そして、民衆の娛樂の爲めに、テスタチヨ丘の山腹にその豚を轉がすのであつた。然るに、焉んぞ知らん、山腹に轉がすのは、以前までは、豚ではなく、ユダヤ人その者であつたのであるが、遂に法王クレメント九世の時に及び、特別の慈悲を以て、この風習を改め、ユダヤ人に代ふるに豚を以てするに至つたのである。

これ等の事實は孰れも、ローマ人が如何にユダヤ人を蔑視してゐたかを證據立てるものであるが、かくの如き輕侮的風習に慣れてゐたにも關らず、一度び法王國家がイタリー王國に併合されるや、ローマ人は多數のユダヤ市民を市參事會員、地方參事會員、又は國會議員等に選舉して、往日の態度を一變せしめたのである。アリスチード・ガベリは曰く、「輿論に於て既に斷行された革命は總ての障礙を除去するに十分である」と。

又、アメリカ合衆國の南北戰爭に於て、勝敗の數を決せしめたのは、管に北軍の武力のみではなく、戰爭の終局近くに、南部諸州の奴隸使役者の大多數が漸く自分等の道德上の過誤を覺り始めた爲めであつた。この種の實例は一々枚擧するに邊の無い程である。

階級利己主義

煽動の目的は對手の自信を攪拌せしめ、且つ味方の主張する議論の方が遙かに堅實であることを、敵對者をして確信せしめるにある。社會主義は、修辭學の偉大なる力と勸誘の強制力を安く評價することを禁物とする。蓋し、これ等の武器があつてこそ、初めて社會主義は勝利を獲ることが出来るからである。

然し、勸誘の力が如何に偉大であると云つても、其處には自ら社會關係によつて強制される一の制限がある。勿論、この勸誘の力を用ひて、一般民衆若くは社會階級の信念を動かし、

斯くして彼等自身の解放を目的とする一の運動に参加するやうに彼等を誘導するならば、普通の状況の下に於ては、かくすることによつて積極的結果に到達することは甚だ容易である。

然るに、これに反し、若しこの勧誘の力を誤用して、特權階級に對してこれを振り翳し、彼等に向つてそれが不利を招くにも關らず、一の階級として又は一個人として、彼等が社會上に占めつゝある指導的地位を抛擲せよなどと折檻するならば、かくの如き勧誘の企圖が全然失敗に終るべきは、社會争鬪史より吾々が幾度となく學ぶ所である。

個人は決して經濟的の自働人形ではない。その生活は、一方に於ては、彼れ自身の經濟上の欲求、及び或る一定の階級又は閥に彼れを拘束してゐる利害關係と、他方に於ては、階級上の考察以外社會争鬪の圏外にあつて、しかも純然たる經濟的行路より彼れをして逸脱せしめ、彼れを誘引して或る理想的天地の勢力圏内に彷徨せしめ、彼れ自身の個性をより、良く調和する方法を以て自由に行動し得るやうに誘導する力を有つた情熱を彼れの胸底に燃えしめるやうな幾多の傾向との不斷の抗争より成立つてゐるのである。

然しながら、上述の事實は、いづれも一個々人についてのみ適用し得るものである。民衆は一個々人と全く趣を異にし、一個の經濟的自働人形であると評することが出来る。勿論

民衆と雖も、或る病理學的影響を受けて集團を形成する人々を誘引して、純然たる物質的利益と軋觸するやうな活動を爲さしめることが無いとも限らぬが、その事は茲では姑らく措くとして、所詮、民衆そのものは一の經濟的自働人形たるを免れない。そこで民衆の人員を共通に表示するには、民衆の經濟的利益と云ふ烙印を以てすること、恰も一群の羊がそれ／＼持主の烙印を捺されてゐるやうなものである。従つて、此烙印は、これを捺されてゐる各個人には必ずしも有益なものでもなければ、その個人の目的と合致するものでもない。これ恰かも、羊の背上の烙印が、必ずしもその動物にとつて必要でないのみか、偶々彼れをして屠殺の悲運に陥らしめる位なものであると同じ理である。

然し、些か異なる所は、人類の群に於ては、この經濟的利益と云ふ烙印は、その影響を物質的生活にまでも及ぼすと云ふ一點である。經濟上の状態如何によつて強制される仕事の種類及び利益の種類は、人間の精神及び肉體の孰れをも、人間の爲す職業に頼らしめるのである。

今や社會主義の教義がブルジョワ諸家族の多くの子弟等の腦裡に深く喰ひ入つて、彼等が、この主義の爲めには、他の何ものをも放棄する決心を示すまでに、彼等の心を動かし、彼等をして、その父も母も、友人も親戚も、又は社會上の地位も尊敬も、悉く捨てゝしまつ

て顧みざること敏履の如くであるまでに、彼等を疊惑せしめるに至つたことは動かすべからざる事實である。彼等は、社會主義の目的とする人類の解放の爲めに、その全生涯を捧げることを、少しも躊躇せず、又これを悔いない。然し、茲では、唯だ單獨の例ばかりを取扱ひ經濟階級の全體を代表する集團には言及しないことを斷つて置く。

さて、斯様に經濟階級から子弟が脱走して、民衆階級の方へ赴いたにしても、これ等の脱走者を出した階級は、それが爲め少しも勢力を弱められることはない。蓋し一つの階級は決して、自己にとつて有利なる地位を自發的に敵に明渡すやうなことはしないからである。換言すれば、彼等の目から見て、自分等よりも貧しいと思はれる同胞の利益の爲めに、自分等の今までの優勢な地位を棄てざるを得ざるに至る程強力な如何なる道德上の理由をも彼等は認めないのである。かくの如き行動を採ることは、他の何ものによつてとなくとも、少くとも階級利己主義と云ふものによつて堅く禁じられてゐる。

ところでこの階級利己主義よりして、例へば、國家のその如き、若くは軍隊のその如き、強壓主義と相俟つて、更らに連帶主義と云ふものが生じて來るのである。協力的生活なるものは、共同の敵に對抗して自己を防衛する必要があつてこそ、初めて生ずるものである

が、これと同時に、階級意識が發達すればする程、社會的感情はあらゆる階級を通じて、次第に狭められて行き、一方に又、他の社會階級に屬する人々に對する行爲の道德性が漸次減退する代りに、他方に於て、自己と同一の階級に屬する道德心が彌々増進することは疑を容れざる所である。

この階級利己主義と云ふ觀念は、單に經濟階級の屬性とのみは限らぬ。他の總ての階級にもあるが、プロレタリア階級も亦これを、その自然的屬性として有つてゐるのである。唯だプロレタリアに於て異なる所は、彼等の階級利己主義なるものは究竟するところ、抽象的の意味に於ては、階級と云ふやうなことを全然眼中に置かぬ人性の理想と符合する點にある。現にカール・マルクスの『共產黨宣言』中にもかう説いてある。——社會を支配する地位に達し得た往時の總ての階級は、彼等が贏ち得た地位を確保する爲めに、社會全體を自分等の定めたる搾取體制に服従せしめることに努力した。然るに、プロレタリアはこれに反し、若し、彼等が總ての社會的生産力を奪略しようと思へば、唯だ現存の占有法式を、以前から存在してゐる占有法式と共に、全廢するだけで、容易にその目的を達することが出来る。實際、プロレタリアは擁護すべき彼等自身の財産と云ふものを一つも有たないのであると。

勧誘は有力の武器

支配階級及び有産階級の種々なる階層に於ては、この階級利己主義の發達する程度に著しい差異のあることは否定し難い所である。現に、土地所有の代表者、殊にプロイセンにおけるユンケル黨の如きものは、今日でも尙ほ政治上、經濟上及び社會上の權利を主張する總ての者を罪人又は癡狂者として取扱つてゐる。蓋し、かくの如き權利主張は、彼等自身の有する階級特權を危殆に陥れるものであるからである。臆面もなく公言して憚らないのである。尙ほ、現代社會に於ては、このプロイセンのユンケル黨員より、數に於ては、多いのであるが、彼等ほど社會改革に對して敵意を有たず、又、彼等ほど利己心の甚だしくない他の階級がある。これ等と雖もまた、社會上の公平と云ふやうなことには容易に耳を傾けず、その本能性より來る階級的利益が少しでも侵害されるとあれば、斷々乎としてこれに反抗する點に於ては、敢て貪慾なるユンケル黨と選ぶ所がないのである。

而して、この種の階級が跋扈する爲めに、謂はゆる社會改革なるものには、頑強にして變易すべからざる制限が加へられるのである。有産階級が如何に利己的であるかの適例として

は、大地主の黨派を形成する。プロイセンの保守黨がある。彼等は、初めの間は、労働者を保護する立法に極力賛意を表してゐたのであるが、聽て、工場労働者の數が著しく増加せる結果、農村地方に於ける勞力に不足を生じて來たのを察知するに及び、忽ちにして態度一變、以後は工場労働者の境遇を改善する爲めの如何なる法案に對しても、執拗に反對し始めたのである。

事情既に斯の如くであるから、プロレタリアが自己の階級を代表する一の政黨を組織することは全く無理からぬことであり、斯くして彼等が、ブルジョワジーに屬するあらゆる階層を一括して、單一なる階級と見做し、これに反抗して争闘することが、今日の如く、知識も健康も、財産も、總て少數者の獨占到委せらるるやうなことを許さぬ新らしい社會制を實現せしめる爲めの唯一の可能的手段であると考へることは、寔に合理的といはねばならぬ。

プロレタリアを驅つて、階級争闘の戦線にブルジョワジーと戦はざるを得ざらしめる必要と、プロレタリアをして人類の權利と云ふ一般的原则に斯くまで重きを置くに至らしめた必要との間には、其處に何等の矛盾も無い。權力を贏ち得んとする争闘に於て、勧誘が上乘の手段であることは些かの疑も容れぬ。何となれば、既に前にも述べた如く、自己の敵の理想

の方が自分等のそれよりも遙かに公正なる理由の上に立脚し、且つより崇高なる道徳上の目的によつて鼓吹されてゐることを、自己の意志に反してまでも、厭や／＼ながら、確信せざるを得ないやうにされて了つた階級は、正に争闘を續けて行く氣力を失つたものであるからである。尙ほ、自己の權利に信用を置くと云ふことが、争闘に於て、飽くまでも敵に抵抗することを、道徳上正當なりとならしめる唯一の理由をなすに關らず、右の如き階級は既に自己の權利に對してすらも、自信を失つてゐるのであらう。

さりながら、如何に勸誘が有力な武器であると云つても、勸誘だけでは未だ以て足れりとすることは出来ない。何となれば、假令相手の階級が、敵の有する權利の方が自己の權利よりも優秀なものであると云ふ事實を認容した結果、半身麻痺の容態に陥つてゐるとしても、前に述べた自己の階級利己主義なるものに刺戟されて、病軀を提げて、争闘を續け、遂には言語の力でなく、事實の力にのみ初めて屈服しようと決心することもあり得るからである。

以上の考察を綜合すれば、一の公理として、次のやうなことを斷言し得るであらう。即ち一つの階級政黨として團結せる労働者の群中に、ブルジョワ分子が入り込むと云ふことは、主として心理學的の動機によつて決定されるものであり、又、それが自發的淘汰の一過程を

示すものであると。この事實は、今日吾々が通過しつゝある發達の歴史的局面的論理的結果と見做さなければならぬのであるが、かゝる現象を生ずるに至つた特殊の事情に鑑みれば、これを以て直ちにブルジョワ階級の自發的、全般的崩壞の前兆であると解釋すべき理由は一つも無い。これを要するに、互ひに相背馳する經濟的利益を代表する二大階級たるブルジョワ階級とプロレタリアとの間に今日進行しつゝある争闘が孰れの勝利に歸するかを決定するには、個々の孤立せる分子が、一方の階級から他の一方に移動する事實を以てすることは恐らく不可能であらう。

第九章 社會黨々首としてのブルジョワ分子の分析

指導者の色分

社會上の出身の點から考察すれば、社會主義の指導者はこれを二種に區別することが出来る。即ち、第一は、初めよりプロレタリアに屬する者、第二は、ブルジョワ出身の者——否、寧ろ、ブルジョワ階級中の有識階級から出た者、この二種である。下位中産階級、即ち小ブルジョワ階級、小農業者、獨立手工業者及び小賣業者等は、社會主義者の指導者としては、殆んど言ふに足る程の地位を占めてゐない。偶々最も有利な事情の下に、これ等下位中産階級の代表者が労働運動に關係するとしても、それは單に同情的の傍觀者として、その運動に追従するか、さもなければ時々一兵卒として、その列に加はる位のものであつて、彼等が労働運動の首領中に數へられるやうなことは殆んど皆無と云つて良い。

さて、これ等二種の指導者中、元ブルジョワ階級に屬したものは、勿論最初は極力社會主義に反對したのであるが、平均して見ると、社會主義の理想によつて活氣付けられる彼等の熱烈は、却つて生え抜きのプロレタリア畑の首領よりも強いことが、後に至つて分つた。兩者間のこの差異は、心理學上の論據を以て直ちにこれを説明することが出来る。多くの場合に於て、プロレタリアは漸進的進化の過程を辿つて、社會主義に到達する必要を感じない。謂はゞ、彼れは生れながらの社會主義者であり、生れながらにして社會黨の一員である。——勿論、これを以てプロレタリアの總ての階層總ての場合に適用せしめるわけには行かないが、少くとも、これが眞實であると斷言するに足る程、屢々かゝる實例に逢著するのである。

資本主義的發達が長年月に互つた諸國に於ては、或る労働階級の環境、否或る場合には、あらゆる種類の労働者の間に、純眞なる一の社會主義的傳統が存在してゐるのである。即ち息子はその親の階級的精神を繼承するが、それは祖父から傳はつた精神であることは疑を容れない。彼等の血管には、社會主義の血が流れてゐるのである。尙ほ、この傳統に加ふるに、現實の經濟關係を以てしなければならぬし、且つこれと離るべからざる關係にある階級争闘も亦た彼等の社會主義思想を益々助長せしめる一因であることは言を俟たぬ。この階級争闘

には、假令或る一個人が社會主義の原理に如何に執拗に反對しても彼等は結局参加せざるを得ないと同時に、右の經濟關係はプロレタリアをして、如何なる事情の下にも、労働黨に加入せざるを得ざらしめるのである。

社會主義は、プロレタリアの懷抱する階級的感情に反對するどころか、寧ろ右の感情を最も明白に、且つ最も顯著に表現するものである。プロレタリアたる賃銀労働者や労働黨員等は、孰れもその直接個人的利益の理由よりして、一個の社會主義者である。彼等が社會主義を固持する爲めに、失職を餘儀なくされるとか、甚だしきに至つて、最早自らパンを得る途を永久に閉ざされて了ふとか、其他幾多の由々しい物質的損失を招くかも知れぬが、しかも彼等の社會主義的見解たるや、階級利己主義より來る自然の結果であるから、物質的損失の如きは殆んど眼中に置かず、あらゆる困厄に堪へ、社會共通の利益の爲めに艱難辛苦をするといふ理由の下に、寧ろ欣々然として、これ等の困苦に面するのである。又、彼等はその同志によつて、多かれ少なかれ明白にその功勞を認められ、感謝せられることによつて、自ら慰める所があるのである。社會主義を奉ずるプロレタリアの行動は一の階級的行動であつて、多くの場合に於て、それは著しく個人の直接の利益を増進せしめ得るのである。

ブルジョワ魂の遺傳

然るに、ブルジョワ出身の社會主義者の場合に於ては、大いにこれと趣を異にする。これ等の社會主義者中、殆んど一人と雖も、社會主義的環境の中に生れた者は無い。否、それどころではない、彼等の育つた家庭に於ける傳統は、斷々乎として労働者に反對するに在り、否、其處まで行かぬとしても、少くとも社會主義者の熱望に對しては輕侮に満ちてゐる。従つて、プロレタリアの家庭に於けると同じく、ブルジョワの家庭に於ても、息子は父の精神を繼承するのであるが、この場合、その精神たるや、ブルジョワの階級精神である。若いブルジョワの血管を流れるところのものは、社會主義の思想ではなく、多くの種類に分れてゐる資本主義的思想の一である。そして、彼等はこれに加ふるに、智能主義をその父より繼承し、これを以て、自己は優秀なる階級に屬するものと自ら想像して誇るのである。更に他の一面に於ては、このブルジョワの兒を産み、且つ成育せしめた經濟的事實及び彼等が學校に於て受けた教育を考量中に入れなければならぬが、總じてこれ等の事實は、社會主義的熱望を憎惡し、資本主義に對抗せんとする労働階級の争闘に反感を抱かしめるや

うになるのである。斯かる經濟的環境の中に育まれたる彼等は、自己の富について戰慄するやうになる。蓋し、彼等は一度び組織されたるプロレタリアによつて襲撃を受ける場合、彼等の階級に與へらるべき打撃の如何に驚くべきかを想像せざるを得ないからである。

斯くて、彼等の階級利己主義は益々鋭敏となり、遂には社會主義に對する執拗なる蛇蝎視と變ずるのである。一方、學校に於て彼等の受ける教育は、自己が支配階級の一員であるとの感情を彌々確固ならしめる。かくの如き事情の下に、學校と彼等の家庭の環境とが彼等に加へる感化力は、假りに彼等の兩親が社會主義に對する同情者であり、道徳上並びに理智的の理由から、勞働者の爲めに盡瘁するやうなことがあるとしても、彼等のブルジョワ的本能は家庭内に於ける一切の社會主義的傳統を抑壓してしまふのである。

社會主義者の子供が一度び有識階級の教育を受けたとき、彼等の兩親の足跡を踏んで社會主義を信奉するに至ることは極めて稀である。尤もマルクスやロンゲーやリープクネヒトやモルケンプールなどの兒の場合は之れが例外となつてゐることは言ふ迄もない。然らば、何故に社會主義者の家族に於て、その子女が夙くより社會主義的感化を受ける實例が稀であるかと云ふに、疑も無く、それは彼等の家族に於て一般に行はれてゐる所の、社會主義とは全

く没交渉の教育法に起因するものである。尙ほ、これと反對の場合、即ち兒に直接感化を及ぼすべき家庭の環境が、社會主義的意識の發達に敢て反對もせぬと云ふやうな場合に於てすらも、ブルジョワ階級出身の著者は、彼等が嘗て成育された環境の感化を受けることが著しく、假令彼等が社會主義者に同情し、自ら進んで社會黨に加盟した後に於いても、尙ほ依然として自己が生を享けた階級と或る程度まで結束を持續する。

例へば、彼のブルジョワ家庭の婢僕との關係に於ても、彼等は常に被傭者に對する雇主の關係を失はず、これ等の婢僕に對しては、卑俗的の意味に於いてでなくとも、少くとも社會學的の意味に於ける搾取者の態度を以てこれに臨むことを改めないのである。蓋しブルジョワ階級の者にとつては、社會主義の團體に加盟することは、彼れ自身の階級との絶縁を意味するものであつて、影響する所少なからざる社會上及び理想上の損害である上に、現實に於いて物質上の損失をも意味すると見做されてゐるからである。

小ブルジョワの場合には、社會主義への展開は頗る平穩に行はれ得る。蓋し小ブルジョワなるものは、その理智的、社會的事情よりして、絶えずプロレタリアと緊密な接觸を保ち、就中、比較的高い賃銀を受けてゐる手工業者と常に接近して居り、多くの場合あらゆる

種類の階級上の偏見から成り立つ純然たる架空的の墻壁によつて、プロレタリアと隔絶されてゐるに過ぎないのであるから、小ブルジョワジーより社會主義へ轉化するのは、比較的容易な事となつてゐるのである。然しながら、その家庭が富裕であればある程、ブルジョワは益々強く家庭の傳統に囚はれるのが常であり、彼等の占める社會上の地位が高ければ高い程、四圍の人々との關係を絶つて、勞働運動に馳せ參することは、益々困難となり苦痛の種となるのである。

富裕なる資本家又は高官の子女、乃至は家柄の舊い地主貴族の家族の一員などにとつては、社會主義者と握手するが如きは、それこそ、一大災禍を惹起せしめるものと見做されてゐる。勿論、これ等の富豪なり貴族なりの子女が、唯だ漠然たる罪の無い人道主義の夢に耽る位のこととは自由であるし、又、私的會話の中に、「自分は社會主義者である」位のことは口にしても差支へないが、若し一寸でも彼等が社會黨の一員とならうとの意向を示すとか、社會黨の爲めに何等かの公共事業を企てるとか、謂はゆる「叛逆軍」の現役兵にならんとする意志を洩らさうものなら、同階級の者から惡漢にあらずんば、天下の大馬鹿者と見做されるのである。かくして彼等の社會上の權威は全く地に墜ち、彼等に對する敵意はその極度に達し、彼等は

その家族との一切の關係を絶つべく餘儀なくせられるであらう。従つて、最も親密な關係すらも急に斷絶し、親戚は悉く彼等に背を向けるやうになり、最早同族間に、誰れ一人として、彼等を對手にする者は無くなるであらう。

ブルジョワジー脱却の動搖

然らば、有識階級は、如何なる事情の下に、ブルジョワジーを逸脱して、勞働黨に加盟するであらうかと云ふことが問題となる。かくの如き態度に出でる有識階級は、二種に區分せられ得る。

先づ第一は科學者である。彼等が社會主義者として探究せんとする問題は常に客觀的性質を帯びたものである。然るに、世の滔々たる俗人等は、彼等の研究する題目を一見して、それは孰れも價値の無い、妄想的な不經濟的な、無用のものであると思ふのである。しかも、彼等を驅つて社會主義者たらしめた刺戟は、彼等が科學とその收穫との爲めに他の總ての物を犠牲に供し得ると云ふ意味に於て正に理想主義的である。かく行動することに於いて、彼等は正に自己の利己主義の力強い衝動に服従するものであるといひ得る。而してその利己主

義たるや、甚だ崇高な性質のものである。つまり、總てを科學的に組織立てることが彼れの天性の欲求なのである。心理學の教へる所に據れば、人類が自由に自己の能力を行使するとき、其處に爽快と云ふ感情を發生せしめる。従つて、社會主義の科學者が社會黨の爲めに供する一切の犠牲は彼れ自身の個人的満足を増加することに役立つ。彼れが社會主義の政黨に加盟することによつて、幾多の物質的損失を蒙るにも關らず、一方に於いてはより大なる内心の満足を感じることに成り、かくして良心の平靜を得る譯である。

尙ほ場合によつては、彼れの感情は、社會主義の爲めに目覺ましき功勞を爲さうとする功名心の形體を採つて表現することもあり得る。しかも、この場合に於ける彼れの功名心は經歷とか富とか云ふ個人的の幸福を増加せんことのみを焦慮する人々のより卑賤なる野心とは甚だしくその趣を異にするのである。

有識階級の人々にして勞働運動に参加せんとする者の中、第二の種類に屬するものは、社會主義に對する強烈なる感情的愛着によつて鼓吹された人々、換言すれば、神聖なる情火の焰々と胸裡に燃えてゐる人々より成るのである。この種の人々は、彼等がまだ全く弱冠の時代、即ち物質的の考量とか用心とか、彼等の心中に萌芽して、彼等がその天賦の多血質にし

て熱狂的なる氣質の衝動に服従せんとしてゐる途上に防塞を築かない中に、社會主義者の間に身を投ずるのを常とする。彼等は新改宗者の熱誠と、自己の同類に役立つべく盡瘁せんとする欲求とによつて鼓吹されてゐるのである。現にイタリーの小説の中には、青年にして現代社會主義に改宗した人々を取扱つたものが數多あるが、それ等の小説中の青年改宗者は、孰れも寛仁と同情に動かされて、社會主義に歸依したものである。即ちこの種の人物が社會主義者となつた主たる動機は、先づ第一に、不平、不義に對する崇高なる侮蔑、次いで、弱者及び貧者に對する愛、大なる理想を實現する爲めの自己犠牲の念慮等である。蓋し、これ等の感情は最も臆病な、抵抗力の無い性格の人間に對してすらも、勇氣と戰鬪心とを與へるからである。

これ等の感情と相俟つて、ブルジョア畑の社會主義歸依者間には、著しい分量の樂觀と、社會運動の道徳力の意義を餘り高く評價し過ぎる傾向と、又時としては、自分自身の克己心に對する過信とを見出すのが常であるが、更らに、進化の韻律、最後の勝利を獲ることの容易さ等に對する考へ違ひも、往々にして彼等の間に見る所である。社會主義的信念も亦、多くの場合に於いて、審美的感受性によつて養はれるものであるから、従つて詩的傾向を有ち、

且つ又熱烈な想像力に富む者は、人類の苦惱の廣さ及び深さを掴む上に於て、どうしても普通一般の者よりも早い譯である。しかのみならず、彼等の想像する目的と自己の社會的地位との間の距離が大であれば大である程、尙ほ一層自由に自己の想像を解放せしめることが出来るのであつて、労働者の解放の爲めに現に戦ひつゝある闘士の中に、斯くまで多くの詩人、空想的文士、並びに猛烈なる多恨多情的にして衝動的なる性格の人々とを斯く多數に見出すことは、全く以上の理由に基くのである。

理性本位と感情本位

さて茲に起る疑問は、然らば、以上分類した二種の人々、即ち一方に於ては、理性的の確信から社會主義者となるもの、他方に於ては、感情的の考察によつて誘引されるもの、これ等二種の中、孰れがヨリ多數であるかと云ふことである。

吾々の觀る所によれば、青年時代に社會主義者となる人々の間には、感情主義者がどうしても多いやうである。これらに反し、十分に成熟してから後社會主義に改宗する者は、概して科學的の信念によつて指導された結果、思想の變化を來した者であることを常とする。

尤も、これ等の二種が劃然と區別されたものでないことは言を俟たぬ所であつて、大多數の場合に於て二種の動搖は一人の人間に混濁して作用する。實際ブルジョワにして、道德的には、常に社會主義に賛意を表し、正義の要求に合致する社會問題解決の途は社會主義を措いて他に無いとの意見を持し、しかも自己の胸中の熱望が單に正當にして美しいのみならず、必ずこれを實行に移すことが出来ると云ふ信念——この信念は、往々にして、全く思ひがけない時に、突如として起つて來るものであるが——を得るまで、社會主義の教理に實際的に歸依するのを躊躇すると云ふ人々が非常に多いのである。即ち社會主義に對するこれ等の人々の見解は感情と科學との綜合なのである。

一八九四年、嘗ては「インタナショナル」の一員であつたイタリーのグスタヴォ・マツキが、同國內の重なる藝術家及び學者に向つて、社會主義に對する彼等の態度に關して質問を發し、その回答を求めたことがある。即ち、社會主義の目的に達する彼等の同情、社會主義に對する無關心、若くは敵意、その孰れであるを問はず、それは社會主義的諸問題を具體的に檢査した結果であるか、それとも又、彼等の感想は純然たる感情的性質のものであるかどうかと云ふ質問を試みたのである。ところが彼等の大部分は、その回答に於て、社會主義に

對する彼等の態度が心性的傾向が更らに客觀的信念によつて益々確固にされた結果であることを告白した。若し、これと同じ質問をマルクス主義者に向つて發したとすれば、彼等が總ての空想論や感情的の同情を排斥するにも關らず、又彼等が好んで自己の窓頭を飾るに唯物主義を以てせんとするにも關らず、必ずや右と同様の意味の回答を爲すであらう。マルクス主義の徒が全然政黨生活に没頭せぬ限り、否、寧ろ彼等が全く政黨生活の羈絆によつて拘束されて居らぬ以上、如何に唯物主義を標榜するとも、彼等は、その實質に於ては純然たる理想主義的なる原理を顯示するものであると云はねばならぬ。

尤も社會主義に同情を表し、若くは社會主義の原則が眞理であることを合理的に確信する人々の總てが、實際に社會黨員となるとは限らない。多くの人々は未知の群衆と親密な交際を結ぶことを考へるだけでも、一種言ふに言はれぬ不快の感を懷く。又、或る者は、必ずしも常に身體を清潔にし、芳香を放つとは限らぬ人々と接觸することを想像するだけでも、一種の審美的嫌厭を経験するのである。更らに多く見出される現象は、無精の性質の爲めか、又は、成るべく當り障りの無い平靜な生活を愛することを誇張して言ひ觸らすか、又は公然と社會黨に加入することは、自己の經濟上の地位に不利な反動を及ぼすであらうと云ふ、多

少尤も千萬と思はれる懸念を懷く爲めに、社會主義に加擔するのに二の足を踏む人々である。又、時とすると、社會黨に加盟する決心を起させる衝動が、何等か外界の事情によつて與へられることがある。その衝動たるや、それ自體に於ては極めて些細なものであるが、その本人の決心に最終的の刺戟を與へるに足る程強力なものである場合もないではない。それは集團全體の感情を動搖せしめるやうな社會上の不公平の著しい一例であることもあらうし、又は或る個人がさらでだに社會主義者たらんとしてゐる人、又はその人にとつて甚だ大切な人の一人に對して加へた不法行爲であることもあらうが、兎に角そんな場合には、必ず、利己主義が俄然爆發して、利他主義的傾向が徐々と働いてゐる處に決定的の巨弾を投じて、これを粉碎して了ふのである。

又他の場合にあつては、運命の必要に迫られ、または人間の悪意と愚劣との結果、社會主義者となることもあり得るが、斯かる場合には、往々にして今までは極く祕密に運動してゐた社會主義者が、殆んど自らも思ひ設けず、驟然起つて公々然と名乗りを揚げるのである。

例へば今までブルジョワジーに屬しつゝ、私かに社會主義の運動にも關係してゐた者が、何等かの事情の下に、圖らずも、自己の懷く社會主義的思想を滿座の前に暴露して、その結

果、同階級の人々の信用を失墜して了ふと云ふこともあり得る。多くの場合に於て、ブルジョワ階級の人々が労働運動に加盟するに至つた原因は、自分自身の輕卒なる言動の爲めに、そのときまで秘密にしてゐた社會主義的思想をブルジョワの新聞紙上に發かれて、自分を一のデイレンマに陥れた場合である。即ちかゝる侮辱を受けつゝも、尙ほこれを忍んで、依然ブルジョワに籍を置く如き屈從的態度に出るか、然らずんば、既に暴露されたが最後、公然自己の社會主義的傾向を天下に發表するか、二途一を採らねばならぬのである。この種の人々が社會黨員に早變りするのは、恰かも年若き女子が、時としては、自分の欲せざるに母となることに比すべきである。

ロシアの虛無黨員ネッチェフは、社會主義的傾向を有しながら、公然これを名乗ることを躊躇する臆病な人々の假面を剥ぎ彼等を自己の黨内に引入れると云ふ考案を以て、その革命的煽動の策戦計畫の基礎となした。彼れは常に主張して曰く「革命家の義務は、彼れとその思想の大部分を共にしながらも、未だその悉くを互ひに分つことが出来ぬか又は自己の思想上の傾向を勇敢に天下に公表するには餘りに臆病なこれ等の人々の總てと妥協するにある。蓋し、斯くすれば、決定的に敵黨と絶縁するやうこれ等の人々に強要することが出来、且つ

吾々の神聖なる目的に、更らに有力なる應援を得たことゝなるからである」と。

有識階級の社會主義者

社會主義的思想に對する受容性が、自由職業の種類を異にするに従ひ、それ〴〵差異のあることは、今日まで屢々斷言された所である。それで最も嚴密なる意義に於ける推理的科學、例へば、哲學、歴史、經濟學、神學、法律學等は、これ等の研究に従事する人々があらゆる壞亂的思想を受容することに先天的に反抗する程深刻に、過去を尊重する精神によつて浸透されてゐるのである。中んづく、法律を研究し、法律を職とする人々に至つては、秩序を愛する念慮、現存の事物に對する執着、形式に對する森嚴なる尊重、進展の緩漫、尙ほ強ひて云へば、一種見解の狹隘等が深く彼等に吹き込まれてゐて、これ等の傾向を目して、民主主義の錯誤に對する當然の訂正であるとするに至ることは屢々論ぜられる所である。

一般的の意味に言ふ演繹的科學及び抽象的科學は、その精神に於て言ふ權勢的であり、貴族的であるから、従つてこれ等科學の道を進む人々は、その見解に於て反動的、空理的に傾くことになると思はれてゐる。然るに、實驗的科學及び歸納的科學に没頭する人々はこれに

反し、勢ひ彼等の觀察能力を用ひるに傾き、従つて漸次その概括の範圍を擴大して行くやうに導かれるので、彼等は自然進歩主義に傾くことになる。殊に醫師の如きは、その職業が絶えず人類の悲運を對手として抗争するにあるだけに、その心中に社會主義的概念の萌芽を藏するに至ることは、少しも怪しむに足らぬと信ぜられてゐる。

然るに、種々なる社會主義の政黨に屬する有識者の職業を分析して見ると、必ずしも右の理論を肯定することが出来ないやうである。社會主義者の群に多數の醫師を見るのは、フランスとイタリーだけであつて、そのイタリーに於てすらも彼等の數は純正科學者にして社會主義者たる人々の數よりも少く、法律家よりは遙かに少數である。ドイツにあつては、社會主義の勞働者と、生活難に絶えず悩まされてゐるにも關らず、その保險局附の醫師との關係の疎遠さは、實に想像を通り越してゐる。これを要するに、大體に於て、社會主義に對する醫師の態度は、抽象的科學に没頭する哲學者や、法律家、辯護士等に比して、遙かに冷淡であり反感的であることは世界各國を通じての事實である。

その理由の一は、恐らく他の有識者にもまして、醫師の間には、過去四十餘年の長きに亘つて、唯物主義的に概念され、且つ頑強に固執され來つたダーウキン主義及びヘッケル主義が

今日も尙ほ依然跋扈してゐる爲めであらう。又、これを補足する原因としては、例の、^{チニ}大儒主義がまだ勢力を占めてゐて、しかもそれが極端なる自我中心主義まで展開され、多くの醫師は大概この大儒主義にかぶれてしまひ、その結果は彼等の畢生の事業と離るべからざる惡縁として、常に彼等に附纏ふ屍室の惡臭に對する當然の反動となり、加ふるに、彼等が職業上日夜接觸する人體の醜惡虛弱等に關する經驗も此點に影響を及ぼすのである。

二三の新教國、例へば、オランダ、スイス、イギリス、アメリカの如きに於ては、多數の僧侶を社會主義者の間に見る。しかし、ドイツは例外である。蓋し、同國に於ては、政府が強力であり、血大の眼を光らして監視する上に、ルーテル教が甚だ嚴肅且つ狹量少しでも異端を容れぬからであらう。兎に角新教國に於けるそれ等の社會主義僧侶は、隣人に對する義務と云ふ甚だ崇高な動搖を以て、社會主義者の仲間入りをするに至つたのであると云はれてゐるが、單にそれのみではなく、俗界の辯士と少しも選ぶ所なく彼等と雖も、一般群衆をして己れの説に耳を傾けしめ、己れに従はしめ、己れを渴仰せしめんとする強烈なる欲求を有つてゐるので、この欲求こそ彼等をして社會主義に歸依せしめた一因であらう。従つて彼等に聽く群衆の信者、不信者如何は、彼等の問ふ所ではないのである。

ユダヤ人と社會主義

次に、社會黨並びに革命黨の首領株の中にユダヤ人の多いことに就いて、一言述べて見よう。元來ユダヤ人はその特殊の民族的性格から觀て、先天的に民衆の指導者として生れて來たものである。否、ユダヤ人は先天的に組織に長じ宣傳に長じた人々である。

先づこれ等の性格の第一は、例の宗派的熱狂主義である。この主義は驚くべき迅速さを以て、恰かも疫癘の如くに、民衆の間に傳染する力を有つてゐる。次に擧ぐべきは、彼等の不撓不屈の自信力である。これは、苟くもユダヤ民族史を緝いたものが、等しく、その多くの豫言者の生涯の中にまさしくと發揮されてあるのを見る所である。尙ほ、彼等の特色の一つとしては、その稀に見る雄辯と、討論的性向とを擧げなければならない。過去七十五年間、苟くも民衆を動搖せしめた新思潮運動にして、これにユダヤ人が牛耳を執らなかつたものは一つも無いのみならず、それ等の運動の中若干のものは、純然たるユダヤ民族の運動である。まで見做さなければならぬのである。如上の性格に搗て、加へて、著しく強烈なる野心、白熱光の間に自己の幻影を鮮かならしめねばならぬと云ふ抵抗すべからざる名譽心、更らに、

殆んど際限を知らずと思はれる程の包容力及び適合力、總てこれ等のものが相俟つて、ユダヤ人をして先天的に、民衆指導の器たらしめたのである。

革命を創始する者はユダヤ人である。破壊力に對する國家並びに社會の抵抗を創始する者も亦ユダヤ人である。社會主義と保守主義、兩々相反撥するこの思想は、實は、共にユダヤ人の手によつて鑄造され、ユダヤ魂を打込まれたものである。例へばドイツに於て、一方に革命の火焰を煽上した者はマルクス及びラッサレであると同時に、他の一方に於て、一八四八年以後、封建的反應主義の燦然たる理論家として、ユリウス・スタールを見出したのである。

イギリスに於ても、保守黨の黨勢を挽回したのは一個のユダヤ人デイスレーリであつた。相互の反噬憎惡によつて焚きつけられた諸國籍の民を、互ひに唾み合せる運動の陣頭には、常にユダヤ人が見出される。ヴェニスに於て、オーストリア人に反抗して、自由の旗幟を翻へしたのはダニエル・マニンであるが、彼れも亦ユダヤ人である。普佛戦争に際し、フランスの國防はガンベッタの手によつて爲された。イギリスにあつて、デイスレーリは「イギリス帝國の領土保全」と云ふ標語を創造したが、他の一方に於てドイツ帝國の國礎を建設するに重要な役割を演じた國民主義的自由主義の領袖株エドゥアード・シムソン、バンベルゲル、及びラス

ケルはこれ亦孰れもユダヤ人である。更らに、オーストリアに就いて見るに、ユダヤ人は國民主義の色彩濃厚なる殆んど總ての政黨の前衛を形成した。尙ほ、ドイツに於けるボヘミア人、イタリーの舊領回復論者、ポーランドの國民主義者中、殊にマヂャール人の中に於て、最も熱狂的なのはユダヤ系の人々である。ユダヤ人は、實に、如何なる種類の運動をも組織し創始する能力を有つてゐる。更らに驚くべきことには、排ユダヤ運動の指導者中にも少からざるユダヤ民族の苗裔が見出される事である。

ユダヤ人の優越

然しながら、ユダヤ民族の適合性とその智能の澄冽とを述べただけでは、未だ以て、労働黨員としてのユダヤ人が、その量と質とに於て、如何に優越であるかを説明するに足らぬ。中んづく、ドイツに於ける労働運動の上にユダヤ人の勢力は著しいものがあることを忘れてはならぬ。最初の二大首領たるフェルディナンド・ラッサレ及びカール・マルクスは共にユダヤ人であり、彼等と同時代のモーゼス・ヘッスも亦ユダヤ人であつた。社會主義者の團體に参加した舊派政治家の嚆矢として名聲高きヨハン・ヤコビーも亦ユダヤ人であつた。ドイツ屈指の

理想主義者カール・ヘッベルヒも亦ユダヤ人である。彼れはフランクフルト・アム・マインの一紳商の子であるが、ドイツ語で書かれた最初の社會主義評論雑誌の創刊者として、ドイツ全國、否、全世界にその名を知られてゐる。

又、ドイツに社會主義者の大會が開催される毎に、殆ど毎回議長席を占めた有名なるパウ・ジンゲル、彼れも亦ユダヤ人であつた。尙ほ、ペナルチメート總選舉の結果、ドイツ帝國議會に議席を占めた八十一名の社會黨議員中、九名まではユダヤ人であつた。この比例は一見甚だ低率のやうに思はれるが、ドイツの總人口に對するユダヤ人の百分比、同國に於けるユダヤ労働者の總數、及び同國社會黨のユダヤ黨員の數と對比すれば、著しい高率を示すことが判る。そしてこれ等九名の議員中、四名までは尙ほ正教派ユダヤ人であつた。シュタットハーゲン、ジンゲル、ヴルム及びハーゼの四名が即ちそれである。幾多の方面に於て、ユダヤ人は労働黨の爲めに殆んど量り難い程の功勞を致した。例へば、理論家としては、エドゥアルド・ベルンシュタイン、ハインリッヒ・ブラウン、ヤコブ・ステルン、ジモン・カッツェンシュタイン及びブルノー・シエンランクの如き、新聞、雜誌記者としては、グラドナウエル、アイズネル、ヨゼフ・プロッホの如き、代表者の檢眼を市政の方面に轉ずれば、ユーゴー・ハイ

マンの如き、更らに選舉事務の専門家としてはレオ・アロンスの如き、青年社會主義者の編制者としては、ルドウ・ヒ・フランクの如き、その主なるものである。

尙ほ、オーストリアの社會運動に於ても、ユダヤ人は顯著なる優越を示してゐるが、茲には唯だヴ・クトル・アドレル、エレンボーゲン、フリッツ・アウステルリッツ、マックス・アドレル、エフ・ヘルツ、テレゼ・シュレジンゲル、エクシュタイン、ディヤマンド博士、アドルフ・ブラウン等の名を列擧するだけで十分であらう。アメリカに於てはモリス・ヒルキット、エム・サイモンズ、エム・ウンテルマン等を擧げることが出来る。更らに、オランダに於ては金剛石砥工場職工の指導者アンリ・ボラク、マルクス主義者ヴァインコオブ及びメンデルス等があり、イタリアに於ては、エリヤ・ムサッチ、クラウディオ・トレヴェス、モディリヤニ、リカルド・モミリヤノ及びアドルフ・オ・モミリヤノ、フ・アー及科學者セザレ・ロンブローゾ等がある。フランスでは、ユダヤ人の活動はヨーロッパの他の諸國に於ける程顯著ではないが、それでも尙ほ、吾々はポール・ルイ、エドガール・ミロー及び一九〇四年代に於ける社會黨機關紙『ユーマニテ』の株主連を擧げることが出来る。實に一八七九年に開催されたフランスに於ける第一回の勞働黨會議は、ガンベッタ内閣時代にアルゼリヤ總督であつたユダヤ人イザアク・

アドルフ・クレミューの太つ腹な財政上の援助によつて、その開催が可能とされたのである。多くの諸國、例へばロシア及びルーマニヤ、中んづく、ハンガリーやポーランドに於ては、勞働黨の指導は殆んど例外なく、ユダヤ人の掌裡に委せられてあつたことは、國際勞働會議に派遣される各國の代表者を檢べて見ても、直ぐ判るのである。殊に茲に注目すべき一現象としては、ユダヤ系統のプロレタリア指導者の多數が、ロシアから他の諸外國の社會黨の許へ自發的に赴くと云ふ事實がある。例へば、ローザ・リクセンブルグ及びイスラエル・ヘルファント博士（別名パルヴァス）の兩名はロシアよりドイツに渡つたものであり、シャルル・ラッポポールはフランスへ、アンナ・クリシヨフ及びアンゲリカ・バラバノフはイタリアへ、ライエスベルヒ兄弟はスキスへ、ベエル並びにテオドール・ロトシュタインはイギリスへ、それぞれロシアから自發的に移住したものである。

最後に、この比較的長い人名簿を終へるに方り、ドイツに於ける最も著名な無政府主義者の中には可なり多數のユダヤ人がゐると云ふことを茲に一言附加へて置きたい。即ちグスタフ・ランダウエル、ジグフリード・ナハト、ビエール・ラミュー、ヨハネス・ホルツマン等の如き、その中の鏘々たるものである。

迫害に對する反動

ユダヤ人が社會主義者の群の中に占めてゐるこの優越的地歩へと云つたところでこれは必ずしも労働黨が富裕な資本主義的ユダヤ同志の金力を頼みとする一の徴候としての「世界のユダヤ化」と云ふやうな意味の語と見做すべきでは決してないことを、茲に斷つて置くの源泉は何であるかと云ふに、少くともドイツ及び東ヨーロッパの諸國の關する範圍内に於ては、ユダヤ人が今日まで占め來り、又多くの點に於て、今も尙ほ占めつゝある特殊の地位に因るのである。これ等の諸國にあつてはユダヤ人の法律上の解放は實現されたが、これに繼ぐに彼等の社會上並びに道德上の解放を以てするに至らなかつた。現にドイツ人の大部分は依然ユダヤ人に對する憎惡の念を捨てず、ユダヤ人迫害の精神が尙ほ到る處に瀰漫してゐて、ユダヤ人に對する侮蔑はドイツ人の一種の永久的感情となつてゐるのである。従つて、ユダヤ人が公的生活に入らうとしても、その機會は痛ましいまでに阻まれて居り、法律の事務に従ふことも、軍隊に入ること、官職に就くことも、ユダヤ人には事實上全く不可能な位に擯斥されてゐる。しかも、ユダヤ民族の棲む處、その何處たるを問はず、彼等の間には、常

に自分等がその下に苦しんでゐる虐政や、惡法に對しては、何時でも叛亂を企てようとする昔ながらの正當な精神が横溢してゐる。而してこの感情は、感激を受けた一民族を益々活氣づけると云ふやうな理想主義的の性質に基くものであつたが、今や現代のユダヤ人に於ては一般の不義不正に對する沒我無私的の蛇蝎視となつて現はれ、更らに一步を進めて、世界改善と云ふ一大抱負に對する革命的の衝動にまで高められた。民族的感情のかかる變化は、ドイツの血の流れてゐる民族に於けるよりも遙か容易に行はれたのである。

彼等は如何に富裕であるときでも、少くとも東ヨーロッパに於ては、その現行の政治、經濟、智能制度が非ユダヤ民族に對して保障してゐる社會上の總ての利益から疎外されてゐる特殊人民扱ひをされてゐるのである。而して狹義に於ける社會、つまり普通世間と稱せられてゐるものは、ユダヤ人と齒ひすることを恥ぢ、輿論は常に彼等にとつて不利なのである。

斯くまでの迫害と侮蔑とを受けてゐる以上、ユダヤ人がこの不公平に對し不滿の感情を懷くのは勢の然らしむる所であるが、この怨恨と結び附けられて、彼等は往々四海同胞主義の傾向を示すのである。この傾向は、彼等が自民族の歴史上の經驗によつて、著しく發達せしめられたものであつて、四海同胞主義と不公平なる待遇に對する怨恨とが結合して、茲に勞

働者を代表する政黨との握手提携と云ふ形になつて現れたに外ならぬのである。一方に於ては、理性に導かれ、他方に於いては、感情的考察に促がされたユダヤ人が、ブルジョワジの築いた防塞を無視する斯くまで速かであつたことは、全く彼等の間に上述の如き傾向が萌芽してゐたからに外ならない。さればブルジョワジーが斯かる防塞を自己の階級とプロレタリアとの間に築いて、革命の急流を堰き止めんとし、その革命運動の背後に絲を操る者は三界に國無しと云ふユダヤ人であると、警鐘を亂打するけれども、當のユダヤ人は斯かる防塞位は物の數とも思はぬのである。

これ等の理由が存するので、ユダヤ人の理智は、非ユダヤ人よりも早く、社會主義に接近する捷徑を見出すに傾いてゐるには相違ないが、さればとて、社會黨のユダヤ有識階級に對して負ふところの義務が、これが爲め軽減されたと云ふ譯ではない。茲に於てユダヤ有識階級と云ふ所以は、一概にユダヤ人と云つても、富裕なる商工階級に屬するユダヤ人及び謂はゆるユダヤ人の小ブルジョワに至つては、總選舉の場合には、屢々社會主義者の爲めに一票を投ずることを吝まぬに關らず、いざ社會黨に加盟すると云ふ段になると、斷乎としてこれを拒絶するからである。即ち、今日世界の社會黨が義務を負うてゐるユダヤ人はその有識階

級に對してのみと云ふも過言でないのである。茲に至ると、階級上の利害は民族上の利害よりも重い譯である。

更らにユダヤ有識階級の社會黨に對する關係に至つては、大いに趣を異にしてゐる。統計の示す所によれば、彼等の二乃至三パーセントは社會黨に屬するものである。而してその社會黨が何等躊躇する所なく、常に排ユダヤ的感情に反對の意を示してゐると云ふ事實は、國民主義と云ふもの全體及びあらゆる種類の人類的僻見に對する理論、社會主義的反感にも因るけれども、社會黨なるものがユダヤ有識階級に負ふところの總てを意識してゐると云ふことにも起因するのである。

排ユダヤ社會主義

排ユダヤ社會主義なるものは一八七〇年頃初めて出現したものである。當時ベルリン大學の講師であつたオイゲン・デューリングはマルクス及びその同志の謂はゆるユダヤ社會主義に對抗すべく、ドイツ社會主義なるものゝ爲めに運動を開始したのであるが、この運動は愛國的動搖を以て甚だしく鼓吹された。何となれば、デューリングは、若しマルクス派の社會主義

が勝利を獲れば、その結果は、全然國家を人民に従屬せしめることとなり、しかも、これによつて利益を占めるものは、單り有名なユダヤ人及びその門弟のみであることは、火を賭るよりも瞭かであると痛論したからである。次いで一八七五年頃に及んで、デューリングはベルリン社會主義者と銘打つた小聚團の中心的人物となつた。この聚團の會員にはヨハン・モストも、ユダヤ人のエドゥアルド・ベルンシュタインもゐたのである。この小聚團の勢力は一時中悔るべからざるものがあつたけれども、謂はゆる「ユダヤ人マルクス」で通つてゐるカール・マルクスの精神的の親友たるフリードリッヒ・エンゲルスを向うに廻して、デューリングが試みた一大論争に、彼れが一溜りもなく敗北して後は、遂に再び起つ能はざるに至つた。實際、社會主義民衆に於けるデューリングの勢力は、彼れの開始した排シユム派運動が活氣を呈するに従つて、次第に減退し始め、一八七八年頃になつて、全く失墜して了つたのである。

一八九四年には、社會主義に排ユダヤ傾向を帶ばしめんとする新たな企畫が試みられた。これもデューリングと同じく、著しく國民主義的の見解を有つた社會主義者リヒャルト・カルヴァーの事業であつた。當時彼は『ブラウンシュヴァイヒ民友』紙の一記者であつた。彼は公言して曰く、「有能なユダヤ人文士一名に對し、全く無能で、何等の價値のないユダヤ文士は少

くとも十二名はゐるだらう。これ等の徒輩は無能、無價値の辭に、自我主張だけは驚くべく強く、且つ滔々數萬言を費すことは知つてゐるが、その實、社會主義に關しては眞の理解を全然有つてゐないのである」と。然しながら、カルヴァーの挑戦はデューリングのそれよりも以上の成功を収めることが出来なかつた。

これより一年以前、小ブルジョワ階級中の排ユダヤ主義が一の排資本主義運動として、ドイツ全國に互つて擴まり、將に一の政黨を形成せんとする域にまで進み、各地に多くの犠牲を出したので、一八九三年十月、ケルンに於ける社會黨大會はこの新政治運動に對し、明確なる態度を採つた。その當時、ペーベルの報告書なるものが發表された。排ユダヤ社會では、非常なる満足を以て、この報告書を期待したのであつたが、その期待は見事に裏切られた。勿論、ペーベルの報告書は徹底的にして、盡さざるなしと云ふところまでは行かなかつたが、兎に角、徹頭徹尾、ユダヤ人に對する友誼的感情を以て鼓吹されてあつた。右の報告書の中にペーベルは述べて曰く、「ユダヤ學生はその大學生活の大部分を通じ、概して甚だ勤勉であるが、ドイツの學生はこれに反し、酒場や料理店や擊劍學校やその他の場處に於て重なる時間を空費することが最も普通である」と。ヴァルヘルム・リーブクネヒトは、ビーレ

フェルトに於ける彼れの有名な演説中に、ケルン議會によつて表示された排ユダヤ主義を飽くまでも非とする所信の論點を著しく強めた。

その時以來、(一九〇一年、リュベック議會に於て、辯護士ヴォルフガング・ハイネがバルツプス及びローザ・リュクセンブルグとの論争に於て爲した或る議論——これは主義主張の表白と云はんよりは、寧ろ甚だ拙劣な議論で、最も酷く評したところで、たかくドイツ學生聯盟の牛耳を執る者として通つてゐる白面の一青年の懷舊談位に過ぎないつまらぬものである) ドイツの社會主義者は宛然人種的憎惡の病毒には免疫になつたかの如き有様で、爾來一切人種問題を打出さず、偶々無智なる反對派の者が、彼等を嘲笑して、「ユダヤ人及びその寄生蟲」より成る黨派などと酷評を加へ、彼等に反對して一般民衆の僻見を喚起しようと努めても、彼等社會黨員は全く我不關焉と云つたやうな態度を示してゐた。

富豪と社會主義

吾々は茲に、富豪階級の人々が屢々社會主義を信奉する事實に就いての評論を附加へて見たい。斯かる信奉は一見甚だ奇異ではあるが、深く觀察すれば、彼等が其處まで行くのには、

矢張り相應の理由の存することが判る。極めて柔和な慈善的人で、自分の慾望一として満たされざるなく、大厦高樓に溫袍暖衣に飽きてゐる程の者が、時には宣傳運動的の活躍を試みたいと云ふ欲求を靈感することがある。例へば、自己の幸福を己れ一人で享樂せず、貧しい隣人とこの福祉を分かちたいとの希望を懷くが如きそれである。彼等は謂はゆる富裕なる慈善家なのである。そして、多くの場合この種の人々の行爲は、超神經過敏か又は感情主義に胚胎する。つまり、他人の苦痛を傍觀するに忍びないと云ふ譯であるが、それは實際に於て彼等がそれ等の苦しめる人々に對して、純眞の憐愍を感じるが爲めと云はんよりは、寧ろ他人の此の如き苦痛を自ら目のあたり見ることが自己に苦痛を惹起せしめ、自己の美的感覺に衝擊を與へるので、それに堪へられない爲めなのである。謂はゞ、鳩が無殘にも屠殺されるのは見るに忍びないがその時の憐憫の感情は、必ずしも食膳に載る鳩肉のパンに對する嗜好を傷けるものではないと云ふ理窟なのである。

家に巨萬の富を擁して、これを凌駕する何物も無いが、唯だ人の意表に出づるやうな矛盾の逆説を好むことだけがその富以上であると云ふやうな病的頭腦の所有者の腦裡には、一の幻想的信念が生じて來る。その信仰とは何か。彼れは革命の動亂が愈々目睫の間に逼つたと

聞いて、自己の財産を革命軍の恐ろしい没収に委することを防ぎ、これを安全に保有するの途は、自己が社会主義の歸依者であることを告白するより外に無い。蓋し斯くすれば、革命軍の信用を博し、社会黨首領の強力にして有益なる友誼を贏ち得ることが出来るであらうとの信念が即ちそれである。この巧妙なる信念に基いて、この種の人々は、物の見事に、社会主義者の手に抱擁されたのである。

富豪の中には更に他の一派がある。彼等は貧民の激怒を買ひ、それが爲めに自己の生命の脅かされんことを憂慮するの餘り、倉皇として、社会黨に籍を置く人々である。然し、更にそれ以上数多いのは、バーナード・ショウがその名著「富豪の爲めの社会主義」中に諷刺してゐる一部の金満家である。これ等の連中が社会主義に接近するのは、他に理由は一つも無い。唯だ、既にあらゆる歡樂に耽り盡して、最早これ以上、何等かの新しい享樂の種を見出すことは到底不可能と覺つたが爲めに外ならぬ。この種の人々はブルジョワ社会に對し一種の嫌惡を感じ始め、曠ては、自己の階級意識を窺せしめて了ふか、然らずとしても、少くとも、自分が今日まで、自己存続の目的の爲めに、プロレタリアを對手として戰を續けて來たその本能性を抑壓して了ふのである。

尙ほ、頗る著しい現象は、遊食階級のユダヤ人にして社会黨の黨員となる者の百分比が如何に大きいかと云ふ一事である。この原因は、半ばはユダヤ人の民族的特有性に起因するらしく思はれることは、既に述べた通りであるが、更らに他の一半は、飽滿に惱まされてゐる一般富豪に特有なる一種の心理作用の結果であるらしい。又、或る場合には、これ亦ユダヤ民族の特性の一たる、取得を愛する念慮が著しく發展した場合を以てこれを説明することが出来ると思ふ。即ち、その種の人物にあつては、ブルジョワ階級に於て、既に投資と云ふ投資はあらゆる方面に試み盡した揚句、今度は河岸を換へて、恐らく労働階級に於ける何等かの企業に放資する可能性があると認めただからである。この事實は、今日まで、幾多の學者によつて實例が示されてゐるが、殊にフランスのソレルはその著「進歩の錯覺」中にこの現象を詳説してゐる。

社会主義に同情する二種のブルジョワ

然しながら、少壯ブルジョワにして身を社会主義者の群に投ずる大部分は、イタリアのフェリス・モミリヤノの口吻を藉りて云へば、完全なる誠意を有し、且つ熱烈なる善意を靈感

した結果、この舉に出たものであると断言しても決して誤らない。實際、彼等は徒らに民衆からの俗受けを希望するものでない。又、富も榮達も高給の地位も、彼等の眼中には無いのである。この種の人々の望む所は唯だ自分自らの良心を以て飽くまでも善處し、自ら顧みて一點の疚しい行動も無いと云ふ點にある。

この種の人々も亦劃然區別されたる二種に分類することが出来る。即ち、第一は、廣い同情を以て、總ての同胞を愛せんとする使徒的の人物である。彼等は人類全體を自己の理想の中に抱擁せんことを熱望するものである。第二類に屬する者は、熱狂者、過度の謹嚴者、苛酷にして犂猛なる者、容易に人を容れず、又、世に容れられざる非妥協主義者等である。

然し、ブルジョワ畑の社會主義者の中に、吾々は往々にして更らに他の典型者を見出す。彼等は上に述べた二種の者に比しては、稍不快の念を懐かしむる底の人物である。中んづく現代社會に不満だと告白する者、神經衰弱症の者、不眠症に罹れる者等の中にこの部類に屬するブルジョワ階級の社會主義者が多い。更に一層多數を占めるのは、個人的動機からの不満者、物知り顔する駄法螺吹き、法外な野心家、誇大妄想狂者などである。眞摯にして誠意ある社會主義改宗者の性狀に關しては、フランスのギユスターヴ・ル・ボンがその著「痴

人の心理」中に、甚だ剴切にこれを描寫してゐる。今その一節を次に掲げよう。ル・ボンは曰く、「侮蔑も迫害もこの種の青年には何等の痛痒を感じせしめぬ。それどころか、却つて益々彼等を亢奮せしめるのみである。實際、彼等は個人的利益も、家族も、財産も、總てを犠牲に供して、かゝつてゐる。自己存続と云ふやうな本能性は、彼等に於ては、全然消滅し去つてゐて、彼等の願望する唯一のものは殉道者たらんとすることである」と。世人の多くは國家の權威に對して反感を懐くが、その理由は、彼等がそれに到達することが出来ないからである。イソップ物語にある、餘り高過ぎて届かぬ葡萄を見て、負惜みを云ふ狐の喩へそのままである。彼等は嫉妬に燃えてゐる。權勢に對する抑へ難い渴望である。恰かも富裕なる家庭の年若い子供等が、自分等よりも富んでゐる兄の幸福に對して、羨望とこれに伴ふ憎悪とを靈感するやうなものである。彼等を刺戟する虚勢自負の觀念は、聽て彼等をして、鶏口となるも牛後たる勿れの感を懐かしめる。これ彼等が何不自由の無い富裕な幸福の家庭を捨て、プロレタリアの首領たらんと企てる所以である。

更らに、上述の數種の人々に稍や類似した他の二三の典型がある。先づ第一が、例の騎人と稱する人々である。社會的地位の低いものが高位に向つて猛襲を試みるのは勿論自然の勢

であるが、これは又その正反對で、身は世人の美望の的となつてゐる位、高い地位にありながら、かゝる地位にあつては、自分の行動が常に掣肘を受け、制限を受けることを痛感し、若しより低い地位に下つたならば、恐らく、より大なる自由を獲られるであらうと信じ、自ら好んで、社會の下層に降らうと云ふ抑へ難い欲求を覺えるのである。彼等は誠意を求めて已まない。彼等は民衆と云ふものを發見したくて堪らないのである。そして、既にその民衆なるものゝ理想を胸中に描いてゐるのである。一言で云へば、彼等は殆んど癡狂者と選ぶ所のない理想主義者なのである。

尙ほ、茲に附加すべきは、自分自身が概念してゐる自己の天才に比例する程度に於て、ブルジョワジーが自己を認めて呉れぬことに多大の不満を感じ、幻滅を覺える人々であるが、彼等は到底不満の甚だしいブルジョワジーの雰圍氣内にゐたくまされず、馳せて、プロレタリアの許に來るのであるが、勞働階級に参加せんとする彼等の動機は、甚だ茫漠たる一種の本能的希望に過ぎないのである。即ち、勞働階級は一般に修養を缺き、教育程度の低いものであるから、自分が其處に這入れば、忽ちにして重要な地位に就けるであらう、白熱光の中に自己の影像を浮出させ、民衆の牛耳を執るのは易々たるものであらうとの、頗る取りとめ

の無い希望を懷いて参加する。要するに、彼等は妄想者、買被られたる自稱天才、あらゆる方面の背教者、變節者、脱會者、文壇の放浪者、社會上の各種の萬病藥の發明者にして、世間から認められぬ者、さては、縁日の香具師、見世物の道化男にも喩ふべき徒輩であつて、畢竟、彼等は眞面目に民衆を教育しようなどと云ふ考へは毫頭なく、否、寧ろ、勞働階級を利用して、彼等自身の自我^{エゴ}を向上せしめんと圖るに過ぎないのである。

社會主義の利用

或る一政黨の黨員の數が増加することは、それに伴つて、黨の權威を増進する所以であり、假令その權威が政府その他の公的社會からは認められないにしても、少くとも、一般民衆からの尊重を意味するのであるから、黨員數の増加と云ふものは強大なる牽引力を生ずるのである。中にも、ドイツのやうな國にあつては、群居の精神が著しく發達してゐるから、黨員の少い小黨派は到底榮養不良の老衰的生存を強制されることを免れないのであるが、しかも、多くのブルジョワは、社會黨を膨大せしめさへすれば、ブルジョワ諸政黨に於て、今まで見出し得なかつたところのもの、即ち、廣大なる規模の政治的活動に對する適當なる綱領を

其處に見出すことが出来るに相違ないと確信してゐる。斯かる理由の下に、中んづく、労働黨が在野黨の地位から轉じて、政府黨とならぬまでも、少くとも、政府の協力を得る地位に達した暁には、急にその黨員の數を増加することは自然の勢である。

然しながら、斯かる場合、續々入黨して來る人々は、黨を目するに唯だ自分等自身の利己的目的を満足せしめる一の道具を以てし、これを一種の踏臺と見做し、その踏臺に立てば、自分等の野心と虚榮とを今までよりもより以上に満足せしめることが出来ると心得、黨の成功を以て、その主義の爲めに到達すべき目標、若くは理想の目的を追窮する熱心なる努力に對する報酬とは見做さず、黨を利用して、自己の個性を擴大せしむる爲めに、豫て垂涎してゐた目的に外ならずと思惟する者共なのである。「吾々は此の如き人々の凱歌を奏することを寧ろ懼れる。何となれば、それは恰かも猙猛なる野獸を鎖から放したやうなものであるからである。然し、更らに一步退いて靜かに考察すれば、所詮、これ等の徒輩は貪婪飽くことを知らぬ軟體動物の寄合ひと云ふまでのことで、黨全體に對しては、別段有害でもない」とのアルコレオの言は正に肯綮に當つてゐる。これ等の考察は重大なる事象と同時に、些細なる事件にもこれを適用することが出来る。蓋し、労働者の集合より成る政黨が一の消費組合又

は庶民銀行を設立し、これによつて、その政黨に屬する有識者に生計上の安定と勢力ある地位とを保障せんとする場合には、必ず其處に、これ亦社會主義に關する眞正の知識を全く有せず純眞なる社會主義的感情を少しも了解して居らぬ多數の職業社會主義屋が群をなして蟻集して來ることは、常に吾々の實見する所である。他の場合でもさうであるが、民主主義も亦その例に洩れず、その成功は則ちその理想の死滅を意味するのである。